



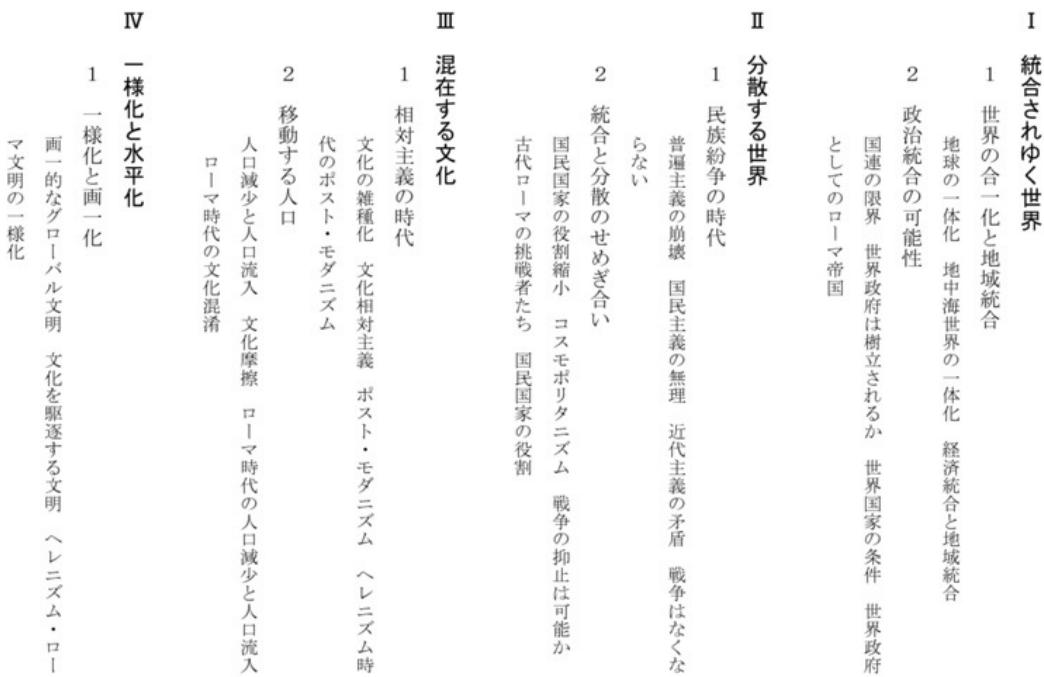
不安な時代、そして文明の衰退

—21世紀を読む—

小林 道憲

不安な時代、そして文明の衰退

「二十一世紀を読む」



2

水平化と平均化

大衆民主主義のグローバル化 グローバルな大衆文化 文明の平均

化 古代ローマ文明の大衆化

V

膨張と略奪

1 幾何級数的膨張

膨張する現代文明 世界経済の膨張と資源・エネルギー問題 世界
人口の膨張 都市の膨張と環境問題 膨張の限界 古代ローマ文明
の膨張

2 自然と生命の略奪

地球環境問題 古代ローマの環境問題 生命操作 生命操作はどこ
まで許されるか

VI

離脱する精神

1 享楽的生活

故郷喪失と美德の喪失 社会の解体 享楽的な生活 古代ローマの頬
廃心ある人たちの嘆き

2 情報過多社会

情報の過剰 散乱する精神 創造力の喪失 古代ローマの情報公害

3 仮想現実

ヴァーサ・リアリティ 身体性の欠如 実在感の喪失 マイン
ド・コントロール 帝政ローマのヴァーサ・リアリティ

4 文明の落とし子たち

体制への甘え 青少年の体験欠如 帝政ローマの野蛮化

VII

不安な時代と宗教

1 文明の衰退と不安

産業の空洞化 文明の解体と不安 ローマ文明の衰退 不安な時代

の生き方

2 不安と救い

宗教の復活 宗教と文明 帝政ローマの新宗教 終末と救い

二十一世紀は、不吉な予感をもつて出発した。アメリカで起きた同時多発テロ事件と、それに対するアメリカの報復戦争が醸し出した不安心理である。この戦争の帰趨がどうなるかは、今のところまだ十分には分からない。しかし、その結果がどうなるにしても、これをいきなりへ文明の衝突だと理解してしまうと、事態を見誤ってしまうであろう。これは一部のイスラム過激派勢力が起こした事件であって、イスラム諸国がこぞって欧米キリスト教諸国に反抗しているわけではないからである。この事件は、差し当たり、冷戦終結後アメリカが意図してきた世界の一極支配に対するイスラム過激派の側からの挑戦とみておかねばならない。とすれば、これは、二十世紀末からずっと続いている問題であり、これからも、当分の間、手を変え品を変え起きてくる問題であろう。

いつの時代でも、世界の一定地域を支配しようとした世界帝国には、それに反抗する反乱分子がいたことを考えれば、今後、アメリカが、その軍事力と政治力を駆使して、世界の一極支配を策すればするほど、それに対する反撲は跡を絶たないであろう。かつて、古代ローマや唐が、その周辺部の反乱分子によつて疲弊させられ、衰退していくたよに、今回も、世界のグローバルな支配を目指すアメリカが、多くの反抗者によつてかえつて疲弊され、消耗していかないとは限らない。こういう形でも、また、われわれが築き上げてきた豊かな現代文明は衰退していく可能性がある。二十一世紀は、衰退の気分を内包した不安な時代になるであろう。

とは言え、二十一世紀初頭の世界の急激な変化と不安定な動きを見るかぎり、世界史の将来について予測することは、極めて困難なことだと言わねばならない。もともと、未来はどうなるか分からぬものであつて、予測できるものではない。未来は複雑な要素の連関によつて生成していくものであり、無数の可能性をもつてゐる。だから、そのうちどの可能性が実現されるか、またそれがどのような影響を及ぼすかは、人知の及ぶところではない。この予測できない未来に対して、われわれは、これを、しばしば、現在の延長でとらえようとする。しかし、歴史が突然急変し、予想だにしなかつた方向に進行していくことがあることを考えれば、未来を現在の單なる延長だけだとらえることもできない。

ただ、この予測不可能な未来に足を踏み入れ、一步でも進んでいくためには、われわれは、過去から今までの歴史の経験に照らし合わせて進んで行かざるをえない。もちろん、過去に起つたことが未来にも必ず起きるわけではないが、それでも、過去から未来に照明を当てながら、未来の闇を進んで行く以外にないであろう。本書の中で、二十一世紀を論ずるのに、ヘレニズム・ローマ文明の諸事蹟をモデルに、それとの並行関係で見ていく試みをした

のは、そのことによる。

十九世紀から二十世紀を経て今世紀に至る現代文明の動きと、ヘレニズム・ローマ文明の動きはよく似た動きをしており、バラレルな関係にある。巨大な産業技術によって支配された現代文明の来歴を一瞥するなら、十九世紀はヨーロッパ近代文明の拡大の時代、二十世紀は非ヨーロッパの抬頭の時代、二十一世紀は世界の合一化の時代、と見ることができる。この現代文明にヘレニズム・ローマ文明を対置するなら、紀元前四世紀はギリシア文明の地中海世界への拡大の時代、紀元前三世紀から紀元前二世紀はローマの抬頭の時代、紀元前一世紀以後はローマによる地中海世界統一の時代、と見ることができる。現代文明とヘレニズム・ローマ文明には、並行関係が見られるのである。

もちろん、二十一世紀の地球文明をとらえるのに、ヘレニズム・ローマ文明との並行関係をもつてするとしても、それは、どこまでも思考の典型としてであって、そこから、決定論的な法則を読み取ろうとするものではない。現代文明をヘレニズム・ローマ文明との並行関係からとらえようとした先駆者としては、すでに、二十世紀のシュベングラーやトイインビーがいるが、彼らは、この並行関係を決定論的にとらえすぎていたきらいがある。だが、歴史が偶然によって左右されていることを考え合わせるなら、ヘレニズム・ローマ文明で起きたことと同じことが、必ず現代文明でも起きると考へることはできないであろう。

しかし、それにもかかわらず、荒海を航海するにも海図が必要なように、見知らぬ未来に進んで行くには、過去の歴史的経験から引き出されてきた知識が必要である。われわれにとつて、過去の歴史はいわば教師であって、それを鑑にして、まだ実現していない未来を見ていく以外にないであろう。本書は、そのような考え方を背景にして、特に古代ローマの事蹟を参考に、二十一世紀の地球文明を、政治から宗教まで様々な局面からとらえようとした文明論的試みである。

I

統合されゆく世界

地球の一体化

人は移動し連絡する動物であつて、そのことによって、他と交流し、文明を形成してきた。交通・通信機関はそのためにある。十九・二十世紀の人類も、その近代的技術を使って、これを高度に発達させてきた。この交通・通信機関の目覚ましい発達が、現代の地球文明の発展に寄与した点は量り知れない。

移動の手段としての交通機関は、十九・二十世紀の延長上に、二十一世紀も極限にまで発展していくであろう。現に、今世紀中には、前世紀に別々に研究が進んでいた宇宙分野と航空分野の技術が融合し、音速の二倍にも及ぶ超音速旅客機が開発され、大西洋や太平洋を一飛びすることが可能になると言われている。この超音速旅客機を使えば、地球上のどの地点からも、他の地点へ移動するのに、数時間ですむ時代がやってくることになる。海上交通や陸上交通でも、超高速船舶やリニア・モーターカーが実用化され、今世紀の交通システムは、その姿を一変させるであろう。二十世紀も、自動車、鉄道、航空機、船舶など、交通機関を高度に発達させ、人の移動を容易にしてきた。二十一世紀は、さらに、これが飛躍的に発達するであろう。

交通機関の発達は、短時間で遠距離の地点に移動することを可能にし、そのことによつて時間と空間の障壁をなくし、人の行動範囲を大幅に拡大する。人類は、近代以来、速度を極限にまで追求することによって、時間と空間を征服してきたのである。

情報連絡の手段としての通信機関の発達に至れば、時間と空間はほとんど無化されてしまう。例えば、二十世紀末に登場し、通信の分野に大変革を巻き起こしたインターネットは、今も、地球的規模で日増しに成長し、世界の隅々にその網の目を拡げ続けている。今世紀には、このインターネットが、世界中に普及し、世界中が一つに結ばれる。光ファイバーによる情報スーパーハイエイが地球上の隅々に張り巡られ、手軽に光ネットに接続できる」とになる。

インターネットを利用すれば、世界規模の膨大な情報を、地球上の位置に關係なく、自宅や職場で居ながらにして、必要な時に自由に検索し、それを共有することができる。そればかりでなく、インターネットを利用すれば、情報の創作者として、全世界の人々に向かつて、自分のメッセージを発信することができる。つまり、インターネットは、情報の受信と発信を双方あるいは多重方向で行なうことができるから、時間・空間の制約から解放されて、情報の縦横無尽の交換、眞の意味のコミュニケーションができる。いつでも自由に世界各国の人達とコミュニケーションができるインターネットの発達は、時間と空間の障壁を完全に

打ち破つたものと言える。今世紀は、こうしたインターネット上の仮想社会が、われわれの新しい生活空間になるであろう。

インターネットのような多対多の新しいコミュニケーションとは違つて、従来の一対多のマス・コミュニケーションによる大量情報提供の方も、今世紀は大きく変貌する。例えば、テレビ放送も、多チャンネル化したデジタル衛星放送によって、世界各地のどの分野の情報もリアルタイムで見ることができる。二十一世紀は、世界中の多方面な情報を、大量記録の可能なホームサーバーを使って録画し、ハイビジョン化した壁掛けテレビで、見たい時に探し出して見るのが、日常的なことになる。

さらに、今世紀は、情報のネットワーク化と高度なデジタル技術の発達によって、各分野の技術融合が急速に進展する。放送と通信も緊密に融合し、マルチメディア化する。数字、文字、音声、音楽、静止画、アニメ、動画などの情報がすべてデジタル化して、一つのまとまった情報としてやりとりされる。二十世紀末に急速に普及した携帯電話も、世界中を即時に結びつけ、動画や音楽の伝送もできる。そして、インターネットやデジタル衛星放送とともに結びつき、全世界とのリアルタイムの情報交換が可能になる。どれも、従来の一方向ではなく、双方向、対話型、インターネットタイプになっていくのが、今世紀の情報通信技術の不可避の方向である。

こうして、われわれのもとには、二十世紀以上に、多くの新しいコミュニケーション機器が入ってきて、直接世界中と結びつく。デジタル衛星テレビや自動翻訳付き携帯電話、世界中と結びついたテレビ電話、ファックス、インターネット、これらのものが日常不可欠な道具になる。われわれ一人一人が世界中の情報により開かれたものとなり、前世紀と比べても、その情報量はより増大し、より広範になる。情報は、時間・空間の限界を越えて、すべて記号化され、われわれの手元に直接入つてくことができるから、われわれは、国境や地域社会や時には隣人や家庭をも飛び越して、ますます世界に開かれたものとなる。われわれ一人一人が、グローバルな情報ネットワーク社会に直接組み込まれていくのである。なるほど、二十世紀においてすでにそうではあったのだが、二十一世紀は、この方向がさらに進展することであろう。

時間と空間の制約を越えて、地球のどこにいても、瞬時に情報を入手し発信することができる二十一世紀の高度情報ネットワーク社会は、地球全体を一つの世界にまとめることが可能にする。すでに、われわれは、時間と空間を超えた單一の世界に住んでおり、世界は一つという感覚をもつている。なるほど、二十世紀も、ラジオ、テレビ、電信、電話などの普及とともに、情報化革命は進展していた。情報網が縦横無尽に張り巡らされ、人々がその体制の中に組み込まれたのは、前世紀以来の出来事である。二十一世紀は、二十世紀以来の高度情報化の進展によって、地球全体を場とするグローバルな文明が形成されるであろう。

国境を越えて地球大的に拡大するのは、情報だけではない。交通・通信のグローバル化とともに、ヒト、モノ、カネの巨大な流れが国境を越えて激しく流动し、世界はますます相互依存度を高めていく。現に、盛んな国際貿易や多国籍企業の活躍などによる経済のグローバル化は、市場のグローバル化をもたらし、その結果、国際金融市场や株式市場で、ヴァーチャル化した巨大なマネーが日々国境を越えて取引されている。このような国境を越えた市場経済は、すでに国民経済という枠組みを消滅させつつあり、世界の合一化をもたらしある。

そればかりでなく、地球規模の環境破壊さえもが、国境を越えて、地球の一体化をもたらしつつある。大気汚染物質は国境を越えて地球大的に拡がり、酸性雨を降らし、オゾン層を破壊する。地球環境問題は、二十世紀が二十一世紀に残した最大の課題の一つであるが、この問題も、一国だけでは解決することができず、逆に、世界の合一化を促進させる方向に動いている。

人類は、時間と空間を無化して、地球を圧縮し、世界を一体化させたのである。今日、すでに、地球は狭くなり、世界は縮小してしまっている。実際、今日の地球は、古代の地中海以上に圧縮されてしまっているのである。そのため、人々の相互結合性と相互依存はますます増大し、地球上のどの地点で起こったことでも、ただちに全世界に影響が現われる。われわれは、地球のどの地点も、心理的に近い、という感覚をもつて至った。世界は一つになり、單一の場所となつたのである。この世界の合一化と単一化という現象は、人類史上初めてのことである。人工衛星から一目で見られた丸く青い地球は、單一な場所としての地球という概念を感じ的につつわした。地球の單一化のもとで、一つの地球的文明が生成しつつあるというのが、二十一世紀初頭の文明史的位置である。それは、産業革命以来の科学技術文明の進展の最終形態だと言えよう。

地中海世界の一体化

もつとも、地球上の一定地域に限るなら、そこを統合し單一な文明圏を形成した事例は、今までの人類史上にも数多く見られる。多くの民族と文化圏を統合しながら、より大きな生存単位へと向かっていく歴史的動きは、必ずしも今に始まつたわけではなく、ずっと昔からあつたのだと言わねばならない。もともと、国境を越えるものは、今日の交通・通信システムや経済システムだけとは限らない。古代の交易などに伴うヒト・モノ・カネ・情報の交流や交換にしても、古代の世界宗教の伝播にしても、国境を越えた交流は以前からあつたことである。大陸をまたぐキリスト教文明、イスラム文明、仏教文明など、世界宗教がつくりだす文明圏も、ある意味で、かつての「世界の合一化」の動きでもあつたのである。

なかでも、古代のヘレニズムからローマにかけての地中海世界の統一は、今日の地球全体

の一体化にも匹敵するような動きを示している。古代ギリシアの文化を一般化させ、地中海全域をギリシア化することによって、一つの地中海文明をつくりあげたのは、ヘレニズム時代であった。紀元前四世紀のアレクサンドロスの東征と彼の後継者たちの支配によって、古代ギリシアの文化は地中海世界の広大な地域に伝播し、地中海世界はギリシア化した。このヘレニズムの形成によって、古いボリスの時代は終わり、新しいコスマボリスの時代が到来した。それとともに、世界を一つと考える普遍主義が生まれ、人々の居住地域を一体としてみる「オイクーメネー」の観念が成立した。今日いう「地球村」という観念に近いものである。

イタリア半島にいたローマ人は、この地中海全域に拡がったギリシア文化を積極的に受容し、これに同化して、次第に地中海世界に進出。最終的に地中海世界全域を政治的に統一し、古代ローマ帝国を形成した。古代ローマの地中海支配の完成とともに、地中海世界は、今日の地球全域と同様、單一の世界として統合されていったのである。

古代ローマ帝国が広大な地中海世界を統一し、数百年にわたって支配しえたのは、帝国全土に張り巡らされた道路網によるところが大きい。「すべての道はローマに通ず」と言われるようだ。ローマ市を中心に地中海世界各地に放射していた道路網が、古代ローマ帝国の維持発展を可能にしていたのである。帝国の全版図には、十万キロに及ぶ道路網が整備され、この道路網の上に秩序正しい交通が展開していた。道路には、一キロごとに里程標が設けられ、十キロごとに駅が置かれ、食堂、宿舎、厩舎、貸馬が備わっていた。三十キロおきには、これよりも広くて大きな宿場が置かれ、娼家まであった。この道路網を使って郵便制度も整備され、主に国家の通信に利用された。高地には灯台を建て、光の信号を送り、電報の代わりとした。これは、いわば古代の光通信であるが、古代ローマの道路網は、現代の高速道路と高速通信網の両方を兼ねていたのである。この道路網を、軍隊が移動し、それに必要な物資が輸送され、伝令が行き交い、ローマの地中海支配とローマ文明の繁栄をもたらしたのである。

古代ローマでは、陸上交通ばかりでなく、海上交通や河川交通も盛んで、しかも、道路や河川や海には警備隊が設置され、安全確保の努力がなされていた。このような高度に整備された交通網を通して、ヒト、モノ、カネ、情報の交流や交換が盛んに行なわれ、地中海世界は一つの交易圏、政治圏にまとめられていたのである。この交通網は、古代ローマ帝国の支配の源泉だったばかりでなく、ローマ文化の周辺地域への伝播、また、周辺地域の文化のローマへの伝播にも、大きな役割を果たした。古代ローマ帝国における交通・通信網の整備は、その政治的統一に大きな役割を果たすとともに、地中海世界を一つの世界にまとめあげるのに大きく寄与したのである。それは、今日の交通・通信網の高度な発展が、地球を一体化させるのに大きく貢献しているのと同様である。

経済統合と地域統合

急速な勢いで進展し続ける高度情報化と経済依存の高まりによつて、今日の地球は縮小し、世界はすでに合一化しつつある。二十一世紀は、これからに進展して、ちょうど単細胞生物が多細胞生物になつていくように、世界全体が、経済的にも政治的にも統合され、古代ローマ帝国のよう、単一の社会を形成することになるであろう。

貿易や投資の障害を除去し、国民国家のあり方を越えて経済的統合をはかり、各地域を統合していくこうとする今日の動きは、世界の統合の一過程である。現に、ヨーロッパ地域は、EUを中心に経済統合が進展し、南北アメリカ大陸は、アメリカを中心とした自由貿易圏の形成に向かい、アジアも経済の相互依存度を高めている。世界は、EU、アメリカ、アジアを極にして、三つの経済圏に統合されつある。さらに、この三大経済圏相互の依存度も切り離しがたい。二十一世紀の文明変動は、ヨーロッパ圏、アメリカ圏、アジア圏を軸しながら、世界全体の統合化に向かっていると言えよう。

このうち、ヨーロッパ地域は、市場統合から通貨統合を成功させ、経済的には、すでに欧洲經濟領域（EEA）を形成している。さらに、安全保障面でも、全欧安全保障協力會議（CSCCE）を形成し、政治統合を最終目標に、統一欧洲建設へと向かっている。このヨーロッパの地域統合の拡大と深化は、ヨーロッパ諸国の経済的・政治的後退の克服を目指すとともに、従来の国民国家の枠組を越えて、全ヨーロッパを包括する（欧洲合衆国）の形成に向かう動きとみてよいであろう。現に、EUは、中欧諸国や東欧諸国をも組み入れ、さらに、旧ソ連の一部共和国やロシアそのものとも連結して、汎欧洲統合の形成を視野に入れている。こうして、キリスト教と民主主義を共通項とする大ヨーロッパ経済圏を形成しようというのが、今世紀のEUの戦略である。

他方、アメリカは、北米三国による北アメリカ自由貿易協定（NAFTA）を拡大して、これを中南米諸国に及ぼし、南北アメリカ全体の経済的統合を目指している。中南米諸国間でもすでに自由貿易協定が結ばれ、経済統合が進みつつあるが、これも、最終的にはNAFTAと統合し、米州自由貿易地域（FTAA）を形成することになるであろう。

また、アジア地域も、日本をはじめ、中国、韓国、台湾、ASEAN諸国との経済発展は目覚ましく、その急速な勢いは南アジアにも浸透し、アジア地域の経済的統合をもたらしつつある。アジアの自由貿易圏としては、今のところ、ASEAN自由貿易地域（AFTA）がある。だが、アジアも、EUやNAFTA同様の自由貿易圏を形成する必要があるとすれば、他のアジア諸国をも組み入れて、アジア域内での貿易と投資の促進を目指して、全アジア自由貿易圏を形成するのが望ましいであろう。

なるほど、アジアは、政治的にも文化的にも多様であつて、統合を進めていく条件は必ずしも有利ではない。しかし、アジアは、体制の違いや宗教・文化の違いを越えて、何よりも、

急速な経済発展と市場の力の方が実質的な統合を推進していくことになるであろう。すでに、このアジアの急速な経済発展は、アジアの自由主義諸国の民主化をほとんど完成してしまっている。また、この急速な経済発展に影響され、アジアの共産主義諸国も改革開放路線に転換し、アジアの経済発展に参加している。この経済発展がさらにすすんでいくなら、共産主義諸国における政治的自由化の要求も高まり、アジアの共産主義も終焉に向かうであろう。とすれば、南北朝鮮の統一や中国の民主化も、二十一世紀前半のそれほど遠くない時期に可能となる。

さらに、アジア地域の経済発展は、南北アメリカ大陸経済圏とも、太平洋を介して深く結びついている。例えば、アジア太平洋経済協力閣僚会議（APEC）は、多くの環太平洋諸国をメンバーとしている。これは、太平洋地域の各国が、宗教、民族、政治体制、経済発展段階を越えて、自由で開かれた貿易圏を形成しようとする動きである。この地域で貿易や投資の自由化が進み、これが、世界貿易機構（WTO）などを介して、EUとも連絡すれば、世界全体の自由貿易圏が完成することになる。こうして、アジア、オーストラリア、南北アメリカ、ヨーロッパ、つまりアジア太平洋地域と大西洋地域とが結ばれ、世界的な経済統合が実現する。今世紀の世界は、このようなグローバルな経済統合に向かって進展していくであろう。

もつとも、今日進展しつつある地域統合は、逆に、各地域間の対立を激化させ、相互依存を後退させる危険性ももつていて。特に、地域の経済競争力が弱まるごと、保護主義が抬頭していく。EUも、地域内では障壁は少ないと、外の世界に対しては排他的になる恐れがある。しかし、この地域主義がWTOと補完関係を形成し、WTOのルールとの整合性のもとにおかれるなら、地域の保護主義は抑制できる。地域主義は、むしろ相互依存世界の実現を目指し、国際協調をはかつていかねばならない。WTOを強化し、相互主義を徹底するなら、各地域の経済圏がブロック化し排他的になる可能性は少ないであろう。

2 政治統合の可能性

国連の限界

このように、世界の経済的相互依存度が高まり、国際協調と相互主義の徹底によって、グローバルな経済統合が実現していくなら、その延長上に、世界全体の政治統合の道も開けてくる。前世紀以来続けられてきた国連機能の強化は、このグローバルな政治統合に向けての第一歩となる。国連は、前世紀に続き、今世紀もまた、大きな役割を果たすことを期待されている。期待される役割は、国家間紛争や民族紛争の調停、テロ活動や国際犯罪の抑止など、国際的な安全保障や危機管理、さらに南の貧困問題、人口爆発、難民流出、防疫、地球環境問題

など、地球的規模の問題の解決である。

とはいっても、安全保障問題一つをとっても、国連活動には限界があることも確かである。現に、核兵器や化学兵器や生物兵器の監視なども、国連の安全保障上の役割として重要なものである。しかし、旧ソ連下にあった各共和国への核の拡散、第三世界の緊張からくる核開発、化学兵器や生物兵器の開発は、なお拡大していく傾向にある。これを抑止することは、国連自身が強力な軍事力と権限をもっていないために、国連のみの力では不可能に近い。二十世紀末以来頻発している民族紛争や内戦の抑止に対しても、国連は十分な能力を発揮することができないことがすでに明らかになっている。望むらくは、国連の安全保障機能を強化して、新たな国際安全保障機構を構築する必要があるが、今のところは、それも十分ではない。わずかに国連に許されている機能は、平和維持部隊による停戦監視や選挙監視などであるが、これも、頻発する内戦や民族紛争の前に十分な能力を発揮していない。

南北間の格差を是正して、南の貧困を克服することも、国連の重要な役割の一つである。しかし、この点でも、むしろ、北の先進国が南の第三世界へ様々な形で直接援助する方が、最も早い解決となる。経済力をもたない国連の果たす役割には、大きな限界がある。国連は、もともと、安全保障や南北格差は正上で主導的な役割や機能をもってはいない。国連の役割は、どこまでも、調整機関または奉仕機関にどどまると言わねばならない。

国連には、さらに機構上の問題がある。安全保障理事会の常任理事国のもつ拒否権も、重要問題に関する意思決定を阻害している。また、そのメンバー構成上でも、財政負担との兼ね合いで不釣り合いがあり、これも効果的な意思決定を阻害している。もともと、この問題は、国連の機構改革の機運の中で、そう遠くない時期に解決されるではある。しかし、それに伴って、国連憲章を修正しようとすれば、パンドラの箱を開けたように、第三世界の加盟国からも様々な意見が出され、ほとんどコントロールできなくなるであろう。さらに、国連は、財政上危機に陥っている。現に、常任理事国をも含め、多くの国が、国連分担金をしばしば滞納している。そのため、国連は、経済的社会的問題の解決はもちろん、平和維持活動さえ、財政的にままならぬ状況に陥っている。

国連の力を強化するためには、二十一世紀の初頭に唯一残った超大国であるアメリカの力に頼る以外にない。確かに、アメリカは、地球上の多くの地域の問題に干渉する能力をもつ唯一の国家である。現に、アメリカ自身、軍事侵略、国際テロ、自然災害、民主主義を打倒する企て、大規模な人権侵害などには、介入する意思をもっている。その点では、アメリカの果たす役割は大きいものがある。しかし、アメリカと国連との間には、その意図や戦略に微妙にズレがある。アメリカの力がなければ国連は力をもつことができないが、それがあると、国連は独自のアイデンティティを失う恐れがある。また、国連がイニシアティブをもつて何かに当たるとしても、必ずしも、アメリカが同意するとは限らない。国連の平和維

持活動への協力にあつても、アメリカは、その部隊を国連の指揮下に置くことを嫌う。また、アメリカも、他の諸国からの人や資金の供給なくして平和維持活動をすることは、消極的である。さらに、アメリカ自身の経済力の低下もある。アメリカの指導力にも限界はあると言わねばならない。

国連は、もともと、設立以来、加盟国の主権を基礎に置いて活動してきた。国連は各主権国家の意志に依存し、その意志を無視しては成り立ちえない。しかも、国連に加盟する主権国家は急増している。とすれば、このままの形では、国連が世界全体の安全保障や経済社会問題の解決に主要な役割を担う時代が到来すると考えることはできない。国連にはそれほど多くのものを期待できないとみておいた方がよい。むしろ、二十一世紀は、二十世紀同様、その時々に主導的立場にある諸大国と、その影響下にある多くの小国が入り乱れて進んでいく混沌とした時代が続くとみておくべきであろう。

世界政府は樹立されるか

それにもかかわらず、国連の能力の限界を克服し、世界全体の安全保障と経済社会問題の解決に強力な役割を担う何らかの機関が必要だとすれば、遠い将来、世界政府の樹立も必要になってくる。二十一世紀も、科学技術は高度に発達し、交通・通信技術も進展し、世界経済もより一体化し、世界はより緊密に結ばれていくであろう。ならば、これを基盤に世界政府を樹立することは、技術的には不可能ではない。

十九世紀は、西欧勢力の世界的拡大の時代であり、二十世紀は、それに対する非西欧勢力からの反作用の時代であった。だが、二十一世紀は、この作用と反作用が総合され、世界の合一化の時代とならねばならない。十九世紀以来の西洋近代文明の地理的拡大は、結局、人類を単一の社会に統合することに向かっていたことになる。とするなら、その延長上に、世界の政治的統合を目指す世界政府の樹立がプログラムにのつていても、不思議ではない。

今までの長い人類の歴史を振り返ってみても、古代ローマ帝国や秦・漢帝国など、世界國家といえるものが形成される前には、長い動乱の時期を経る必要があった。十九世紀以来、二十世紀を経て、今世紀に至る現代文明の地球的膨張の過程でも、すでに、長い戦争と革命の時代を経験してきた。二十世紀は、特に、そのような動乱の世紀だったとみてよいであろう。互いに相食む苦闘を通してのみ、人類はようやく統合に向けて努力しうる段階に至り着く。とすれば、二十一世紀は、何らかの形で、政治的な世界統合の機運が盛り上がつてくる時代になつてもよい。

十九・二十世紀の近代文明は、政治的には、国民国家によつて担われた。しかし、二十一世紀の現段階を見るなら、すでに国民国家の機能は制限されつつあり、国家間の緊密な連合形態に入りしつつある。発展する産業技術文明の力によつて、この動きが加速され、国民国

家の規模を越えたより大きな世界国家に向けて、世界の政治的統合が進展する可能性がないわけではない。もともと、近代の国民国家そのものが、それ以前のより小さな領邦国家を統合して形成されてきたものであった。それは、近代の産業社会の規模に見合う政治的機構であつた。しかし、近代の枠を越えて地球的大に膨張しつつある今日の科学技術文明や産業社会は、国民国家の枠を越えて、それらを世界政府にまで統合することを要求している。

だが、この世界政府の樹立は、それほど容易なものではないであろう。これまでの世界国家は、多くの場合、長い戦国時代をくぐり抜け、他国を武力によって屈伏させた強力な国家によつて樹立してきた。しかし、二十世紀の動乱の時代をくぐり抜けてきたアメリカにも、それほどの絶大な指導力は期待できない。とするなら、今回の世界政府樹立は、大多数の國家の同意と契約によつて達成されねばならないであろう。

その点では、二十世紀末から今日にかけて統合の努力をしつつあるEUは参考になる。ヨーロッパも、十五・十六世紀の近世が始まつて以来、二十世紀末の冷戦の終結まで、およそ五、六百年の間、各国は合從連衡を繰り返し、ある意味で、長い戦国時代を戦つてきたとも言うことができる。その結果、ヨーロッパは、もはや、紛争解決の手段としては、戦争という手段に訴えられない時代に入った。ヨーロッパが、全欧安全保障協力会議（CSCCE）を成功させ、EUの構築を通して、政治的統合に向かっているのは、その現われである。しかも、この方向は、強力な一国の武力による統合ではなく、多くの民主主義国家の同意と契約によつて成立している。

このEUの例にならうなら、地球全体の政治的統合も、契約による以外にないであろう。世界政府の樹立の方法としては、現在ある国際連合の機能と機構を強化して世界政府にまで昇格させる方法と、新たに世界人民大会を開催して世界政府をつくる方法の二通りが考えられている。だが、両者のうち、国連の改修による世界政府の樹立の方がより現実的だとされる。しかも、今日存在する主権国家の主権を全面的に剥奪することは不可能だから、その主権の一部を世界政府に委ねるにとどめ、その他の権限については、各国の自治にまかせる必要がある。したがつて、比較的実現可能な世界政府は、連邦制をとつた世界政府ということになる。

とはいゝ、世界政府建設のためには、各国家は、少なくとも、その主権の一部を自発的に放棄し、世界政府に委ねなければならない。これは、各国家に相当の犠牲を強いるものであり、それに各国家が同意するかどうかは定かではない。現在、世界を構成する主権国家が保持している主権の中には、統治権、徵税権、警察権、外交権、対外的軍事力などがある。世界政府が何よりも戦争の抑止を第一の目的としているとすれば、これらの国家主権のうち、まず廃止あるいは制限されねばならない権限は、軍事力であろう。

世界政府樹立の最大の目標は、国家間の戦争をなくし、世界に恒久的な平和と安全をもたらす

らすことである。そのため、国際的に強力な権力を確立し、それを背景に、強力な法秩序を作り出そうとするのが、世界政府の意図するところである。もしも、そのような強力な権力によって、無秩序な世界が統一され、強大な世界政府ができたなら、これまでの国家間の戦争は相当程度抑止されるであろう。

だが、そのためには、各国家は、少なくとも、戦争の防止に直接必要な権限を、世界政府に委譲しなければならない。何よりも、各国家の戦争遂行能力をなくすために、各国家がもつ軍事力と兵器（核兵器や化学兵器を含む）は、国内の秩序維持内に制限され、他は廃棄、または世界政府に提供されねばならない。さらに、これに違反して国家が侵略を企てた場合、それを事前に監視し査察する権限や、侵略を計画した国家を処罰する権限も、世界政府に与えられねばならない。つまり、世界政府は、世界的な刀狩りを実行する権力をもたなければ、戦争をなくすことはできないのである。

確かに、各国家がその主権の一部を放棄し、軍事力と武器を捨て、世界政府のもとに結集するなら、戦争はなくなるであろう。しかし、このためには、世界政府自身が、その命令を執行するに足るだけの強制力、つまり独自の強力な軍事力（常備軍）をもつ必要がある。また、その軍事力維持のための財源確保を目的として、世界政府自身による広範な徵税権も認める必要がある。このようにして、強力な軍事力をもつた世界政府が、それを背景に強力な法秩序を打ち立てたなら、実質的な世界平和が達成され、安定した世界秩序がもたらされることになる。もともと、平和というものは、より小さな暴力をより大きな暴力によつて抑制することなしには、達成されえないからである。

世界国家の条件

世界政府を樹立し、地球全体を政治的に統合するには、單に軍事的な統合だけでなく、政治制度、法制度、言語、曆法、度量衡、通貨などの統合が必要である。なかでも、言語の統一は重要な課題になる。新しい世界政府には、どの国家にも民族にも偏らない新しい国際語の創造と普及が望ましい。しかし、言語というものは伝統に根差した文化なのだから、人工的に創られた言語はおそらく普及しないであろう。十九世紀以来努力されてきたエスペランゴ語も、グローバルな言語にはなりえなかつた。ヘレニズム時代の共通ギリシア語（コインテ）やローマ時代のラテン語の源泉が、それぞれの民族言語に根差していることを考え合わせるなら、今日の状況では、この世界共通語としては、英語が最も代表的なものと言える。一方、言語は常に文化と一体であるから、それぞれの民族文化を表現するには、それぞれの民族言語を必要とする。これを無理に共通語によつて制圧してしまつたなら、文化は死ぬし、言語も死ぬ。だから、来たるべき世界国家は、公用語と日常語が併用される二重言語世界にならざるをえない。

また、新たに登場する世界国家は、宗教的には、その複数性を認める柔軟なものでなければならない。なるほど、國家の統一には、しばしば宗教が必要であった。古代ローマ帝国も最終的にはキリスト教を国教としたように、世界国家には世界宗教が対応しなければならない。しかし、今日の世界の宗教は多種多様であるから、そのどれか一つを新しい世界国家の宗教とする事はできない。また、近代の国民国家も多かれ少なかれ政教分離の方向に向かつていたのだから、新しい世界政府も、純然たる世俗国家として、宗教と分離された国家でなければならぬ。

いずれにしても、新しい世界国家は、宗教的にも、言語的にも、文化的にも、民族的にも、多種多様な集団を統合しなければならない。したがって、新しい世界国家は、その政治的統合の技術の中には、諸文化が共存できるシステムを作り出していくかねばならない。新しい世界国家の実現は、（多様性の中の）共存のシステムを作るための政治的努力なのである。

この点では、移民の國として出発したアメリカは、多民族を統治する技術を溜め込んだ國家として注目に値する。アメリカは、ここ四百年ほど、大きな多民族国家として、その統合の実験を敢行した国である。アメリカでは、どのような民族的ルーツをもつていようとも、そのアイデンティティを捨てることなく、星条旗と民主主義と英語という国家的アイデンティティの中に統合されうる。この点から言えば、アメリカは、なお、将来の世界国家形成のためにの知恵とノウハウをもつており、世界国家形成上大きな役割を果たす可能性をもつている。

なるほど、アメリカは、今日、世界経済の多極化の中で、その地位を低下させている。だから、二十世紀に実現したようなバクス・アメリカーナを、二十一世紀も持続することができるかどうかは分からぬ。強大な霸権国になるためには、強大な経済力をもち、世界の安全保障を支える強大な軍事力と強力な政治力をもつていなければならない。だが、今日のアメリカは、軍事力や政治力は別として、経済的な面では対外債務に頼っており、アメリカの求心力は低下しつつあるとみなければならない。アメリカが経済・軍事・政治すべての面で世界秩序形成の立役者であった時代は、すでに過ぎ去っている。アメリカは、依然として、軍事面で、世界の警察官としての意欲をもつてはいるが、それを自力で維持するだけの資金力をもつていない。アメリカのヘグモニーもそれほど長く続くものではないであろう。

しかし、それでも、アメリカには、世界の警察官として、地球全体の安全保障を策し、世界全体の秩序を保とうとする軍事的・政治的な意欲がある。アメリカは、また、自由主義や民主主義の擁護、自由貿易体制の推進、新技術開発などの点で、大きな力をもつてゐる。アメリカは、なお、今後の国際政治における世界秩序形成のために、重要な役割を果たす能力を保持していると言えよう。地政学的に言つても、アメリカは、大西洋国家でもあり、太平洋国家でもあり、両者を橋渡しできる機軸国家である。アメリカは、二十一世紀も、当分

の間は、世界のリーダーであり続けるであろう。もちろん、そのためには、EUや日本の協力が必要である。これらの国々がアメリカとの緊密な連携を保ち、アメリカを補完していく

なら、アメリカは、今世紀中も、国際秩序維持の主要な機軸国家でありうる。とすれば、将来的世界政府形成に果たすアメリカの役割も、相当大きなものがあると言わねばならない。

国家は固定的なものではなく、どこまでも生成発展するものである。だから、諸国家が、国民国家の枠を破って、より広範な国家へ発展していくことは、いつでもありうる。したがって、その延長上に、遠い将来、地球全体を統括する世界国家が形成されることは、ありえないことではない。その世界国家こそ、〈世界と国家と個人／普遍と特殊と個別〉を総合する唯一の政治システムであることには違いない。

世界政府としてのローマ帝国

古代地中海世界でも、紀元前二七年のローマ帝国の成立は、いわば、その当時の世界政府の樹立であったとも言える。ローマ人が長い年月をかけて完成した帝国は、地中海世界を政治的に統合し、これを一つの世界とし、そこにローマによる平和をもたらした。それは、一つの世界の中に多くの民族を抱え、多くの都市国家を従属させた巨大な世界国家であつた。この点では、ローマによって支配された地中海世界は、多種多様な国家や民族によつて構成されている現代のグローバルな世界によく似ている。

ローマ文明の歴史は、その誕生から興隆、衰退や滅亡に至る文明の全過程をわれわれに見せてくれる文明史の典型である。もしも、このローマの長い文明史を模範にして、現代文明の過程を考えるとすると、現代文明が、ローマ帝国のように世界国家の段階に至り着き、世界政府を樹立しなければならない時が来ることも、十分予想される。

もつとも、ローマによる地中海世界の政治的統合も、一朝一夕にして出来上がったわけではなく、それ以前のヘレニズム時代の文化的・社会的な統合が先行していた。アレクサンドロスの東征からアレクサンドロスの後継国家の時代に、ギリシア文化が地中海世界に広く伝播し、地中海世界はギリシア化していた。この過程の中で、ローマ自身も、地中海制覇に乗り出す前から、ギリシア化していた。このヘレニズム時代に、地中海世界の海上交通や河川交通、陸上交通が発達し、交易圏も拡大。そのため、ヘレニズム世界を構成していた諸都市国家の制度とその主権も限界に達し、都市国家（ポリス）はすでに政治生活の単位としては間に合わなくなりつづつあった。より強力な世界国家（コスモポリス）の成立が望まれていたのである。

ローマ帝国は、このような文化的地ならしの上に成立した。かくて、ローマ帝国の役割は、ギリシア文化を普遍化し、これを普及させるとともに、その中にオリエントなどの先行文明をまとめあげ、地中海世界に一つの統一された文明を形成することに置かれた。その意味で

は、ローマ帝国の成立は、アレクサンドロスの理想を実現したことになる。実際、ローマ帝国の最初の元首アウグストゥスは、バクス・ロマーナ（ローマによる平和）のモットーとして、アレクサンドロスが提唱した「モノイア」つまり「協調」の理想を掲げたのである。このヘレニズムから帝政ローマに至る地中海文明の歴史は、近代ヨーロッパ文明の世界的拡大を背景に、世界の合一化が進展し、世界政府の樹立を必要としている現代文明とも、並行関係にある。

ローマ帝国の最盛期の版図は、イベリア半島、中南部ヨーロッパ、東ヨーロッパ、小アジア、シリア、エジプト、北アフリカに達する広大な領域であった。ローマ帝国は、この広大な版図を一つの交易圏にまとめ、そこに住む諸民族を一つに統合し、単一の支配権を確立した。首都ローマは、人口百万から百二十万を擁する古代最大の巨大都市であった。ローマ帝国は、首都ローマを中心として縦横に結ばれた都市連合国家であった。ローマは、他の都市国家を同盟市とし、これに自治権を与えるながら、その支配権を延ばし、次々とその勢力圏を拡大していくのである。ローマ帝国といつても、各都市国家を結ぶ一種の国際的同盟のようなものであった。だから、ローマの支配は、間接統治を原則とした。

もちろん、カルタゴやユダヤやマケドニアのように、ローマの霸権に抵抗した民族は、ことごとく壊滅させられ、属州化された。また、自治権を確保した諸都市も、事实上、次第にローマの属州と化していき、ローマ政府の直轄機関になつていった。また、各属州も、積極的にローマ文化を受け入れ、これを文明開化とみなしてもいたのである。

だから、ローマ帝国といつても、ある面では、今日のアメリカとその同盟国のようなものだつたとも言える。アメリカは、アジアのいくつかの国家とは二国間同盟を結び、ヨーロッパとは集団安全保障条約を締結し、自らの勢力圏を確保している。しかも、アジアの同盟国はアメリカ文化を受け入れ、アメリカ化することを、近代化とみなしてきたのである。

ローマ人は、また、その帝国の発展とともに、常に変化する状況に合わせて、法制度を整備し、膨大な法体系を形成していく。なかでも、開放的な市民権政策は、ローマ帝国を全民族の共通の国家とする上で、大きな役割を果たした。ローマ帝国は、人種的にはローマ人でない異民族に、法的に、次々とローマ人としての市民権を与え、同化する政策を取つたのである。その過程は漸進的に進められたが、紀元二二二年のカラカラ帝が発したアントニヌス勅令によつて、この政策は完了した。この勅令によつて、ローマ帝国内のほとんどすべての自由人に、ローマ市民権が付与されたのである。

ローマ法のもとに生活することは、ローマ市民権を与えられた者の特権の一つとみなされていた。だから、法的には外国人扱いされていた異民族出身のローマ人たちは、市民としての政治的・経済的・法的・心理的な利益を得るために、ローマ市民権を獲得することを熱望した。また、奴隸身分の異民族も、様々な手法で、次第に市民権を獲得していく。このよ

うに、ローマ帝国は、ローマ人の枠を広げ、その枠の中に非ローマ人をも入れていった。そのため、ローマ帝国は、本来のローマ人によつてのみ守られるのではなく、各地のローマ市民権をもつた市民によつて守られることになった。

人材の登用においても、ローマ帝国は、ローマ人に限らず、広く才能のある者を登用した。外国人であつても、奴隸出身であつても、蛮族であつても、ローマ帝国にとつて有用であれば、これを採用した。それどころか、皇帝自身が、三世紀ごろには、ほとんど属州出身とさえなつたのである。

こうして、ローマ帝国は、全民族の共同のポリス（コスマボリス）となつた。その結果、すべてのローマ人は、自分たちの住む帝国をローマニアと呼び、これを、彼らの共通の母国と感ずるようになつた。ローマ帝国は、すべてのローマ人にとって、心理的にも世界国家となつたのである。ローマ帝国の礼讃者、アリストテレスも、ローマの強大化の原因を、その巧妙な諸民族支配の技術にみた。諸民族の支配層にローマ市民権を与えて、これを帝国支配の支柱としたことが、地中海世界全体を一つの大きな家にまとめるのに成功した秘訣であつたとみたのである。

ローマ帝国は、宗教政策においてもおおむね寛容であった。ローマ帝国は、征服民に対して、自らの宗教を強制することなく、それぞれの征服民独自の宗教を許した。また、各地方から首都ローマに流入していく人々とともに、異国の神々も入ってきたが、帝国は、ローマの統治を搖るがさないかぎり、これを受容した。ローマ帝国は、所属民に対して、広範な領域の宗教や慣習の多様性を認めるとともに、同時に、ローマ国家に所属する共通の市民という意識を醸し出したのである。もつとも、紀元一世紀以後、次第に流布していったキリスト教は、キリスト教徒がローマ帝国の支配に服さないことがあつたために、しばしば弾圧された。しかし、それにもかかわらず、キリスト教はローマ帝国内に普及していったため、よく知られているように、四世紀になつて、逆に、キリスト教はローマ帝国によつて受け入れられ、国教とされたのである。

言語政策においても、ローマ帝国は寛容な政策をとつた。ヘレニズム時代に普及した共通ギリシア語（ヨイネー）は、すでに地中海世界に広く普及していたから、ローマ人はこれを尊重した。それどころか、教養あるローマ人は、母國語のラテン語のほかに、熱心にギリシア語とギリシア文学を学んだ。首都ローマの中央行政でも、ラテン語と並んで、ギリシア語が公用語として使用された。帝国の西方諸地域では、ラテン語が公用語として普及したが、ギリシア語を母語あるいは共通語として用いていた東方諸地域に、ラテン語を公用語として押しつける際には、ローマ人は慎重であつた。ラテン語の使用は軍事や行政のみに限り、それ以外は、共通ギリシア語を用いることを認めたのである。

こうして、ローマ帝国は、その巧妙な支配と政治力によつて、バクス・ロマーナをもたら

し、繁栄の極に達した。ローマ帝国の支配領域のどの都市にも、首都ローマに似た神殿や競技場、浴場や学校などが建てられた。また、ローマ人自身の手によつても、このような多くのローマ都市が各地に建設された。各都市は、版図内に縦横に張り巡らされた道路網によつて結ばれ、人々の移動も盛んに行なわれた。ローマに支配された属州民も、ローマ文化の恩恵に浴し、ローマに同化した。ローマ人は、広大な領域を統合し、一つのボリスにまとめたのである。ローマ帝国は、古代地中海世界の世界政府だったのである。

二十一世紀の地球文明も、各民族、各国家の政治的統合に向かい、いずれは世界政府の樹立が必要だとすれば、ローマ帝国の知恵に学ぶところが多いであろう。

II
分散する世界

普遍主義の崩壊

二十一世紀の世界は、しかし、統合の方向にのみ向かっているわけではない。すでに、二十世紀末以来、この地球上では民族主義の波が急速に拡がり、各民族の自立の要求や宗教の復権の動きによって、各地で多くの紛争や衝突が起き、民族間の殺戮さえ繰り返されている。民族紛争の激発は、二十一世紀も止むことはないであろう。

二十世紀は、少なくとも、その後半は、自由主義と共産主義という二つの対立する普遍主義の時代であった。このうち、冷戦の終結という形で、共産主義という普遍主義が崩壊したために、逆に、それによって抑圧されていた民族主義が抬頭、各民族の独立の要求に火がつき、それが民族間対立を激化させることになった。それと同時に、自由主義という普遍主義も弱体化し、自由主義圏でも多くの民族問題が発生、各民族が自立を要求してきた。そのため、国家の数は鰐登りに増え続け、近代の国家システムが解体に向かっているというのが現状である。二十一世紀初頭に当たる現在、民族紛争が世界各地に拡がり、世界が不安定性を増しているのは、一つには、二十世紀末の普遍主義の崩壊または弱体化によるところが大きい。

他方、また、この民族紛争の激発は、近代の国民国家がかかえる構造にも原因がある。多くの民族を統合し中央集権的に国家を形成した国民国家は、常に、その支配下に置かれた民族の不満を抱えている。逆に言えば、国民国家は、エスニック集団に対するタガとして働いていたことになるが、しかし、これが破綻すると、途端にエスニシティが爆発する。国民国家のもとに押さえつけられていた諸民族のマグマが一挙に噴出し、諸民族集団が一齊に自立を主張するのである。

「民族」を定義することは極めて困難であるが、一応は、言語・習慣・民俗・歴史・宗教など、文化を共有する集団と考えることができる。とすれば、このような意味での民族と、政治的な意味での国家は、位相を異にする概念だということになる。世界の諸国家の大半は、その内に、文化を異にする多くの民族を抱えた多民族国家であって、多くの民族を国民国家のイデオロギーによつて統制している。この国民国家が揺らげば、人々は不安に陥り、「國家よりもより下位の「民族」に自分たちの帰属意識を確認し、そこにアイデンティティをもとうとする。これが、二十世紀末の冷戦の終結とともに一挙に顕在化した民族対立の背景である。激発している民族紛争は、もはや、自由主義と共産主義のイデオロギーの対立でもなく、国民国家間の利害の対立でもなく、文化と文化の対立なのである。二十一世紀も、民族にまつわる紛争や摩擦は跡を絶たないであろう。

旧ソ連崩壊後の民族紛争の激化は、共産主義という普遍主義の崩壊による民族主義の抬頭に起因していた。旧ソ連邦は百二十以上の民族を抱えた「民族の火薬庫」と言っていた。しかし、ソ連共産主義の終焉とともに、その支配下にあったスラブ系共和国、キリスト教国、中央アジアのイスラム教国などが、次々と独立。その後、独立した共和国同士で激しい民族紛争を開始した。

アルメニアとアゼルバイジャンの紛争は、その代表である。アルメニア人はキリスト教（アルメニア正教）を奉じ、アゼルバイジャン人はイスラム教を奉じ、宗教的に対立していた。その上、ナゴルノ・カラバフ地区を巡る対立に代表されるように、アルメニア人の居住地域と国境とが一致しないため、紛争が続いている。なるほど、一九九八年には、両国は、平和的解決を図るという合意に達したが、まだ、眞の共存を求める情勢には至っていない。

また、チエチェン問題は、旧ソ連崩壊後のロシア共和国内の問題である。旧ソ連崩壊とともに、チエチェン・イングーシ共和国は独立を宣言。その後、イングーシを分離したが、ロシアはこれを認めなかつた。そのため、一九九九年、イスラム武装勢力「一掃」という名目で、ロシア軍が侵攻。紛争はなお続いている。チエチェン紛争は、独立を目指すチエチェンと、これを許さないロシアとの確執と言える。だが、問題はさらに深く、チエチェン人とロシア人との間の憎悪の歴史にまで至りつく。

旧ユーゴスラビア解体後の凄惨な民族紛争も、共産主義という普遍主義の崩壊による民族主義の抬頭に起因していた。六共和国と二自治州から構成されていた多民族国家、ユーゴスラビア連邦は、宗教や歴史的背景のまったく異なる地域が單に一つにまとめてされていたにすぎなかつた。セルビア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、マケドニアは、オスマントルコの歴史的影響を多分に受け、北部のスロベニア、クロアチアはカトリックに組み込まれ、ヨーロッパの影響を受けてきた。言語や宗教など、文化的に見るかぎり、これらの地域と民族は互いに異なつており、さらに自分たち内部でも細分化されていた。旧ユーゴは、これらの民族を独特の社会主義によつて統制していたが、一九八九年以來の東欧共産主義の崩壊とともに、各民族は独立。ユーゴスラビア連邦は崩壊し、民族間対立が激化した。特に、ボスニア・ヘルツェゴビナ戦争では、セルビアから分離させられたセルビア人が、これと対立するクロアチア人とムスリムに対し、民族浄化の名のもとに、三つ巴の凄惨な殺戮を繰り返した。また、コソボ紛争では、セルビア南部のコソボ自治区で、キリスト教徒のセルビア人がアルバニア人のムスリムを掃討しようとしたが、NATOと国連の介入もあって、アルバニア系住民は復帰。しかし、アルバニア系住民からのセルビア人に対する報復の可能性もあり、今後も抗争の火種は絶えない。さらに、この紛争は隣のマケドニアにも飛び火し、マケドニア系住民とアルバニア系住民が対立、両者の共存に問題を投げかけた。

共産主義という普遍主義の終焉が、すでに二十世紀末において確認されているとすれば、

改革開放路線によって経済発展を遂げている中国共産主義も、二十一世紀のそれほど遠くない将来に終焉を迎えるである。

だが、ここでも、共産主義の崩壊によって、民族主義が抬頭してくる。中国は五十五の少数民族を抱えており、これらを、内モンゴル、新疆ウイグル、広西壯（チワン）、寧夏回（ホイ）、チベットの五自治区と、それ以外の民族自治区に分けている。しかし、今日の中国が、改革開放路線によって、経済発展を遂げれば遂げるほど、人口の移動は激しくなり、政治的自由を求める声は募り、それが共産主義を溶解させていくことになる。そして、中国共産主義が崩壊すれば、各民族自治区の自決運動が出てきて、共産中国という地球上に最後に残った植民地帝国は崩壊していくことになる。現に、チベットやウイグル自治区では、すでに分離独立運動が起きている。例えば、チベットでは、中国共産党の政策によって宗教弾圧がなされ、言語や伝統や習俗も否定され、これまで多くの犠牲者が出ている。中国共産主義が崩壊すれば、当然、チベットは民族自決を求めて独立するであろう。同様に、台湾やウイグル自治区も独立するであろう。これらも、共産主義という普遍主義の崩壊に伴う民族主義の動きである。

国民主義の無理

また、民族紛争は、国民国家が奉じる国民主義の弱体化によつても起きてくる。国民国家は、多くの場合、多くの民族を一つの国民として強制的に統合するものでもあつたから、それに抵抗する民族も跡を絶たないのである。

例えば、インドネシアの東ティモール問題から発した各地の分離独立運動の勃発なども、その例である。もとポルトガルの植民地だつたために、カトリックの住民が多い東ティモールは、一九七五年に、イスラム教徒でマレー系が多いインドネシアによつて併合された。しかし、一九九〇年代の民族主義抬頭の流れに呼応して、東ティモールの分離独立運動が勃発。一九九九年、東ティモールは、住民投票によつて、八〇パーセントの独立支持を得て、独立。ところが、これが発火点になり、スマトラのアチエ、西バブアのイリアンジャヤなどでも、分離独立運動が勃発。多様性の中の統一をモットーに、多種多様な民族を巧妙に統合してきたインドネシアという国民国家の支配力にも、ほころびが見えてくる。東ティモール問題は別として、これは、旧植民地勢力としてのオランダの支配の枠を踏襲して、多くの民族を統合し、一国民国家を形成しようとしてきたことの無理にも起因していると言えよう。

これと同じことは、アフリカ諸国についても言える。アフリカ諸国は、ヨーロッパの旧植民地の枠内で国民国家を形成しようとしたために、民族の分布と国民国家の枠が齟齬をきたし、それが悲惨な民族紛争や内戦を起こしている。アフリカの国境線は、多くの場合、ヨーロッパ列強の植民地争奪戦の結果つくられたものであり、個々の地域のもつ必然性に根差し

ていない。アフリカ諸国は、人為的に引かれた国境線の中で国民国家を形成しなければならないという課題を背負ったのである。そのために、国境線内部に過剰な数の民族を抱え込んだり、国境線を越えて同じ民族が分断されたりするという矛盾に直面した。ビアフラ内戦、ソマリア問題、ルワンダ内戦など、アフリカで民族紛争や内戦が打ち続いたのは、多くの場合、このことに起因している。

アフリカと同様のことは、中東地域にも言える。中東諸国間の紛争や衝突の遠い原因は、多くの場合、第一次大戦終後、西歐列強間の思惑で線引きされた人為的な国境線が、必ずしも、中東諸民族の宗教や言語や習慣などの地域性と一致していないからにある。

その最も悲劇的な例は、第一次大戦後の民族自決の原則にもかかわらず、国を持てなかつたクルド人の例である。クルド人は、現在、国境を越えて、トルコ、イラク、イランにまたがって居住し、一部はシリア、アルメニアにも住んでいる。クルド人は、民族の一体感を強く意識し、独立国をもらたいと思っているが、どの政府も、これを許すことなく、抑圧政策を続けている。そのため、クルド人による反政府活動が継続されている。

パレスチナ問題なども、同じような文脈でみることができる。アラブ人とユダヤ人の対立は、何も二千年前から続いているのではない。二十世紀の第二次大戦前までは、ヨーロッパで疎外されたユダヤ人を迎えたのは、むしろアラブ人たちであつた。アラブ人とユダヤ人の抗争が生じたのは、イギリスが、第一次大戦の勝利を目的に、アラブ側には、アラブの支持を得るために、アラブの独立を約し、ユダヤ人には、ユダヤの支持を得るために、祖国建国を約束したためである。これが、第二次大戦にまで持ち越され、アメリカも、また、国内のユダヤ人の支持を得るために、イスラエル建国を約束した。こうして、第二次大戦後、人為的に創られたイスラエルは、パレスチナのアラブ人を阻害することになった。そのためにはじめたのが、パレスチナ問題である。この問題の最終的解決策は、二十一世紀の現在もまだ見出しえていない。アラブ・イスラエル抗争の遠い原因も、二十世紀前半のヨーロッパ列強の思惑に起因しているのである。

少数民族問題も、近代の国民国家形成で生じた矛盾に数えることができるであろう。国民国家の中で、少数民族として、その権利が無視された例は、スペインのバスク、イギリスのウェールズ、北欧北部のサーミ、カナダのイヌイット、アメリカのインディアン、南アフリカのズールー・コサ、オーストラリアのアボリジニ、ニュージーランドのマオリ、日本のアイヌなどである。彼らは、近代の国民国家の中で、少数民族として、その権利回復運動や少數言語の復活運動などを通して、近代の国民国家に対する異議申し立てを行なっている。これらの問題も、国民国家が多くの民族を統合していく過程で生じた矛盾であった。

このように見ていくなら、民族問題の発生が、共産主義などの普遍主義の崩壊によるにしても、国民主義という特殊主義の弱体化、あるいは逆にその強化によるにしても、どちらにしても、近代主義の矛盾から起きてはいることが分かる。民族問題は多種多様であつて、どれも簡単に解決のつく問題ではない。多くの民族が一つの国家に統合されたがゆえの矛盾衝突もあれば、少数民族や先住民が近代の国民国家によって抑圧されていたために起きる問題もある。また、一つの民族が自分たち独自の国民国家を形成しようとする民族自決問題もあれば、民族間で国境線や帰属をめぐって起きる紛争もある。だが、これら錯綜する民族問題に共通することは、国民国家の形成と民族の自立の間に齟齬があるという問題である。

近代の国民国家は、多かれ少なかれ、多くの民族を統合して中央集権国家を形成する必要があつたから、それに伴つて、政治行政の一元化や言語や教育の統一をはからねばならなかつた。これは、習慣や文化を異にする民族にとつては重大な問題であり、どうしても、民族と国家の間の矛盾にぶつからざるをえなかつたのである。その意味では、二十世紀以来継続している様々な民族問題は、近代主義の矛盾由来すると言える。宗教や言語や習慣と同じくする民族ぐらいう伝統的な社会によつて、「近代」というものが問われているのが、民族問題である。この問題は、二十一世紀もなお継続するであろう。というより、さらに拡大して問われるであろう。この点では、二十一世紀は、近代主義の解体の時代であり、近代主義の分裂の時代と言える。

この面から言えば、アメリカが抱える人種問題も、同じような種類の問題とみることもできる。移民の国として出発し发展してきたアメリカは、「多からなる一」をモットーに、出身を異にする多くの人種を、民主主義と人権を基礎とするアメリカ憲法をはじめとして、様々な手段によつて統合し、アメリカという一つの国家をつくりてきた。ところが、二十世紀末には、黒人集団の中に分離主義的な傾向が現われる。彼らは、アメリカの黒人を「アフリカ系アメリカ人」とする。そして、「アフリカ系アメリカ人はアフリカの伝統文化にアイデンティティを見出すべきだ」と言う。アフリカ中心主義の主張である。この人種主義は、白人社会への黒人の統合を拒否する。そのため、それは、かえつて、一般の黒人がアメリカ社会に同化することを困難にしている。そればかりでなく、アメリカには英語を解さないヒスパニック（中南米系移民）やアジア系移民が存在し、彼らは同化を拒否。さらに、先住民族、ネイティブ・アメリカンの権利主張などもあり、多民族国家アメリカの矛盾が露呈してきている。

この点から言えば、シユレーリンガーの言うように、アメリカ社会は分裂と解体に向かっているとも言える。多くの人種を巧みに統合し、巨大な超近代国家を形成してきたかに見えるアメリカではあるが、そのアメリカでも、近代的統合が人種問題によって問われているのである。アメリカが分裂に向かうか、統合に向かうか、これは、二十一世紀のアメリカに

課せられた課題であろう。

ヨーロッパの移民問題も類似した問題である。西欧に定住した移民には、フランスのマグレブ系、イギリスの南アジア系、ドイツのトルコ系など、ムスリムが多い。フランスでも、ムスリムの定住化に伴つて、モスクの建設、金曜日の集団礼拝などが目につくようになつてきた。また、公立学校でのベールの着用や体育の授業での厳密な両性分離などの問題をめぐつて、フランス人とムスリムの間で摩擦が起きている。フランスは移民に対して同化政策を取りつてきたが、それに対して、ムスリムは差異への権利を主張、イスラムへの回帰を強めた。そのため、逆に、フランスの極右政党が抬頭、移民排斥運動を行なつて支持を集めている。

同じような排外主義運動は、ドイツでの極右政党によるトルコ人排斥運動にも見られる。これらの問題も、ヨーロッパ自身が近代国家を形成する過程で抱え込んだ問題であり、近代的統合が問われている問題である。この問題は、日本も例外ではない。確かに、その意味では、近代主義は解体に向かつており、二十一世紀は分散の時代と言える。

戦争はなくならない

このように、民族や人種、文化や宗教に起因する紛争や衝突が継続するとすれば、二十世紀も、戦争がなくなることはないであろう。なるほど、二十世紀に第一次大戦や第二次大戦や冷戦を経験してきた人類は、もはや大戦争は起こしにくい。しかし、民族や宗教にかかる限定戦争や局地紛争は、絶えることはないであろう。

たとえ、それらが何らかの形で抑止されたとしても、テロリズムという形で、戦争は残る。アフガニスタンを拠点にした国際テロリズムの動きも、その例である。戦争の形態は常に変わり、表向きの戦争が抑止されば、戦争は闇に潜る。テロリズムは、そういう闇に潜つた戦争の一形態である。テロリズムは、人々に恐怖を与えることによって、心理的に不安を呼び起こし、直接的にも間接的にも世論を操作し、目的を達成しようとする。実際、表向き戦争のしにくくなつた現代では、国家そのものがテロ組織を支援し、裏回りで攻撃を仕掛け、目的を達成しようとしている。例えば、イランは、アブ・ニダル機関、ヒズボラ、クルド労働党、ハマスなどの国際テロリズムを支援している。その他、イラク、シリア、リビアなども、外交政策に付随するものとしてテロリズムを使い、一種の戦争を仕掛けている。さらに、宗教対立に根差すテロリズムも、二十世紀末から二十一世紀にかけて急増している。中東、インド、フィリピンなどに見られるイスラム過激派によるテロリズムは、よく知られている。文明というものが法によって守られる秩序を必要としているとすれば、二十一世紀の地球文明は必ずしもこの要件を満たしていない。民族や宗教に根差す相互不信からくる様々な闘争によつて、二十一世紀の地球文明は揺さぶられ続けるであろう。この点から言えば、二十一世紀は、確かに、分散に向かつていると言わねばならない。

しかし、このように、二十一世紀も民族や宗教に根差す紛争が続くとしても、これを、ハントンの言うように、「文明の衝突」ととらえるのは正しくない。ハントンは、文明を、言語、歴史、宗教、生活習慣、制度などで構成されるものとみているが、なかでも宗教を重要視する。そして、宗教の違いによって、文明も分けられるとともに、文明間衝突も起きると考える。しかも、今後の世界政治の主要な紛争は、異なった文明の民族と集団の間で起き、諸文明の衝突が地球政治を支配することになると言う。さらに、諸文明間の断層線が未來の戦争の境界線になるとみて、この文明の断層線で起こる紛争を、フォルトライン戦争と名づけた。フォルトライン戦争の例としては、イスラム系や東方正教会系やカトリック系などが入り乱れて相争っているユーゴスラビア紛争、同じような宗教対立を含む旧ソ連の諸民族間紛争、イスラム教徒とキリスト教徒が戦っているスーサンやナイジエリアなどをあげている。

しかし、宗教中心の文化要素を軸として起きる集団間紛争を、「文明の衝突」とみるのは正確ではない。それは、単にエスニック・グループ間の紛争にすぎず、せいぜい文化的対立によるものである。だから、それを、より大きな文明間闘争と言うのは間違いである。人々は、何かある一つの文明に所属している者として、相争うのではない。現に、ユーゴスラビア紛争でも、当事者のイスラム教徒集団を支援して、全イスラム教国家が立ち上がったわけではないのである。確かに、人間は、国民国家やエスニック・グループや宗教グループを形成し、領土や主権、政治的独立や経済的充足、資源やエネルギーの確保、宗教や文化をめぐって、しばしば相戦う。だが、より広範な文明そのものを、国民国家や民族集団のように、紛争の主体のように扱うのは、一種の誇大宣伝になってしまふ。ハントンの考えは、文明と文化、文明と政治の区別を無視した粗雑な考え方だと言わねばならない。

二十世紀は、打ち続く戦争や動乱の世紀であった。なるほど、二十一世紀には、二十世紀のような国民国家間の大戦争やイデオロギーに基づく長期戦はないかもしれない。しかし、民族や宗教に根差す紛争は二十一世紀も継続し、局地紛争やテロリズムは跡を絶たないであろう。二十一世紀は民族間の抗争の世紀になる可能性もあり、眞の平和の訪れるのは遅れるのみなければならない。その意味では、二十一世紀は、なお、解体と分散の時代となろう。人類はそれほど簡単に共生できるものではない。

2 統合と分散のせめぎ合い

国民国家の役割縮小

二十一世紀の世界には、一方では、新しい統合の方向に向かう傾向が見えてると同時に、他方では、分散の方向に向かう傾向も見える。経済統合から政治統合に向かっているEU、同じく

経済統合を実現しつつある南北アメリカ、密接な経済的依存関係を形成しつつあるアジア諸国などに注目するなら、二十一世紀の世界は、この方向を結集して、何らかの形での世界的統合に向かう可能性も秘めている。ところが、他方では、共産主義の崩壊や国民国家の弱体化に伴って、民族主義が抬頭、民族紛争が激発して、現代世界史は分散の方向にも向かっている。世界史の現在は、統合と分散、求心力と遠心力の相反する二つの力のせめぎ合いの中にあると言える。

この点から言えば、確かに、国民国家の役割は縮小しつつあるように見える。統合の方向は、国民国家の枠を上に越えていく、分散の方向は、国民国家の枠を下に破っていく。国民国家は、統合と分散の両方向に引き裂かれつあると言える。今日の世界史が抱える諸問題は、統合の方向にしても、分散の方向にしても、国民国家のレベルでは十分に対処しきれなくなっていることに起因している。

国民国家は、十九・二十世紀の近代世界が生み出し、つくりあげてきたものである。国民国家は、国境によって区切られた領土をもち、その領土内の構成員を支配する強力な権力をもつた主権国家である。それは、対外的には、戦争によつて自衛する権利と自主的な外交権をもつた主権国家である。そのため、主権国家は、例外なく、独自の軍事力をもつていて。対内的には、憲法を基本とした法体系をもち、立法、行政、司法、それぞれの制度を確立し、そのための官僚制度や警察組織をもつていて。国民国家は、このような対外・対内にわたる強力な権力のもと、通貨を統一し、経済活動を保護あるいは規制し、国民経済を営む。さらに、その人材育成のために、教育制度を整え、初等教育から高等教育に至る学校制度をもつていている。また、国民国家は、国民の意思統合のために、国旗・国歌を定め、共通の言語を制定し、時には国教さえ定め、国民文化を育成して、国民の帰属意識を高める。十九・二十世纪は、このような主権をもつた国民国家の集まりが世界とみられてきたのである。

ところが、科学技術の進歩、国際経済の進展、国際政治の発展などのために、国民国家の役割や機能が低下してきているのが現状である。経済的面から見ても、多国籍企業の活躍、国際貿易の増大、経済的相互依存の進展など、世界市場経済の発展によつて、経済はボーダーレス化し、グローバル化してきたために、国民国家のシステムでは十分機能しきれなくなつてきている。資本市場でも、各国政策当局の規制を免れた新たな国際金融市场が登場し、資本は、国民国家の枠をぐり抜けて、全世界的に自由に駆け巡つていて。そのため、世界経済の要因としての国家の役割が低下してきているのである。

地域統合の面から見ても、例えば、経済統合から政治統合に向かっているEUは、自ら生み出した近代的な国民国家の枠組みを廃棄しようとする巨大な実験を行なつていて。経済政策面でも、加盟各国は、關税自主権を失うほか、貿易政策、農業政策、税制などでも、主権の制限を受ける。金融政策でも、欧州中央銀行による共通通貨（ユーロ）に統一されるばかり

りでなく、多くの制限を受ける。外交・安全保障政策も一元化され、加盟各國は、国家主権の部分的な放棄、またはEUへの委譲が要求される。EUが最終的に目指している（歐州合衆国）の方向も含め、これらは国民国家のあり方を根底から問い合わせである。

国連活動でも、すでに、その平和維持活動や選挙監視活動で、国民国家はかなりの主権制限を受けてきた。国連の人道的干渉も、係争中の国々の同意なしにも行なわれてきた。国連の人権擁護活動も、国民国家の内政不干渉原則を制限しようとするものである。もしも、この方向を徹底して、国連が世界政府にまで発展していくのなら、国民国家の主権はさらに大幅に縮小されていくことになるであろう。

それどころか、地球環境問題でも、酸性雨の被害、オゾン層の破壊、地球温暖化など、地球環境の破壊は、国境を越えて、地球規模の拡がりを見せてている。その対策は、一国民国家の枠では不可能であり、地球規模の規制が必要になつてくる。とすれば、それは、当然、國家主権の制限につながる。また、地球規模の交通・通信技術の発達は、労働力の自由な移動や情報のボーダーレス化をもたらし、国民国家や国民経済の枠を不安定化させている。これらは、どれも、統合の方向での国民国家の弱体化の例である。

他方、この地球上では、現在、民族や宗教の違いによる紛争の嵐が吹き荒れている。世界には、今、約三千数百と推定される民族があり、それが二百数十ほどの国民国家の中に統合されていると言われる。この点から言えば、国民国家という仕組みは、最初から、多くの民族の支配の上に成り立つてることになる。これらの民族が自己主張し、国民国家からの分離独立をこれからも主張していくのだとすれば、世界は分散の方向に向かつているのだと言わねばならない。この面から言っても、国民国家の枠は問われている。

国民国家というアイデンティティは、統合の方向にも、分散の方向にも、揺さぶられている。考えてみれば、国民国家というものは、他の国家や共同体がそうであるように、一つのフィクションであった。現に、アンダーソンは、国家を想像の共同体」と名づけ、国民とはイメージとして心に描かれた想像の共同体であるとし、ナショナリティとかナショナリズムは文化的人造物であると言っている。これは、国民国家のフィクション性をよく指摘している。

しかし、人間は、フィクションなくして生きていくことのできない動物でもある。もしも、国民国家というフィクションが十分なアイデンティティにならないとすれば、われわれは、また、別のフィクションを求めていく以外にない。国民国家というフィクションは、二二二百年、強烈なアイデンティティを形成してきた。しかし、このアイデンティティ形成力が弱くなつてきているとするなら、われわれは、自己の拠り所を、人類にもつか、民族にもつかしなければならなくなるであろう。しかし、世界人類という普遍的なものも、まだ十分な具体的仕組みをもっていない。また、民族という特殊なものに拠り所を求めていくなら、時に

は暴力と殺戮が待つている。どこにもアイデンティティをもちえないとすれば、アイデンティ・クライシスに陥る。アイデンティティが揺らぎ、どこにも見出しえなくなつてきているところに、今日の不安がある。二十一世紀は、このアイデンティティの動搖からくる不安が相当期間続くであろう。われわれ個人のアイデンティティも、国際秩序と切り離し難い。国際秩序が統合と分散の方向に分裂し動搖する時、われわれも、アイデンティティを見失つて動搖するのである。

コスマボリタニズム

いわゆるコスマボリタニズムは、個人が、国民国家を越えて、世界人類と直接結びつく思想である。これは、国民国家の枠が揺らいでいる二十一世紀を導くかなり有力な思想傾向となるであろう。コスマボリタニズムとは、文字通り、個人が、一国の国民であるあり方を越えて、コスマボリタン（世界市民）として、世界人類の一員として生き、そこにアイデンティティを見出そうとする思想である。それは、単なる一国民国家の利害を越えて、世界全人類の連帯のもとに、人類共通の利益をはかるうとするものである。だから、それは、しばしば、人道主義や平和主義や平等主義と結びついた崇高な理想を追求する。

コスマボリタンの忠誠は、国家に置かれるのではなく、全体としての人類社会に捧げられる。世界市民であるということは、國家の限界から自由になつて、地球的な社会に帰属し、その利害に責任をもつことである。そこでは、個別的なものと普遍的なものが直結しており、人類の尊厳といった普遍的価値に個人のアイデンティティが見出される。それが世界市民の倫理である。世界市民は、何より人類共同体の一員として生きようとする。よく言われるようには、宇宙船地球号の乗組員、地球村の住民という意識をもつて、それに責任感をもつて生き行動することが、世界市民あるいは地球市民の生き方である。

このコスマボリタン的生き方はそれなりに理想的なものをもつており、希望に満ちたものである。しかし、まだ、制度的裏づけを十分もつてない。コスマボリタニズムは、まだ、本当のコスマボリスをもつてない。なるほど、国連という国際組織があり、その下部組織として、多くの国際組織が制度として存在する。しかし、国連は、基本的に国民国家の主権を前提として成立しており、国民国家システムの構造に依存しているために、その国際的介入力や調整力に限界がある。この国連の欠陥を是正して、制度としてより強力な機関を設立したとしても、果たして、国民国家がかつて果たした精神的統合力に代わるアイデンティティを確立できるかどうかは、定かではない。

そういう制度的保証なしに、例えば、衛星テレビやインターネットを通して、地球環境保護や世界人権について意識を高めた程度で、コスマボリタンになれるというものでもない。そこから出てくる責任感とか倫理觀は、抽象的で具体性に欠けるものとなろう。それどころ

か、コスマボリタン自身が、国民国家の制度の保証を十二分に受けて、それに守られた上で、国境の無意味や世界人類の連帯や人類の尊厳を叫んでいた有様は、空想的コスマボリタニズムと言わねばならない。コスマボリタニズムは、そのような宙に浮いた夢想によつては、確実なものにはならないである。

国家という拠り所が崩壊し、その代わりにコスマボリタニズムが登場してきたのは、今に始まつたわけではない。もともと、このコスマボリタニズムは、古代のギリシア・ローマ文明におけるヘレニズム時代に源泉をもつてゐる。

紀元前四世紀のアレクサンドロスの遠征によつて、地中海世界の各ポリス（都市国家）は崩壊し、新しくコスマボリス（世界國家）の時代に突入した。地中海世界の各ポリスは、マケドニアの直接支配下に置かれたり、マケドニアとの同盟の一員に格下げされたりして、單なる地方小都市の地位に転落した。かくて、ヘレニズム時代は、ポリスの独立が失われたため、人々は生きるために精神的拠り所を失い、故郷喪失者のようにして、たつた一人、世界の中で生きていかねばならなくなつたのである。そのために、一つには、自分だけを頼りにするという意味での個人主義と、もう一つは、それと直結したしかたで、「われわれはコスマボリスの一員である」とするコスマボリタニズムが興つてきた。

例えば、よく知られた樽のディオゲネスは、「あなたのお国は」と聞かれた時、「コスマボリスの市民だ」と答えたと言われる。ディオゲネスは祖国から追放された人であり、そのコスマボリタニズムは一種の負け惜しみの思想でもあつた。しかし、このコスマボリタニズムは、ヘレニズム時代の一種のイデオロギーになつていつた。人々は、ポリスという狭い領域から解放されて、地中海世界全体を一つの家と感ずるようになり、地中海世界を自由に移動し、活動し出した。しかし、そこから生み出された文化は、様々の出自をもつた思想や芸術の混在にすぎなかつたのである。二十一世紀のコスマボリタニズムも、これと同じ過程を経ることになるかもしれない。

戦争の抑止は可能か

真のコスマボリタニズムは、單なる抽象的なイデオロギーの鼓吹によつてではなく、もつと現実的な世界政治の場で実現されねばならない。頻発する民族紛争や内戦を何らかの国際的力によつて抑止するのも、真のコスマボリタニズムの実践になる。普遍的な力が崩壊するか弱体化すると、部族や民族や国家など集団間で衝突が起き、紛争や戦争が勃発する。そのような紛争や戦争を抑止して、世界平和を達成してこそ、コスマボリスと言える。そのためには、正当化された普遍的軍事力の行使を惜しむべきではない。

なるほど、国連の地域紛争への介入は、第三世界諸国の紛争にのみ限られるとはいえ、そういう理念に基づくものであった。しかし、国連の地域紛争への介入は、必ずしも成功を收

めていないのが現実である。国連の平和維持部隊そのものが紛争の中に巻き込まれたり、指揮権の問題でアメリカ軍と国連軍の間で主導権争いが起きたり、イギリスやフランス出身の部隊が平和維持の意欲を失つてしまつたりするのが、原因である。また、民族紛争や地域紛争の背景には、武器輸出を行なつたり、政治工作をしようとする大国の思惑が働いており、大国自身が紛争を加速させている面もある。核兵器の削減や通常兵器の軍縮でも、大国の利益のみが優先されているために、小国がこれに反発する。国連は、これらの紛争要因を抑止するだけの十分な安全保障能力をもつてない。戦争の代わりになるシステムが創出されなかぎり、この地球上に戦争はなくならないであろう。

この地球上に戦争をなくし、平和をもたらすためには、国連よりもはるかに強力な世界政府を形成し、諸国家を統合する世界国家をつくる以外にないことになる。現代世界が、一面、統合の方向に向かつて進展しているとすれば、その方向に、世界政府が形成される可能性はないわけではない。同時に、現代世界が分散の方向にも向かっているとすれば、この統合と分散を統合し、求心力と遠心力の統一をはからねばならない。そのように考えるなら、あるべき世界政府は、今日の国民国家よりもいくらくらか規模の小さい自治国家をその内部に含む世界連邦政府になると思われる。二十世紀末から二十一世紀の初頭にかけて、共産主義の崩壊や民族紛争のために、主権国家の数はどんどん増えており、それらが再びナショナリズム的対立を引き起こさないとは限らない。これを抑制して安全保障の実をあげるには、主権国家を単位とするこれまでの国際政治システムを再編し、地球規模の世界連邦政府を創出しなければならない。

トインビーも、二十世紀後半の段階で、核兵器の管理と食糧のグローバルな分配を目的とした世界連邦政府の樹立が必要なことを主張していた。しかも、そのような機関は、その後に圧倒的な力をもつていなければ、実行力に乏しいだろうとも考えていた。このような世界連邦政府をつくるためには、現在の国民国家の軍事力を制限し、逆に世界連邦政府の軍事力を大幅に強化しなければならない。そうでなければ、紛争当事国に平和を強制することができないからである。

しかし、それでもなお、世界政府内に言語や習慣、政治や経済に関して対立や相互不信が存在し、しかも、各地方国家に武器の保持が許されているかぎりは、世界政府のもとでも戦争は起きる。世界政府のもとでも、これまでと同様の戦争が「内乱」という形で戦われるであろう。また、世界連邦政府をつくて、国境をなくし、人々の自由な移動を承認することになれば、貧しい地方から豊かな地方へと労働者や難民が大量に移動し、先進地域はかえつて混乱するであろう。さらに、税金を逃れた闇経済や麻薬取引や国際犯罪が横行し、世界連邦政府はかえつて無秩序化する可能性もある。その無秩序化を克服するために、警察権や徵税権や自衛権など、国家主権をすべて剥奪し、世界連邦政府にこれを委譲するなら、その権力

は強力なものになる。しかし、権力が強力になれば、その権力をめぐって権力闘争が起きるであろう。

また、たとえ世界政府をつくつても、その権力を特定の強力な大国が独占する場合もある。この場合には、それに反抗する地方国家も出てくる可能性もあるわけだから、その地方国家を軍事的に制圧する必要がある。それは、世界政府によって行使される戦争にほかならない。戦争は戦争によって抑止するしかない。だとすれば、世界政府下においても、制圧のための戦争は続くことになる。統合と分散はなおせめぎ合い続けるであろう。技術は進歩しても、政治はそれほど進歩しないのである。

南北問題も、統合と分散のせめぎ合いの中で理解することができる。貧困と飢餓に喘ぐ南側の後進国と、繁栄と飽食を謳歌する北側の先進国との大きな格差を是正することは、二十世紀の世界に課された最も大きな問題である。南の貧困状態を改善するには、南側での自立的な解決策の努力に加え、何より北側からの広範な経済的・技術的支援が必要である。それは、開発援助という形での経済支援ばかりでなく、教育の普及、技能訓練、技術移転、情報技術格差の是正など、多方面に及ぶ。実際、アジア地域では、経済成長の進んだ地域から遅れた地域に急速に産業や技術が移転し、南北格差の是正に成功しつつある。アジア地域は、南北が相乗的繁栄しうることを証明した。このように、南側も次々と経済発展の緒に着き、南側同士で起きている経済格差（南南問題）をも解決していくことができるとすれば、世界は等しく豊かになっていくであろう。そして、そのような経済的均衡は、世界の政治的統合を容易にする。

しかし、南北問題の根は深く、その解決は、言葉で言うほど容易ではない。南北の貧富の格差は大きく、そのため、平等な分配を求めて、南側が反抗する可能性もないわけではない。十九・二十世紀の世界史でも、ある意味で、近代化に遅れた（持たざる国）の、近代化に先んじた（持てる国）に対する挑戦によって、動乱は起きた。二十一世紀も、ある程度經濟的・技術的・軍事的発展してきた途上国が、超先進国に軍事的挑戦を仕掛けるということがないわけではない。その軍事的挑戦には、核兵器や化学兵器や生物兵器の開発から、国際テロ活動の支援まで、様々な形が考えられる。わずかな人口で世界のほとんどの富を独占している北側に対する南側の不満が、世界秩序を脅かすエネルギーになる。

ハンチントンは、このような世界秩序への挑戦者になる可能性のある国として、中国とイスラム諸国をあげている。もっとも、これを（文明の衝突）とみるのは当たっていない。文明や文化は反抗のためのイデオロギーにすぎないからである。まして、中国がイスラム諸国に武器を売っているからと言つて、これを儒教－イスラムコネクションと呼び、欧米キリスト教諸国との文明衝突が今にも起きるかのように言うのは間違いである。現に、アメリカやフランスも、イスラム諸国に武器を売つたり供与しているではないか。

しかし、中国やイスラム諸国と欧米との対立を帝国間の衝突と考えるなら、ありえないことではない。確かに、中国は、歴史的に独自の文明を誇る唯一無比の大國という自信をもつており、これが経済的・軍事的に力をつけてくるなら、日米欧三極体制に対する挑戦者となる可能性は大きい。また、中東を中心としたイスラム諸国は、かなりの場合、反米・反ヨーロッパの立場を取っている。だから中東諸国が、国際秩序を無視して、北側諸国による国際秩序に挑戦する可能性も大いにある。

二〇〇一年、不安な二十一世紀を象徴するかのように起きたイスラム過激派による国際テロ事件も、イスラム諸国が一体となって起こしたわけではないのだから、決して「文明の衝突」とは言えない。しかし、これは、アメリカを中心としたグローバリゼーションに対する挑戦ではあった。この点から言えば、二十一世紀の地球文明は、必ずしも統合の方向には向かわず、分裂の方向に向かう可能性もあることになる。現代文明は、なお、統合と分散のせめぎ合いの中にあると言わねばならない。

トインビーも、文明は、その内部の社会層間の分裂・不和の拡大によって解体すると考えている。そして、その解体の一つの要因に、世界国家の周辺にあって、その恩恵を限定的にしか蒙らない外的プロレタリアートをあげ、これが文明を解体させていく働きをすると考えた。二十一世紀の地球文明が、このような解体の方向に向かわないとは言いきれないのである。

古代ローマの挑戦者たち

古代ローマも、建国以来、イタリア半島に地歩を固めた後、地中海支配に乗り出し、地中海全域を支配する一大帝国を形成して、バクス・ロマーナをもたらした。しかし、そこに至る過程では、多くの征服戦争を経験しなければならなかった。地中海世界を制覇しようとしていたローマに対して、次々と挑戦者が現われたからである。

なかでも、最も早くにローマに対する挑戦者として登場してきたのは、カルタゴであった。カルタゴは、海上交易を得意とした商業民族であるフェニキア人が北アフリカに植民してつくった交易都市国家であった。地中海全域に霸権を確立しようとしていたローマにとって、海上交易権を確保して豊かな富を築いていたカルタゴは、ローマの支配に対する挑戦者と受け取られた。そのため、ローマは、紀元前三世紀から二世紀にかけて三回カルタゴと戦い、これを滅亡させたことはよく知られている。カルタゴは、二度ローマと戦って敗北したにもかかわらず、急速な経済成長を遂げ、ローマの脅威となつた。そのため、ローマは、平和國家カルタゴに理不尽な条件を突きつけ、再度の戦い以外選択の道がないように追い込んだ。かくて、カルタゴは、自滅覚悟の絶望的な戦争に突入。その結果、紀元前一四六年、スキビオによつて滅ぼされ、地中海世界から完全にその姿を消したのである。一つの世界を支配し、

国際秩序を確立するには、多くの挑戦者との戦争を覚悟しなければならないのである。

ローマは、このようにして、多くの挑戦者を征服し、激烈な内戦も経験した末、ようやくローマ帝国を打ち立て、地中海世界に平和をもたらした。ローマ帝国は、それから二百年ほど繁栄を極め、その影響力は地中海およびヨーロッパの広大な領域に及んだ。ローマ世界の周辺地域にも、盛んな商業交易やローマ軍の駐留などにより、首都ローマの産業や文化が波及。周辺部も、次々とローマ化していく。周辺部の異民族も、ローマの都市生活、教養、風俗習慣に憧れ、ローマ的悪徳にまでも染まり、これを文明の繁栄と受け取った。

現代世界でも、第三世界が、先進地域の産業や技術を導入し、経済成長を遂げ、アメリカやヨーロッパや日本の先進地域の低俗な風俗や文化をも真似て、それを繁栄と受け取っている。この現代世界の現象とローマの現象は、ほとんど同じような位相に属する。

だが、地中海世界に平和が訪れたとはい、それはローマによる過酷な支配でもあつたから、それに対する周辺地域からの反乱がしばしば起きた。属州アフリカの諸都市の反乱や、ローマの支配下に組み入れられたゲルマン諸族の反乱などである。そこには、ローマの支配に伴う過酷な徵税という事実があった。ローマによる平和は、これら被支配民族の反抗と挫折に裏づけられていた。

このことは、今日の世界では、繁栄を謳歌する北の先進国が、貧困に喘ぐ南の後進国を事实上収奪している状況に似ている。と同時に、たとえ世界に平和と秩序がもたらされても、なおそれに反抗する不満民族がいること、したがつて、それを軍事的に抑圧することなしには、平和を維持できないということを教えてくる。

ローマ帝国の地中海世界支配が確立して後の最も大規模で苛烈を極めた反乱は、何度も繰り返された属州ユダヤの反乱であった。ローマに対するユダヤの反抗は、ローマ帝国が成立する以前から、何度も繰り返されていたが、帝国支配の確立とともに、ユダヤの抵抗運動は一層高揚した。ローマと結びついてユダヤ王国を支配したヘロデ王は、国内の抵抗運動を徹底的に弾圧したが、ユダヤ民衆は、これに対して、反ヘロデ、反ローマの抵抗運動を繰り返した。特に、紀元前四年のヘロデの死とともに爆発した暴動は、ユダヤ全城に広まつた。しかし、これはローマによって鎮圧され、その結果、ユダヤ地域はローマの直接統治に移された。だが、それとともに、再び反ローマの反乱が勃発。ユダヤ全土は、ローマ帝国内で最も政情不安な地となつた。

この抵抗運動を指導したのは、熱心党（ゼーロータイ）といわれるユダヤ原理主義者たちであつた。彼らは、熱烈にメシアの来臨を待望し、神の国の到来を信じて、過激な抵抗運動を繰り返した。それは、古代世界における最も激烈な民族主義的な分離独立運動であつた。

この熱心党の運動は、「シカリイ」と呼ばれるさらに過激なテロ集団をも生み出した。このことを考え合わせるなら、これは、今日で言えば、イスラム原理主義の抵抗運動に似

ていると言える。今日の中東地域でも、イスラム原理主義による抵抗運動が続いている。

この中東地域は、また、古代ローマ時代に、ユダヤ原理主義による抵抗運動が繰り返された地域でもあつたのである。

その後も、紀元六年から七〇年にかけて、ユダヤ地域全域を覆う大反乱が起き、紀元一三三年から一三五年にも、再び大暴動が起きていた。この二度にわたるユダヤ戦争で、ユダヤ人たちは絶望的な抵抗を繰り返し、多くの犠牲者を出した上に、エルサレムも完全破壊された。これ以来、ユダヤ人は、祖国を失った流浪の民となつたのである。ユダヤ人によつて繰り返されたローマに対する長期にわたる粘り強い抵抗運動は、バクス・ロマーナに対する徹底した反抗運動であり、自由と独立のための死に物狂いの闘争運動であつた。

国民国家の役割

現代世界は、ローマ帝国による支配が確立された地中海世界とは違つて、まだ世界政府も世界国家もできていない過渡期に位置している。しかし、ローマによる平和が実現した古代地中海世界でさえ、ローマの平和に抵抗する多くの反抗者が出てきたところをみれば、この地上に眞の平和をもたらすということは並大抵のことではないことが分かる。たとえ、この地球上に世界政府ができるても、その秩序に従わない地域が登場してくるなら、戦争はなおなぐならないであろう。

しかも、その世界政府という政治技術でさえ、もしかしたら、文明の死をしばらく延期するだけの延命治療にすぎないのかもしれない。現に、トインビーも、ローマの平和について、それは「一個の消耗の平和であり、創造的ならざるがゆえに永続性のない一個の平和」にすぎなかつたと言っている。世界国家は、病める文明が滅びる前の一時的小康状態にすぎず、文明の破滅を延期することはできても、永久に食い止めることはできないと考えたのである。

もともと、世界国家というものは、権力の配分を固定しようとするものであり、権力の再配分を不可能にするものである。また、世界国家が近い将来形成されるという保証は、今のところない。とすれば、少なくとも、二十一世紀は、国民国家の枠組みを改良しながら、この地球文明を運営していく以外にないであろう。国民国家の仕組みは二十一世紀もなお残り、相当程度有効に働くであろう。ただし、この枠が、統合と分散のせめぎ合いの中に世界状況に適応して、統合の方向にも、分散の方向にも、制限される。

二十一世紀も、国民国家の役割がなくなつてしまふわけではなく、無用になつてしまふわけでもない。国際的な利害の対立を起こすのも主権国家であるが、その解決をするのも、依然として主権国家である事実は続く。また、たとえ仮に、世界政府をつくつたとしても、それは当然、連邦制を取らねばならないだろうから、国民国家の枠組みは、連邦制の中の自治国家として、なお十分機能しなければならないことになる。そのように考えてこそ、^{八個}

人・国家・世界（個別・特殊・普遍）というアイデンティティの多元的・重層的な構造も保証される。人類社会の歴史は、もともと、統合と分散、秩序と混沌のせめぎ合いの中で、常に生成変化してきたのである。

ならば、極端な特殊主義による孤立でもなく、極端な普遍主義による一極支配でもなく、その両者の調和を取つて生き抜く方法を工夫していく以外にない。二十一世紀の世界史は、統合と分散、普遍と特殊のせめぎ合いの中にある。われわれは、このせめぎ合いの中を柔軟に生きていく必要がある。

確かに、われわれは、外なる世界でも、内なる世界でも、統合と分散のせめぎ合いの中で苦悩している。統合に悩み、分散に迷っている。その意味では、二十一世紀は、曖昧で不透明な時代になるであろう。混沌とした不安定な時代になるであろう。そこに、二十一世紀の人類の不安がある。しかし、いつの時代も不安定で、不確実性を内に抱えている。とすれば、われわれは、その不安に耐えることのできる確固とした精神的基盤をもつ必要があるであろう。

III

混在する文化

文化の雑種化

一般家庭の食卓に世界各国の食品が日常的に並ぶようになったのは、わが国では、二十世紀も最後の四半世紀以来のことであろう。近くのスーパー・マーケットには、肉類、野菜、果物、魚、乳製品、酒類、調味料、主食まで、世界各地から輸入された食品が並び、われわれは、それらを労することなく手に入れることができる。さらに、今日では、先進国の都市なら、各種民族料理のレストランがあり、都市はまるで世界中の料理の見本市のようである。また、衛星テレビやインターネットなど、ニューメディアの発達によって、地球の裏側の情報が、瞬時に、直接家庭に入つてくるようになったのも、二十世紀末以来のことである。

今では、消費文化や各種メディアを通して、われわれは世界中のあらゆる文化を家庭で享受し、日常的に世界中の文化を体験できる。この家庭のグローバル化と多文化主義の事実を見れば、われわれの日常生活そのものがすでに多くの文化の混在があることが分かる。このような現象は二十世紀以来の現象ではあるが、二十一世紀はこれが加速度的に進行していくであろう。

二十一世紀は、多くの文化が混在する時代になるであろう。現代世界は統合の中に分散を含む世界であったが、統合といつても、その中に多くの文化が混在するのだから、その意味では、現代世界は常に分散の傾向を抱えていることになる。そのため、各地域の文化の統一性と一貫性は失われる。人々の意識は遠心的な原理に支配され、明確な独自の世界像も失われることになる。確かに、いつの時代も、文化は混在し、混淆するものである。その混淆から、文化的融合が起きて、新しい創造が行なわれる。しかし、二十一世紀が、文化の混在から創造的なものを生み出しうるかどうかは不確かである。

二十一世紀の文化は雑種化するだけに終わるかもしれない。実際、今日では、地球上の人々の移動が激しくなり、ほんどの国が多くの民族の混在によつて成り立つており、そのため、異なる文化の接触はますます増大している。この異文化同士の接触から、複合的な雑種文化は生まれてくる。現代社会は、すでに、あらゆる種類の文化が混在し、雑種化していると言えよう。

なるほど、文化の混在の最初の段階では、互いの文化の違いが意識される。ところが、混在と混淆がさらに進んでいくと、互いの文化の違いは次第に薄められ、雑種化していく。雑種化した文化は、音楽やファッションなど、グローバル化した大衆文化などには、どこにでも見られる。例えば、伝統的宗教音楽を現代の最先端の楽器で演奏したり、オリンピックの競技などで、あちこちの様式を取り混ぜて演技したりしているのも、そのうちの一つに数えてよ

いであろう。現代文化は、あれもこれもこなませにした文化の雑種であり、自己の出自を失つた無国籍文化なのである。

もっとも、文化というものは、いつも互いに浸透し合い、変化していくものである。純粹で不变の文化というものはない。文化は、相互に浸透し合うことによって、新しい型を創造していく。しかし、二十一世紀の雑種文化が、そういう新しい型を創造しうるかどうかはなお定かではない。

文化相対主義

文化の混在の時代には、互いに文化の違いを許容し、その価値を認め合いながら、多種多様な文化の共存をはかつていく以外にない。この地球上には、多種多様な民族が、宗教、倫理、慣習などにおいて、多様な考え方や価値観をもって生きているのだから、その多様な考え方や価値観を認め合っていく必要がある。多文化社会では、何か一つの価値観の優越性を主張することはできず、多元的価値を認める文化多元主義に立脚しなければならない。われわれは、多様な価値を互いに尊重し、「多様性の中の共存」という理念によつて、多元主義的時代における共存の道を探らねばならない。

文化多元主義に基づいて、多様性の中の共存をはかり、多くの文化が共生していくためには、何よりも文化の相対化が必要であろう。異文化の価値を承認しながら、自らの文化の価値をも提示し、互いが共生していくには、それぞれの文化の価値が絶対的なものではなく、相対的なものだという認識をもたねばならない。そうしてはじめて、民族や宗教や言語などに根差す対立も克服されることになる。また、文化的価値の相対性を認めることによつて、何かある一つの普遍主義的価値の強制や独善に陥ることを避けることもできる。

多元主義的な文化相対主義は、自己の所属する文化の価値観を妄信せず、他人の属する文化の価値をも同時に承認するのだから、それは、何よりも寛容の精神に基づかねばならない。人は、多くの文化的価値への寛容の精神をもつとき、自分自身の狭い考え方や生き方から解放され、自由になることができる。

価値相対主義に基づく文化相対主義は、普遍主義が陥る自己中心性を掘り崩し、特殊な諸価値の併存を可能にする。現に、二十世紀以来積み重ねられてきたヨーロッパ近代の普遍主義からの脱却は、多元論的文化相対主義なくしてはありえなかつた。ヨーロッパ近代の合理主義やその亜流とも考えられるマルクス主義など、ヨーロッパ中心の普遍主義が次々と相対化されていったのが、二十世紀であった。

例えば、シユベングラーやトインビーは、二十世紀初頭まで支配した一元論的なヨーロッパ中心史觀を切り崩し、多元論的な相対史觀を提出した。彼らは、ヨーロッパ人の自己中心主義を批判して、ヨーロッパ文明の他の文明に対する絶対的優位を否定した。ヨーロッパ文

明も、他の文明と相対的な位置にしかないことを明らかにしたのである。

また、レヴィ＝ストロースも、未開社会の研究を通して、その未開社会の文化が、その構造において、ヨーロッパの文化に劣るものではないということを実証した。彼は、このことによつて、ヨーロッパ文化の普遍性を打ち破り、ヨーロッパ文化も、他の文化と同じ一つの文化にすぎないことを明らかにしたのである。

このように、ヨーロッパ文明の絶対的優越やその自民族中心主義が批判され、あらゆる普遍主義の相対性が明らかになつたことは、二十世紀の功績であつた。二十一世紀があらゆる文化の相互承認と共存の時代になるとすれば、それは、二十世紀以来の文化相対主義によるほかはないであろう。

しかし、文化相対主義に落とし穴がないわけではない。文化相対主義では、普遍主義も、自己の所属する文化も相対化されるから、これが極端化すると、何を拠り所として生きていけばよいのか分からなくなる。文化相対主義は、多様な価値を認める多元主義に基づかねばならないのだが、これは、ややもすると、自己自身の所属する文化の価値への自信を失う方向へと傾きがちである。

宗教にしても、言語にしても、慣習にても、文化というものはそれぞれに型をもつてゐる。その文化的風土に生まれ育つた人間は、その型の中で自己自身のアイデンティティを形成する。そのことによつて、人は、社会の不安定性や不確実性に耐える精神的支柱をもつことができる。

ところが、多くの文化が混在し、文化相対主義が蔓延するところでは、人々は、自分が抱り所とする文化の型や支柱を失い、自信喪失に陥り、不安な状態に投げ出される。価値の相対性を主張することは、それなりに正しいことであるが、しかし、それがあまりにも行き過ぎると、人々はバックボーンを失い、信念をもてなくなる。あらゆる文化が地理的風土を離れて地球上を飛び交う二十一世紀は、文化の混在からくるアイデンティティの喪失の時代になりかねない。

この悪しき相対主義が行き過ぎると、人は極端な価値相対主義に陥つてしまふ。それは、あらゆる価値体系は相対的であつて、いかなる真理も疑わざるべきであり、不变の善や美など何一つ存在しないと考える。これは一種のニヒリズムである。本来は、閉じた共同体の中で、切り崩されることのない価値や信念の中で生きることが望ましいが、価値相対主義は、伝統的な道徳規範をも触み、何が善であるかという信念をも切り崩してしまうのである。

このような価値の無政府状態のもとでは、価値観がアトム化し、互いの間に共通性がなくなる。特に、若者は、価値の無政府状態のもとで、秩序もなければ必然性もない気ままな生活をしながら、その日暮らしをしていく。家庭でも、それぞれの世代が勝手な価値観をもつ

て同居するだけになる。教育も、ただ多様な価値を教えるだけで、これといった信念は教えない。ここでは、個人の中でも、何もかもが等価値になり、矛盾する価値でもなんでも同居する。何事も等価値にしてしまう悪しき相対主義のもとでは、人々は情熱を失い、感動することがなくなってしまうであろう。精神は内面から崩れ、空洞化してしまうであろう。

なるほど、価値体系が時と所によつて多样で相対的であるということは、古代ギリシアの昔から認識されていたことである。しかし、ニーチェの言うように、現代の文化は、確固とした神聖な原住地をもたず、あらゆる文化によつてからうじて生命をまつとうするよう運命づけられている。なるほど、ニーチェ自身相対主義を唱え、価値の破壊を試みたのだが、しかし、同時に、彼は、確固とした価値を定立する必要も主張していたのである。

ポスト・モダニズム

世界中の雑多な文化が混在し、多くの文化が入り乱れる現代世界では、風俗や習慣はもちろん、宗教、芸術、言語においても、多様な文化の混淆主義が支配する。人々の移動範囲の拡大や情報化社会の進展のために、われわれは、常に、地球上のあらゆる出自をもつた文化にさらされており、雑多なもので取り囲まれている。その雑多なものを混ぜ合わせて、何か別の雑種を作り出していくのが混淆主義（シンクレティズム）である。

例えば、言語活動でも、どの言語にも、様々の出自をもつた外来語が侵入して来て、その言語内容を変化させていく。今日のグローバル時代の共通語、英語も、それぞれ他の文化の影響を受けてブローカン化する。こうして、日本風英語、フィリピン風英語、マレーシア風英語、インド風英語ができる。もちろん、フランス風英語、ドイツ風英語も形成される。多くの民族が入り乱れて混在する時代には、互いの言語が混ぜ合わさり、クレオール化した混成語ができるのである。

音楽芸術でも、西洋風の音楽の中に、オリエント風、インド風、中国風、日本風、時にはアフリカ風など、雑多なものが取り入れられ、何ほどかのものが作られる。それは、種々の型の寄せ集めにすぎず、こたまぜにすぎない。それは、むしろ型の喪失であり、独自の様式の欠落である。しかし、このような単なる混淆主義が新しい芸術だと称される。

また、一つの文化と他の文化の価値体系から、共通したもの、または相補的なものを抽出してきて、新しい見地から結合しようとする折衷主義が流行するのも、文化の混在の時代の特徴である。

二十世紀の最後の四半世紀以来、取り沙汰してきたポスト・モダニズムの思想や芸術は、文化の混在の時代の特徴を備えている。ポスト・モダニズムは、思想においては相対主義を唱え、芸術においては混淆主義を採用している。これは、二十一世紀も、しばらくは命脈を保つであろう。

ポスト・モダニズムは、思想的には、多元主義と相対主義に基づき、言説の多元性と相対性を主張する。そして、一つの言説にとらわれたあり方から、それを相対化して、開かれねばならないと言う。哲学の歴史においても様々の言説が唱えられてきたが、どれも相対的であり、形而上学的統一性はないとみる。したがって、普遍的な価値や認識は虚構であり、相対的だと考える。

ポスト・モダニズムは、このような相対主義に基づいて、懷疑主義的立場をとる。認識はすべて解釈であり、真理は相対的だとして、伝統的な合理性や実在に対し徹底的に懷疑する。だから、これまでの統一的自我を前提にした形而上学は誤りであり、西洋の形而上学はその誤りの歴史にすぎなかつたと考える。

ポスト・モダニズムは、道徳に関して、道徳的な善悪の観念は共同体ごとに異なつてゐるということから、真正な道徳基準は一つも存在しないとする。道徳は単なる約束にすぎず、一つの倫理的体系への信念は排除されねばならないと言う。ポスト・モダニズムの思想は、道徳的懷疑主義を主張し、価値の無政府主義に陥るのである。結局、ポスト・モダニズムにあつては、価値の基準は、最終的には個人の主觀に置かれることになつてしまふ。このように、真理や価値の基準も掘り崩されるとすれば、不安定性は避けることができない。しかし、ポスト・モダニズムは、その不安定性の中を不安定のままに生きようとする。

ポスト・モダニズムは、このように、相対主義と懷疑主義に立脚して、啓蒙主義以来の理性を徹底的に疑う。知識や法則や価値の統一性、客觀性、普遍性を批判して、近代の合理性を揺さぶる。と同時に、理性に基づく伝統的な西洋的価値の支配をも拒絶するのである。

ポスト・モダニストにとって、世界は差異と非同一の果てしない戯れであつて、普遍的なものはそもそも存在せず、あるものは個々の差異だけである。そして、統一、同一性、全体性、普遍性に対して、差異、多様性、複数性が対置され、前者が批判され、後者が擁護される。ポスト・モダニズムは、このような差異化の運動の中で、あらゆる権威や制度をテクス

ト化し、脱中心化して、権力の抑圧性を暴くのである。

他方、ポスト・モダニズムは、芸術においては、混淆主義または折衷主義をとる。例えば、建築藝術でも、日本の伝統的な建築様式の中に、西洋風や古代ギリシア風など、複多な様式が取り入れられる。ポスト・モダンの建築物は、多種多様な建築様式からの多くの引用によって構成されるのである。ポスト・モダニズムの建築は、徹底した合理性を追究した近代建築様式の構成主義と機能主義を批判し、差し当たり、多様な様式の混合と寄せ集めによつて造られる。われわれの食卓がすでに雑種的であるように、芸術の世界も雑種化するのである。しかし、相対主義、懷疑主義、混淆主義に基づくポスト・モダニズムの思想や藝術は、近代の理想や意味や構造を破壊しはするが、そこから新しい型を生み出すことはないであろう。ポスト・モダニズムは、近代の不可能性とその破綻を相対主義と懷疑主義によつて暴き出す。

しかし、それ自身が近代の体制の中で行なわれる懷疑にすぎないから、それはどこまでも近代への反語でしかない。

もともと、近代への反逆は今に始まつたわけではない。芸術活動においても、近代への反逆は、キューピズムやダダイズムやシユール・レアリズムなど、アヴァンギャルドの活躍によって、前世紀の初頭以来繰り返されたことであり、事新しいものではない。ポスト・モダニズムも、前世紀を一貫して流れてきた近代への反逆の単なる延長にすぎない。

ポスト・モダニズムの風潮は、むしろ、その名の通り「後近代」にすぎず、近代の末期現象にすぎないであろう。実際、ポスト・モダニズムの思想や芸術は、情報やサービスが主体になるポスト産業社会の消費文化の様相を反映している。この時代の消費文化、つまり今日の消費文化のことだが、これは、軽やかではあるが、深さがなく、基礎をもたず、折衷的、混淆的、流動的な文化である。このような時代の文化を反映するのが、ポスト・モダニズムである。それは、脱中心的な消費社会の中を、高級芸術も商業芸術も一緒にくたにして、軽やかに遊戯しながら、自由に浮遊していこうとする。そこで流行するものは、パロディであり、模倣であり、つむじ曲がりな歪曲であり、皮肉っぽい冗談であり、浅薄な茶化であり、気まぐれな遊びである。それは、巨大な体制の中での單なる遊戯にすぎない。

ポスト・モダニズムは、巨大な近代の体制の中に甘え、しかも斜めに構えて、そこから逃走していくとする世代の神話にこそなれ、そこからは、創造的なものは何も生まれ出さないであろう。ポスト・モダニズムは、近代を乗り越えるものではなく、むしろ、「最近代」を浮遊する軽薄な流行にすぎない。情熱を失った時代のバブルにすぎない。不安定で動搖する時代の産物、それがポスト・モダニズムの思想や芸術だと言えよう。それは、現代の無定形な社会の根無し草性、精神的散乱状況を表現するものなのである。

シュベン格ラーアは、『西洋の没落』の中で、文明の冬の時代には、芸術においても、偉大な様式は消滅し、ただその様式を崩しただけの偽物や模倣が流行るだけだとみていく。それは、眞の様式の変化ではなくて、新奇で目先の変わったものを追うだけの仮初めの流行にすぎない。統一性が失われた文明末期の世界では、芸術もまた終末を迎えるのである。(二二)では、創造的精神は消え去り、もはや偉大なものは創造されない。

相対主義や懷疑主義や混淆主義は、世界が拡がり、情報が過多になり、そのため、逆に信じるものが多くなってしまった時代に流行する。情報が過多になり、雑多な文化が混在する時代には、多くの文化がその独自の世界を失い、人々はかえって何を信じて生きていけばよいのか分からなくなる。

一般的に言えば、文化と文化が相互に接触するとき、新しい創造は起きてくる。しかし、諸文化が單に混在するところでは、たゞ多様な価値観が並列し相対化するだけで、どの程度の新しい創造的文化が生み出されるかは疑問である。むしろ、人々の精神は、文化的にも内

面的にも散乱し、空白化する。人々は、拠り所を失い、中心を失つて、文化的創造力を喪失する。文化の混在の時代としての二十一世紀は、文化的には、長い非創造的時代になるのではないか。

ヘレニズム時代のポスト・モダニズム

多くの文化が混在し、相対主義や懷疑主義や混淆主義が支配した時代は、今に始まつたわけではない。古代地中海文明のヘレニズム時代からローマ時代にかけても、現代同様、文化の混在の時代であった。この時代には、地中海世界全体に拡がつたギリシア文化の中に、それが受け入れた非ギリシアの諸文化が混在し、互いにその独自性を失つていった。そして、風俗・習慣においても、宗教や芸術においても、思想や言語においても、あちこちから出自の異なる雑多なものが寄せ集められ、文化の独自の様式が失われていった。それらは、おおむね、諸文化の混合と折衷に終始したのである。

言語の混淆は、その一例である。この時代に地中海世界で使用された共通語は、コイネーと呼ばれた共通ギリシア語であった。この共通ギリシア語は、その主要部分はアッティカ方言を母体としているが、同時にイオニア方言やドリス方言も交え、さらにアラム語その他のオリエントの影響も受けている。共通ギリシア語自身が、すでに他の言語との混成語でもあつたのである。ヘレニズム時代には、この共通語によつて、ギリシア人、ローマ人、フェニキア人、小アジア、エジプト、北アフリカの人々が、互いに意思疎通を行なつていた。また、エジプトでも、バビロニアでも、自分たち自身の歴史をこの共通ギリシア語で書いた。アレクサンドリアのユダヤ人も、旧約聖書をコイネーに訳した。『七十人訳旧約聖書』がそれである。もちろん、地中海世界のそれぞれの地方では、土着の言語も温存されていたから、この時代の人々は、二重の言語世界に住んでいたのである。そこでは、当然、各言語の相互浸透も起き、言語は混淆され、その古典的あり方を失つて、頽落していった。この時代にそれほど目立つた独創的な文学が現われなかつたのも、そのことによる。

今日もまた、英語が共通語になると同時に、それが土着の言語によつて変容され、他の言語も入り乱れて、言語の多重社会が出来てゐる。このような言語文化の混在と混淆から、独創的な文学が創造されうるのかどうか、疑問だと言わねばならない。

文化の混在の時代には、各文化の相対性的認識から、ものごとの本質への懷疑主義が起きてくる。ヘレニズム時代に流行した懷疑派の思想も、そのような文化的背景をもつてゐた。

ヘレニズム時代からローマ時代にかけて一派をなした懷疑派の思想は、およそ次のようなものであった。「一つの言説に対しては、いつもそれとは反対の言説が対置され、それらは相対的な価値しかもたない。だから、ものごとの本質は把握できない。したがつて、ものごとの本質に関しては、判断を保留すべきである。そうすれば、われわれは、心の平静を得ること

とができる」というものであった。

ヘレニズム時代の地中海世界では、人々の移動も盛んに行なわれ、交易も盛んであったから、それに伴い、人々の価値観や倫理規範も多様化し、混乱を極めた。そのため、人々の魂の中で、それまで支柱にしてきた価値への懷疑が起き、人々は不安な状態に投げ出されたのである。懷疑派の人々が、判断保留から心の平静を求めたのも、そのことによる。懷疑派同様、エピクロス派がアタラクシア（平静）、ストア派がアバティア（不動心）を理想としたのも、文化の混在と価値の動搖の時代に、いかに魂の平和を保つかを考えた人生の知恵だったのである。

今日も、また、文化の混在と相対化の時代である。相対主義と懷疑主義に立脚するポスト・モダニズムは、この文化の混在の時代の価値観の動搖を反映している。だが、今日のポスト・モダニズムは、懷疑と差異化にのみ終始し、ただ現代の不安な流動に戲れているだけである。それに対して、ヘレニズム時代の懷疑主義は、不安な時代にあって、なお心の平静を求めた。この点では、それは、現代のポスト・モダニズムよりもすぐれた面をもつていたと言える。

もつとも、文化の混在と混淆があまりにも広範囲になされ、人々のもつ情報が過剰になり、ない。違った文化同士の接触、刺激、融合によって、独創的な新しい文化が創造されることである。それに対して、ヘレニズム時代の懷疑主義は、不安な時代にあって、なお心の平静を求めた。この点では、それは、現代のポスト・モダニズムよりもすぐれた面をもつっていたと言える。

しかし、文化の混在と混淆があまりにも広範囲になされ、人々のもつ情報が過剰になり、統一ある世界像が散乱してしまうような時代には、文化的創造性は失われる。二十一世紀の現代もそのような時代に属すると思われるが、古代地中海のヘレニズム時代もそのような創造性喪失の時代であった。

例えば、絵画や彫刻などの造形芸術にあっても、この時期には、古典ギリシア時代のような抜群の天才は出現せず、古典期にあつたような調和と均整のとれた形式は崩れた。その代わり、それらは、異国趣味や官能美や激情の表現に向かっていったのである。また、文学においても、古典ギリシア時代のような創造力は枯渇し、それほど見るべきものはない。一般に、ヘレニズム時代の文学には、古典ギリシア期の模倣やパロディが多く、新しい創造性もなくなつていった。学問においても、世界の拡大と知識量の増大に合わせて、博識で情報量に富んだ博物学や地理書が生み出されたが、古典ギリシア時代のような統一ある世界像を結ぶには至っていない。

この時代には、よく知られたアレクサンドリアのブルーケイオンにある図書館や博物館をはじめ、多くの大都市に、莫大な文献や資料を保存する施設が建てられ、世界の情報量とその集積度は飛躍的に増大した。しかし、そこからは、自然科学以外には、文献批判学をはじ

め、それほど創造性のある学問は生み出されなかつた。ヘレンズム時代は、今日同様、世界の空間的拡大と社会の激しい変動のために、情報量だけは過剰に集積された時代であつた。しかし、そのため、人々の精神は散乱し、これといった独創的なものを生み出すだけの生命力をもてなくなつた時代だつたのである。この時代も、現代同様、世界が拡大し、人々の視野は広がり、知識量は増大したが、その分、人々の精神は遠心的原理に支配され、内面的空白化を来たした不安な時代だつたのである。

2 移動する人口

人口減少と人口流入

二十一世紀中には、地球の人口は百億にも達し、この過剩人口を現代文明が扶養しきれるのかどうかが危惧されている。しかし、危惧しなければならないことは、これだけではない。人口爆発を起こしているのは主に第三世界においてであり、先進国ではむしろ人口は減少している。この先進国での人口減少も、文明の維持にとっては重大な問題である。先進国の人口減少は、主に出生率の減少によって起きている。欧米諸国でも、日本でも、出生率は年々減少し、このまま出生率の減少が続けば、今世紀の末には、現在の人口の極く一部くらいの人口に縮小してしまふだろうと言われている。さらに、先進国では、医学の進歩や福祉の充実などによつて、死亡率も低下しているから、人口構成の高齢化は急速に進んでいく。そのため、人口構成に不均衡が生じ、多くの老齢人口を極く少ない若年層の労働力で支えるという不安定な形になる。

少子高齢化という先進国が抱える不安要因は、文明の発達の結果でもある。先進諸国では、どこでも豊かな文明を築き、医療を発達させ、福祉を向上させてきたために、死亡率も出生率もともに低下してきた。このまま進めば、先進諸国の家族は解体し、先進諸国は、福祉国家どころか、介護国家化しないとは限らない。文明の衰退は、最終的には、人口の減少という形で現われてくる。だから、二十一世紀の先進諸国が築き上げた文明も、永遠に続くとは保証できないのである。シュベングラーも、文明末期の世界都市の時代には、人口増加率の漸減という現象が起き、数世紀にわたり人口が減少し、文明は幕を閉じていくとみている。

この先進地域の人口減少を、後進地域からの人口移動によつて埋め合わせするなら、二十一世紀の地理文明は、また新たな問題を抱えることになる。後進地域からの労働者の移住や経済難民の流入によつて、先進地域は人種的にも文化的にも各種異質なものが混在し、それが社会的解体をもたらしかねない。

現に、今日では、交通機関の長足の進歩によつて、陸も海も空も、人々が自由に動き回れる時代が到来している。政治家、経済人、学者、スポーツ競技者、留学生、旅行者ばかりでなく、

労働者、移民、難民なども、容易に境界線を越えて移動している。現代は、地球的規模で展開される未曾有の人口移動の時代である。なるほど、二十世紀も、移民や旅行者ばかりではなく、難民や亡命者を大量に生み出した世纪として、人類史上でも特筆すべき世纪であった。二十一世紀は、この傾向がさらに強くなり、多くの民族や人種が入り乱れる時代になるであろう。

なかでも、貧しい国々から豊かな国々への労働者の移動は、先進国の人口減少と労働力不足を補うためには必要なことである。だが、多くの困難な問題を抱えているのも事実である。北の先進国へ流入して来る外国人労働者は、合法的流入にしても、非合法的流入にしても、一般的に、先進国の下層労働に従事することが多い。外国人労働者には、先進国の大豊かさを求めて祖国を捨てて來た経済難民が多い。外国人労働者の大量流入は、移民と難民の境を不分明にした。

労働力流入がさらに進んでいくとすれば、これは、先進諸国にとって大きな問題を提起することになる。事実、流入する外国人労働者の増加は、二十世紀末以来、先進国にとって重大な問題を投げかけてきている。ヨーロッパ諸国でも、イスラム系諸国や旧植民地から労働者の大量流入が続き、様々な問題が起きている。アメリカでも、中南米諸国から労働者が大量に流入、新たな混乱と摩擦を起こしている。日本でも、アジア諸地域、南米、イスラム系諸国からの移住労働者は、日増しに増えている。この問題は、政治的にも、重大な影響を及ぼす可能性がある。

これら外国人労働者や経済難民の流入によって起きた問題には、職場や賃金など雇用の問題、居住権や選挙権の問題、社会保障や教育を受ける権利など市民権の問題、その他様々な深刻な社会問題がある。また、これらの問題ともからんで、この問題は、生活習慣の違いや言語の違いから、民族・人種・宗教にかかる文化摩擦を引き起こし、受け入れ側、流入側双方に緊張を招くことにもなる。ボーダーレスになると、逆にボーダーフルになるのである。言語や習慣や宗教の違いからくる心理的ボーダーを、国家ではなく、個人や地域が背負わねばならなくなるからである。このような状況のもとでは、多様性の中の共存どころか、各民族が混入し合って、宗教や言語に根差す不寛容な紛争を起こしかねない。

文化摩擦

特に、宗教に根差す文化摩擦は、先進国でも重大な問題になるであろう。すでに、フランスやドイツやイギリスなどでは、流入してきたイスラム教徒と当地の公共機関との間で摩擦が起こっている。文化の混在の時代には、混在の時代だからこそ、宗教の多元性を認め、各宗教が共存しなければならない。しかし、実際には、宗教は最も大きな抵抗力をもつ。各宗教が歩み寄り融合することは、極めて困難なことでもある。

宗教や民族に根差した文化摩擦が激化してくると、流入してきた側でも、それを受け入れた側でも、ともに、自民族中心主義（エヌセントリズム）が起きてきて、互いに排除し合うことになる。流入して来た側は、一般に、自己の宗教や慣習の中に閉じ籠もり、同化を拒絶して、マイナリティ化することが多い。これがエヌセントリズムを呼び起こし、マジヨリティ文化への抗議となつて現われる。他方、受け入れた側でも、雇用問題などを通して排斥運動が起き、そのイデオロギーとしてエヌセントリズムが声高に主張され、緊張は高まる。

現代は価値相対主義の時代である。しかし、それにもかかわらず、否、それゆえにこそ、人々は、ややもすると、自己自身の絶対的なアイデンティティを求めて、自民族中心主義に救いを見出す。それは、いわば価値相対主義の裏返しながら、価値相対主義の寛容の精神が、この自民族中心主義にどの程度対処できるか疑問である。

国民国家の枠が揺らいで、人々のアイデンティティに動搖が見られる現代には、かえって、國民国家とは別の民族的・人種的・宗教的・文化的な共同体の中に自己自身のアイデンティティを求めるようになる。このような排他的な原理主義的傾向としては、イスラム原理主義がよく知られている。しかし、原理主義は、キリスト教、ユダヤ教、ヒンズー教、仏教にもある。原理主義と原理主義は、不寛容な対立を引き起し、その頂点では暴力になる。現代は、なお、統合ばかりでなく、分散の傾向もあわせもつてゐると言わねばならない。

人々が、自民族中心主義や原理主義を主張し、差異への権利を強調しすぎると、統合ができなくなる。その行き着く先は、社会の分裂しかない。そのような危険性の中につつて、なお、多様性の中の共存をはかっていくとすれば、多元主義を包括する何らかの普遍主義を確立する必要がある。しかし、そのような普遍主義が希薄化しているのが、二十一世紀初頭の状況である。統合はなお困難を抱えており、世界は分裂の傾向にある。二十一世紀は、このような民族問題に直面する世紀となるであろう。

外国人労働者や経済難民の流入、文化摩擦や排斥運動の問題の背景には、南北間の経済格差や人口格差など、構造的問題がある。人口増加に悩み貧困に喘ぐ南から、豊かな北の先進国へ仕事を求めて人々が流入し、しかも、豊かな先進国では下層労働を嫌うとすれば、北の世界の底辺部に南の世界が食い込んでくるのは当然のことだと言わねばならない。人の流れが、人口過剰な貧困地帯から、人口の少ない繁榮地に向かう傾向は、大河の流れのように止めることはできない。この問題は、社会の多民族化や文化の混在をもたらすばかりでなく、社会的解体現象さえ引き起し、二十一世紀の地球文明にとつて重大な問題となろう。二十一世紀が政治的統合に向かい、国境線の規制が弱くなつていけばいくほど、人口移動の問題はますます解決困難な問題になつていく。それは、地球社会が一つになるどころか、逆に、内的に解体する方向さえ暗示している。

確かに、人類の長い歴史をながめるなら、人類は常に民族移動を繰り返してきた。それどころか、民族の混淆によって、新しい文明を形成してきました。しかし、「二十一世紀の地球文明が、そのような民族混淆から新しい文明を築き上げることができるかどうかは、不明確である。

二十一世紀は、故郷を失い根無し草となつた流民の群が、豊かな地域を目指して移動する大流民の世紀となるであろう。「二十一世紀の地球文明は、この人口移動によって、大きく逆転していく可能性がある。トインビーも、西歐文明について、それが併存しつつある西歐以外の世界からの反対攻勢を受けて、ほとんど痕跡をとどめないまでに変形されてしまう可能性を予測していた」とすれば、例えば、今日のヨーロッパがイスラム化する可能性もないわけではない。実際、今日のヨーロッパの大都市には、多くのイスラム系民族が住み着き、ヨーロッパは一種の逆侵略を受けているとも言える。しかも、このようなことは、先進地域への後進地域からの人々の流入によって起きてくる。すでに、二十世紀に、インド人がイギリス人の少数支配を逆転し、南アフリカ共和国の黒人が白人の少数支配を逆転したように、遠い将来、この地球文明上でも、そのような逆転現象があるかもしれない。

しかし、それは、それほど驚くべきことでも、危機感を感じなければならないことでもない。今、多数の外国人労働者の流入に苦しむヨーロッパ人も、かつては、ゲルマン人として、自ら古代ローマ世界へ流入し、そのことによって新しい文明を築き上げてきた周辺の異民族だったのである。文明は、しばしば周辺からの逆襲を受け、大きく転換する時がある。中心と周辺が逆転することによって、文明は絶えず変動し、変化してきたのである。

ローマ時代の人口減少と人口流入

ローマ帝国が成立し、地中海世界にローマによる平和がもたらされた時代にも、発達した陸海の交通網を利用した交易や旅行によって、今日同様、人々の行き交いが盛んに行なわれていた。この時代のローマ人の旅行で最も人気のあつたのは、憧れの地、ギリシアのアテナイへの観光旅行であった。アテナイは、成金化したローマ人の観光によつて維持されていたほどであった。現代で言えば、ヨーロッパ観光が盛んなものに似ている。

他方、古代ローマ時代には、征服された属州からの人々の流入も盛んであった。なかでも、特筆すべきは、東方からの大量の奴隸の流入である。彼らは、首都ローマにやつて来て、手工业や家事に従事するとともに、教師や医者や建築家としても働いた。また、ローマ市近郊での農業生産も、奴隸の労働力なくしては成り立たなかつた。初めは東方出身の奴隸、後に陸路で流入してきたゲルマン人たちの労働力によつて、ローマの食糧生産は賄われていたのである。ローマは、これら蛮族といわれた労働力なくして成り立たなかつた。帝政ローマ時代も、周辺から中心への労働力の流入が続き、それがローマ文明そのものを大きく変質さ

せていった。しかし、それは、また、労働を嫌ったローマ人自身の招いたことでもあった。

このことは、今日で言えば、ヨーロッパやアメリカや日本の先進地域に、第三世界から盛んに外国人労働者が流入して来ているのと、ほとんど同じ現象である。

周辺地域からのローマへの人口流入の背景には、今日の先進国同様、ローマ人の人口減少という事実があった。この人口減少の原因は、それまで続いた戦争で、ローマを建設したローマ人の血統が絶えていったということ、二世紀以後の伝染病の蔓延など、様々である。さらに、医学の未発達による乳幼児死亡率の高さも、幾何級数的な人口の減少を加速した。また、帝政ローマ期の性の乱れからくる離婚率の高さ、人工妊娠中絶や産児制限の流行、嬰兒遺棄などによつても、出生率は低下し、人口は加速度的に減少していった。最初の元首アウグストゥスは、紀元前に婚姻に関する法を發布して、人口増を図つたが、どれほどの効果もなかつたと言われる。

この帝政期の人口減少は、今日の先進国同様、労働力不足を招き、農業生産や手工業生産が危機に陥つた。これを補うために、奴隸労働という形で、周辺地域からの労働力の流入があつたのである。また、このような人口不足は、軍隊の新兵補充を難しくした。そのため、軍隊の人員不足を、異民族の傭兵で補つたのである。ローマ軍が次第に蛮族化していくのは、主にこのことによる。さらに、人口が減少し、國力が縮小しても、軍の維持をはじめとする帝国支配のための費用はむしろ嵩んでいたために、帝国は増税策に頼らざるをえなくなつた。この重税は農業生産の減少に追い打ちをかけ、耕作地の放棄が相次いだ。こうして、農村も都市も荒れ果て、ローマ帝国は衰退していったのである。

ローマ人の人口減少を補うようにして流入して來た帝國領内の異民族には、ローマの豊かさに憧れて流入して來た人たちもいた。その背景には、周辺地域の貧困もあつたであろう。彼らは、今日で言えば、先進国に仕事を求めて流入して來る第三世界の労働者に当たる。逆に言えば、下層労働を嫌つて、外国人労働者にそれをまかせている先進国の人々は、流入してくれる異民族を使役していたローマ人と、それほど変わりはないことになる。

ローマ帝国を滅ぼしたと言われるゲルマン人たちも、帝國成立の当初から、部族定住者、奴隸、農民、職人、雇い入れ人、ローマ軍兵士として、ローマ帝国内に平和裡に流入していく。なかには、そこから出世をしていったゲルマン人たちもいた。彼らの中には、ローマ的教養を身につけ、ローマの貴族社会に解け込み、ローマの支配層の中枢部を占めた者さえいたのである。ローマ帝国は、その成立の当初から、徐々に蛮族化していたのである。なかでも、軍の蛮族化は著しい。ローマ帝国は、ローマ人自身から的新兵補充が難しくなつたために、主にゲルマン人から兵士を募つた。ゲルマン人たちも、土地の給付や市民権の付与という特典もあつたために、ローマ軍の傭兵として採用されることを切望した。確かに、蛮族出身者を傭兵として武装させることは、帝國自身にとって危険なことであつた。しかし、

帝国は、蛮族の助けなしでは、もはや、蛮族の侵入を食い止めることができなかつたのである。結果的には、帝国の防衛は、ほとんどゲルマン人の手によつてなされることになる。

かくて、四世紀に入ると、ゲルマン人出身者から、ローマ軍最高司令官になる者も出てきた。アルボガスト、リコメル、モダレス、アエティウスなどは、みな蛮族出身の最高司令官であつた。悲劇の将軍ステイリコも、ヴァンダル族出身のローマ軍最高司令官であつた。彼は、西ゴートのアラリックが侵入して來た時に、最後まで殲滅しなかつたかどで、怠惰なローマ市民に告發され、ホノリウス帝によつて刑死させられた。そのステイリコと戦い、四一〇年、ローマを掠奪したアラリックも、もとは、ローマの最高司令官職を望んでいたほどであつた。

ローマ軍が、蛮族出身者によつて占められていつた原因の一つには、ローマ帝国の市民権政策もある。市民権をもつたローマ人は、かつての時代とは違つて、市民権をもつことを兵役からされる権利と主張し、兵役を忌避したのである。さらに、三世紀に入ると、アントニヌス勅令によつて、帝国内の全自由民にローマ市民権が与えられたために、市民権をもつた自由民には帝国の防衛に当たる者はいなくなつてしまつた。市民権をもたないゲルマン人から兵隊を募集する以外になくなつたのは、このことによる。異民族出身の軍隊には、ローマへの忠誠心は薄く、これがローマ帝国の衰退に結びついたことは確実である。

それどころか、二世紀以来、このゲルマン人の傭兵軍に推されて、異民族出身の皇帝が擁立されることさえ度重なつた。アフリカ人のセブティミウス・セウェールス帝、トラキア人のマクシミヌス帝、アラビア人のフイリップス帝、マウリタニア人のアエミリアヌス帝、イリュリクムの牧童から身を興したディオクレティアヌス帝などは、その一例である。ローマ帝国の蛮族化も、ここに極まつたのである。こうして、ローマ文明は、その末期に、周辺からの逆襲を受け、その内容を大きく転換させていつた。

ローマ時代の文化混淆

交通が発達し、地中海世界を盛んに人々が行き交い、多くの異民族がローマに流入して來ていた古代ローマ時代は、また、各地の風俗、習慣、言語、芸術、宗教など、出自の違つた文化が混在し、混淆した時代でもあつた。それは、最も身近な風俗にも現われた。例えば、四世紀後半以後は、北方ゲルマン人のローマ社会への進出が目覚ましく、それにつれて、ファンションでも蛮族風が流行した。特に、皇帝グラディアヌスは野蛮狂で知られ、野蛮人風の衣服をまとい、野蛮人風の野外遊戯に耽り、それをいくらか倒錯した感じの新しいモードとして氣取つた。また、ホノリウス帝のころには、ローマ市内でのズボンの着用、長髪、ゲルマン風毛皮コートの着用を禁ずる勅令が出された。しかし、それがほとんど守られないほど、この蛮族風の衣装は流行したと言われる。また、四世紀ごろから、蛮族出身のローマ軍

士官は、ローマ名を名乗らず、ゲルマン名そのままを名乗り出している。その一方、五世紀には、逆に、ローマ人がゲルマン名を名乗るのが流行した。風俗においても、ローマ風ばかりでなく、異民族風も流行し、文化は混在したのである。

同じことは、宗教についても言える。首都ローマには数多くの異民族が流入して来ていた上に、ローマは、宗教的には寛容政策を取ったこともあるて、各民族の信仰もどつと入ってきた。神々の数は三万を越えたという。

なかでも、ヘレニズム時代以来のことであるが、地中海世界の東方から伝えられた多くの密議宗教は、それが誕生した地域や民族を離れ、互いに混淆しながら、地中海世界一円に流行した。特に、エジプトから伝わったオシリス信仰やイシス信仰はよく知られている。そのうち、大地女神イシスの崇拜はオシリスの崇拜を凌ぎ、キリスト教が盛んになった四、五世纪になつても継続し、キリスト教のマリア崇拜に影響を与えた。そのほかにも、小アジア由来のキュベレとアッティス、シリア由來のアタルガティスとハダト、フェニキア由來のアドニスとメルカルトなどの密議宗教が流行した。特に、イラン起源のミトラス教は、ローマ軍の転戦とともに、帝政期の帝国内全域に伝播し、キリスト教と競合した。そればかりでなく、オリエント起源の占星術や魔術なども流行し、ローマ世界は異教的雰囲気に満ちていたのである。これらも、周辺からの逆襲によるローマ文明の変質の例に数えることができる。

ローマ人は、風俗や宗教以外にも、芸術や学問など、文化一般について開かれた態度をとり、寛容であった。しかし、文化的にそれほど独創的なものを生み出さなかったことも確かである。軍事や政治や技術に優れたローマ人は、ヘレニズム世界で霸をなし、ついに地中海世界全体を支配するに至つたが、文化的には、征服したギリシアから深い影響を受けた。ローマの上層階級は、ギリシア人の教師や文人学者を招き、こぞつて子弟にギリシア語とギリシア風教養を身につけさせた。そのため、ローマの上層階級の人々は、言語においても、ラテン語とギリシア語の二重言語生活を送り、ギリシア文学や芸術で身を固めた。アウグストウスと同時代の詩人、ホラーティウスの言うように、征服されたギリシアは、征服したローマを逆に征服したことになる。

ローマ人は、ギリシアから文学・芸術・科学・思想など多くのものを学んだが、ギリシア文化の模倣に終始した。哲学思想的にも、ローマ人自身は、ギリシア哲学の咀嚼に重きを置き、独創的な哲学体系を打ち立てる哲学者を一人も生み出さなかつた。帝政ローマ初期の代表的な思想家はキケロであるが、キケロの思想も、ヘレニズム時代に流行していたギリシア由來の様々な思想の混合と折衷にすぎなかつた。ローマ人は、また、ヘレニズム時代のアレクサンドリアの科学も学んだが、そこからは応用技術を学んだだけで、独創的な科学者は生み出さなかつた。思想家にしても、科学者にしても、ローマ時代に独創的な人がいたとすれば、それは、ほとんど東方世界の出身者であつた。

これらのなかでも、特に、文化の混在と混淆の世界にあって、ユダヤ人が示した独特の反応と独創性は注目に値する。ユダヤ人は、ヘレニズム以来ギリシア文化の影響を受け、それに対する同化と反発を繰り返し、その対決を通して独自のものを生み出していった。

例えば、紀元後一世紀前半のエジプトのアレクサンドリアで活躍したフィロンは、古代ローマ帝国内にあって、ユダヤ人でありながら、ギリシア哲学、なかでもプラトンの哲学に傾倒し、これとユダヤ教の思想とを結合させた。フィロンが行なったことは、旧約聖書のモーゼの思想とギリシアのプラトンの思想とを融合し、ヘブライズムとヘレニズムを総合することにあった。その思想の根本は、旧約聖書の中にある神の言葉とギリシア哲学という言葉すなわちロゴスを結びつけて、旧約の思想を解釈し直すもので、後のキリスト教哲学に深い影響を及ぼしたものであった。フィロンの思想は、ギリシア的なるものとユダヤ的なるものとの異質の文化が出会い、混淆したところから生み出された独創的な思想であった。

このフィロンとほとんど同じ時期に、イエスとパウロによって生み出されたキリスト教も、ヘレニズム的なものとヘブライズム的なものとの葛藤から誕生したものであった。キリスト教が、ユダヤ教という民族宗教を超えて、〈神の愛〉による法律からの解放を書き、全人類のための宗教となりえた背景には、コスマボリタン的なヘレニズム思想との出会いがなければならなかつたであろう。キリスト教をローマ世界に伝導したパウロは、もど、バリサイ人として厳格なユダヤ律法を身につけたユダヤ人であった。しかし、イエスの教えに接して回心し、イエスの死とともに、ローマ世界に愛の宗教としてのキリスト教を拡めた。ここに、ユダヤ教がキリスト教という普遍的な世界宗教に大きく飛躍する接点があつた。その後も、ローマ世界では、キリスト教は、ギリシア哲学の用語を借りながらその教義を体系づけていったが、これも、ユダヤ・キリスト教的なものとギリシア・ローマ的なるものとの融合なくしては成立しえなかつたものである。そればかりか、キリスト教がローマ世界を席捲したこと、そのことが、ローマ文明が周辺地域からの逆襲を受け、大きく転換していくことにはかならない。

現代もまた、地球上の各地の文化が混在し混淆する時代であるが、そこから、特に、周辺地域から独創的で普遍的な宗教や思想が生まれてくるのかどうか、その光はまだ見えていない。

画一的なグローバル文明

今日、世界のどの空港に降り立つても、それらはどれもよく似た形や構造をしており、画一化している。年中飛行機に乗って活躍している国際ビジネスマンなどは、このような空港から、すぐに国際ホテルに入り、世界中のニュースを見、ファックスやEメールなど文明の利器を使って、機敏にビジネスを開始する。そこには、何も地域に根差す文化的な違いはない。

それどころか、現代では、ボーダーレス化、グローバル化の流れに乗って、特に先進地域では、日常生活全体が均質化している。若者たちの生活を見ても、どこの国の若者も、よく似たジーンズをき、ロックミュージックを聞き、マクドナルド・ハンバーガーを食べている。なるほど、現代は個性化の時代と言われている。しかし、この個性的な生き方ということが自身が、現代では、すでに企画され、画一化されたものになっており、個性的ではありえない。現代では、ビジネス、消費活動、レジャー、日常生活、すべてが一様化しているのである。

もちろん、現代でも、各地域に根差した文化的差異や多様性がないわけではない。しかし、現代では、これが混合され、平均化され、一つの地球的ネットワークの中に組み入れられて、單一のグローバル文化を形成しているのである。すでに二十世紀からそうなのだが、現代は、グローバルな画一的文明の形成に向かっており、文化的には一様化に向かっていると言える。グローバルな画一的文明の形成を可能にしたのは、ほかならぬ科学技術の力である。科学技術文明は、西欧を震源地とし、十九、二十世紀と時代を追うごとに拡大し、地球を席捲してきた。その結果、すでに二十世紀後半の段階で、世界は一様に科学技術文明に覆われ、急速に一つになつていったのである。科学技術による世界の合一化は、二十一世紀も、地球全体の高度情報化を伴つて、さらに進展していくであろう。二十一世紀も、二十世紀同様、科学技術が世界の共通項となり、世界を組織化し、均質化し、記号化することになるであろう。かくて、科学技術文明は、多様な価値観を基礎としている諸文化に取つて代わり、これらを平均化する。地球的規模に発展した高度情報化社会は、そのような均質化し一様化した社会である。

グローバルな市場経済の動きも、地球規模の画一的文明の形成を加速している。今日では、巨大なヴァーチャル・マネーが国境を越えて動き、單一な商品が世界中に普及し、地球的規模での大衆消費社会が形成されつつある。大量生産と大量消費のシステムは、すでに二十世紀に形成され、発展してきたものである。だが、二十一世紀は、この市場経済の動きに、豊かな

社会を目指す発展途上国も次々と参加し、地球規模の市場経済が完成されるであろう。そして、この地球規模の市場経済にすべてが呑み込まれ、单一なグローバル文明が形成される。その結果、人々の欲望と行動は、グローバル化した市場経済によって画一化され、一様化される。

科学技術と市場経済が演出するグローバル文明の空間も、一様化した空間である。ここでは、空間が均質な広がりでしかなくなる。空間は画一化され、单一化される。交通・通信機関が長足の進歩を遂げ、地球空間が縮小した現代では、地球の表面を支配する人間的・社会的空间は、單一の画一化された空間になる。確かに、われわれは、海外旅行などでは、それに違った文化環境をもつた空間を経験することができる。しかし、この異質な空間を結び付ける空の旅の空間は、短縮され一様化した空間である。文明的空間が、文化的空間を結合しているのである。現代では、この一様化した文明的空間が、地球の表面を覆っている。空港やホテル、高速列車や高速自動車道路、銀行やオフィス、コンピュータ・ルームなどが作り出した空間は、そのような文明的空間である。二十一世紀の地球は、この文明的空間が支配することになるであろう。そこには「場所」というものが欠如している。

グローバルな文明のもとでは、時間も一様化する。十九世紀の西欧を出発点にした産業の発達とともに、工場労働や交通機関の必要性から、時間の統制と統一が行なわれた。そして、近代文明の地球的拡散とともに、この近代的時間も拡がり、すでに時間も地球全体で標準化されている。この標準化された時間に従うかぎり、時間は一樣で均質な時間である。確かに、海外旅行などでは、時差の調整が必要なことから、わずかに場所による時間の異質性を経験することはできる。しかし、それも、世界的規模ですでに標準化された暦法と日付と時間測定のもとでにすぎない。

文化を駆逐する文明

確かに、このグローバルな文明のもとでも、各地域には多種多様な民族が生活しており、それに応じて多種多様な文化が生きている。風俗・習慣においても、言語においても、社会生活においても、その文化的差異は大きい。空間感覚や時間感覚でも、各文化によつてなお異質なものが持続されてしまっている。しかし、地球全体の観点に立つなら、この多様性や異質性を貫いて、それらを統一している一様性を無視することはできない。多様性の上に一様性があり、その一様性が多様性を浸食しているのが現実ではないか。差異は存在するのだが、その差異を廃棄してしまう同一性・個別性は存在するのだが、その個別性を止揚する普遍性が、大きな力を發揮している。文化的相違を凌駕する文明の同質性が、このグローバル文明を可能にしているのである。

このことは、例えば、言語についても言える。世界中で話されていた言語の種類は、かつ

ては一万種以上はあつたであろうと言われている。しかし、現在では、文化の多様性の喪失とともに数が減り、五千から七千語程度しか話されていない。そのうち、現在、二千五百の言語が滅びつつある。その失われるスピードは、さらに加速するであろうと言われている。言語においても、グローバル文明の進展とともに、一様性が多様性を浸食し、文化的差異は廃棄され、均質化する方向に向かっている。

文明とは、物質的・技術的手段の總体と、それを動かすための制度や組織を意味する。とするなら、このような意味での文明は、いつの時代も、あらゆる文化圏を越えて伝播し、普遍的で一様な世界を築き上げていく。十九世紀から二十世紀を経て二十一世紀へと拡大してきた現代のグローバル文明も、交通通信手段の発達、科学技術の急速な発展、近代の政治的・社会的制度の普及、流通や経済の拡大などによって、地球全体にもたらされた文明である。だから、それは、一様性と普遍性、均質性と画一性を特徴としている。

それに対して、文化とは、人々の生活様式一般を意味し、しかも、長い間受け継がれてきた世界觀や価値観、規範や慣習、思考様式を含むものである。それは、多様性と特殊性、多元性と相対性を特徴としていると言える。文化という言葉は、多かれ少なかれ価値や信念の体系を含んでいる。したがって、それは、一つの社会集団を統合する役割をも担っている。文化が、民族、宗教、言語、歴史的伝統などによって、様々に異なるのは、そのことによる。

もちろん、文明と文化は、それほど明確に定義することもできないし、截然と区別することもできない。また、文明と文化は相互に作用し合いもある。文明が変化すると、文化も変容されるし、文化が変化すると、文明も変容する。さらに、文化の目に見える表現として文明が形成されるという面もある。

文化の差異性と多様性をわれわれが認識しうるのも、文明があればこそである。飛行機といふ文明の利器を使って世界一周旅行をするなら、短時間に、今までの人類が築き上げてきただ諸文化の多様性や独自性をまさまさと認識することができる。また、現代は文化の混在の時代であるが、これを可能にしたのも、科学技術文明の発達、特に移動手段の発達による。だから、また、文明が発達し、一つの文明が世界中を覆うようになれば、かえつて異文化との接触が増加する。そして、他の文化の違いが意識されるとともに、自己の文化の違いもまた意識される。文明の一様性と同一性が、文化の多様性と差異性を、逆に際立たせることにもなる。互いの考え方や価値観など、文化の違いによって、相互の誤解が生じ、文化摩擦が起きるもの、均質的で画一的な文明が発達したためでもある。

また、文明そのものが拡大する過程でも、それは、常に、各地域の文化によって変容され、解釈し直されることによって、拡まっていく。例えば、同じ一つの西欧由来の民主主義や資本主義も、地球的規模で拡散していく過程で、それを受け入れた地域の習慣や価値体系によつて変形され、独自の発展を遂げていっている。

また、現代文明が地球的規模で拡大していく過程では、それが地域の文化によって反発されることがあることもある。文明は、文化的な差異を否定し、均質化する面をもつてゐるために、地域の文化の個別性によって抵抗を受けるのである。イスラム原理主義やヒンズー原理主義などは、それ自身ある意味で現代の産物なのだが、そのような現代のグローバル文明に対する抵抗力をもつてゐる。それらは、宗教的伝統を武器に、画一的な科学技術や民主主義などの文明や制度の拡大を妨げる。現代は、特殊性と普遍性のせめぎ合いの中にあると言える。

だが、科学技術や市場経済の進展によるグローバル文明の形成という面に着目するなら、そのような文化的抵抗を駆逐して、文明が一様化していく過程が特に目につく。今日のグローバル文明の拡大は、かつてないほど急速であって、ローカルな文化を囲い込みながら、地球全体を覆い尽くそうとしているように見える。世界中で膨張の一途を辿っている大都市の風景を見るなら、二十一世紀文明が、さらなる一様化と均質化に向かって拡大していくことが予想される。世界中の大都市は、どこでも、同じような高層ビルが立ち並び、高速道路が縦横に走り、どれも区別がつかないほどである。確かに、現代でも、様々な地域の文化の違いはあるのだが、それは、むしろ、現代の巨大な科学技術文明の森の中に点在する特殊空間のようにさえ見える。文明の一様性と均質性が、文化の多様性と特殊性に勝利したかのようである。

もちろん、このグローバル文明の一様性や均質性が、伝統文化の多様性や特殊性と結合するという面も見逃すことはできない。例えば、イスラム世界では、テレビの普及とともに宗教番組が増え、かえつて礼拝の時間が守られるようになつたり、飛行機の発達によつて巡礼が盛んになつたり、冷暖房の普及とともに断食が容易になつたり、ビデオが大学での男女別学に使われたりしている。グローバルな科学技術文明が、伝統文化によつて変形され、両者が共存しているのである。

しかし、これは融合とは言えず、ちょうど木に竹を接ぐように、文明と文化を取つてつけただけにすぎず、創造的というには程遠い。文明化という現象は、なお文化の破壊を伴うと言わねばならない。一様で均質な文明の普及は、伝統文化の核を毀損してしまう面をもつ。地球を覆い尽くす勢いのグローバル文明に参加するには、どの文化圏も伝統文化の核を磨滅させ、科学技術的にも、政治社会的にも、現代性を導入しなければならない。現代性を導入すれば、文化的伝統の核を失い、アイデンティティ喪失に陥るという危機に直面するのである。

科学技術と市場経済に支配されたグローバル文明の潜勢力は、巨大である。そのため、その津波のような勢いの前に、諸文化の差異は薄められ、その多様性と独自性は失われていく。そして、一様化され、画一化された單一な文明が形成される。二十世紀以来のことではあるが、二十一世紀は、均一化された文明がこの地球を包摵することになるであろう。世界の合

一化とはこのことである。こうして、全地球的に覆い尽くされた巨大な物質文明の中に、今までのあらゆる文化が呑み込まれていく。

ヘレニズム・ローマ文明の一様化

ヘレニズム・ローマ時代にも、科学と技術が発達し、それが地中海文明の一様化をもたらした。特にヘレニズム時代には、エジプトのアレクサンドリアなどを中心に、自然科学が発達し、それが実用に供せられていった。この時代に進展した科学の分野は、幾何学、天文学、地理学、医学など、多方面に及んだ。そして、これらの科学的知識が技術に応用され、投石器、複滑車、螺旋水揚器、遊星儀などが発明されている。また、水オルガン、水時計、消防ポンプ、蒸気機関の先駆とも言える気力球、今日の運賃表示機と同じ原理による路線計、自動切符販売機の前身とも言える自動聖水装置などが発明されている。もつとも、この時代には、当時の奴隸制依存社会を反映して、これらの文明の利器が産業の大きな変革を引き起こすことはなかった。しかし、これらが、後、帝政ローマのころの土木建築技術に応用された面は見逃せない。地中海世界一円に建設された多くの似通つたローマ都市は、今日の大都市同様、すぐれたローマの科学技術の力に負うところが大きい。

ヘレニズム・ローマ時代も、科学技術の力が諸文化の差異を平均化し、文明の一様化をもたらしたのである。科学技術とその目に見える物質的成果こそ、文化が混在し価値観の混乱したヘレニズム・ローマ時代の共通項だったのである。ヘレニズム・ローマ時代も、均一化した文明が地中海世界を覆い、その均一性の中に、当時の諸文化が呑み込まれていった時代だつたのである。

2 水平化と平均化

大衆民主主義のグローバル化

十九世紀から二十世紀にかけて、科学技術と産業主義の進展に伴って、社会の階層的秩序が崩壊し、社会は水平化し、人々は平均化して、巨大な大衆社会が形成されてきた。そこでは、すべての人と同じであることに安心感をもつ大衆が、砂のように、群れから群れへと流れしていく。個性を失つた平均人によって形成される大衆社会は、均質化した無定形な社会である。二十一世紀は、グローバル文明の拡大とともに、このような無定形な大衆社会が地球大化する時代になる。二十一世紀も、交通・通信技術をはじめ、科学技術は発展し、産業主義はさらに進展するであろうから、それとともに、大衆化も地球上に広範に拡散して、地球全体が一つのグローバルな大衆社会になるであろう。

民主主義の世界的拡大も、大衆社会化現象のグローバル化を加速する。十九世紀から二十世紀

にかけての民主主義の拡大も、大衆社会化を助長した。それにつれて、民主主義は、大衆の自先的な欲求に左右される大衆民主主義になつていったのである。二十一世紀は、この大衆民主主義が世界的に拡散していくであろう。中国をはじめ、アジアに残存する共産主義国もやがて民主化し、多數政党政府になる日は近い。そして、それは、ほどなく大衆民主主義に変貌していくであろう。

しかし、この民主主義の世界的拡大は、必ずしも民主主義の勝利を意味しはしない。大衆民主主義社会は、自先の大衆が権力を握っている社会であるから、国家はいつも大衆の気まぐれに支配される。そこでは、大概、大衆の欲望に根差した凡庸な意見が多数を制する。そのため、大衆民主主義のもとでは、大衆の恣意的欲望を反映して、凡庸な指導者が代表に選ばれてくる。たとえ指導力のある適格者が出でても、十分活躍できない。ここでは、為政者は、主権者である大衆のご機嫌をとつて、大衆の気に入りそうなことを並べ立てる。このような大衆迎合主義のもとでは、政治はその日暮らしの衆愚政治になり、国家はやがて破産することにさえなる。民主主義を健全に運営していくには、人民に徳性があり、それによつて徳ある指導者が選ばねばならないが、大衆民主主義にはこれができないのである。

民主主義が奉ずる平等主義も、衆愚政治を助長するであろう。確かに、民主主義は、今まで、平等を旗印に階層的秩序を行き渡し、社会的不平等をなくしてきた。しかし、大衆民主主義のもとでは、この平等の概念が行き過ぎ、あらゆる面で完全な平等が求められる。平等の名のもとに、社会的・経済的条件そのものの平等が要求され、さらに分配や結果の平等が要求される。その結果、平等は欲望の平等と化す。ここでは、身分、貧富、教育など、すべての面で平等が追求され、あらゆる不平等が批判される。このような平等絶対主義のもとでは、人間そのものが平均化され、水平化されてしまうであろう。

大衆民主主義国家は、大衆の過剰な欲望を満たすために、多くの場合、過保護国家化する。それは、大衆の要求に呼応して、社会保障や雇用政策、住宅政策や環境政策、国土開発から景気政策に至るまで、あらゆる任務を引き受けるようになるため、行政機構は肥大化する。

しかし、その機構維持のための負担増には、大衆は反対する。相反する要求を満たそうとして、政府は財政難に陥る。

ほとんどのものを用意したこの福祉国家のもとでは、大衆にとって、生きるということはそれほど困難ではなくなつたために、大衆は、甘やかされた子供のように、これといった努力もせずに、要求を次々と肥大化していく。このような過保護な社会にあっては、大衆は自立心や自発性を失う。過保護国家化した大衆民主主義社会は、何とも社会に頼ろうとする依存心の強い大衆を生み出すのである。大衆は、自主的精神を失い、まるで豊かな社会の寄生虫のように、享楽的な生活をしていく。現に、今日の爛熟した高度産業社会の大衆は、あらゆるものを与えてくれる社会の中で、耐久消費財から、サービス、ファンション、旅行、

文化に至るまで、ありあまる消費生活を享受して暮らしている。

大衆民主主義下の過保護社会では、豊かな体制に甘えて暮らす寄生虫の大衆を大量に生み出す。これは、社会の水平化、人間の平均化の極である。大衆民主主義国家や福祉国家は、水平化・平均化による墮落という慢性的危機を抱えている。大衆民主主義や大衆消費社会の世界的拡大が二十一世紀の趨勢だとすれば、それは慢性的危機のグローバル化にもなる。

グローバルな大衆文化

二十一世紀は、大衆社会のグローバル化に伴って、大衆文化も地球を席捲するであろう。

衛星テレビやインターネットを通して、大衆の娯楽のための手軽な文化が、国境を越えて地球全体に放射されることになる。大衆文化は、もともと、平均化された大衆の享楽に供されるもので、刹那的で、感傷的で、感覺刺激的で、凡庸な文化である。これが世界中に撒き散らされることになる。

もっとも、大衆文化の拡散は今に始まつたわけではない。十九世紀は主にヨーロッパが、二十世紀は主にアメリカが、大衆文化を世界中に撒き散らした。特に、二十世紀にアメリカが発信した大衆文化、映画やジャズ音楽やロック音楽などは、大量生産と大量消費のシステムに乗つて世界中に拡がり、二十世紀の文化の品位を失わせた。日本も、二十世紀末には、ゲームソフト、アニメ、漫画、カラオケ、演歌など、大衆文化を輸出し始めた。二十一世紀は、日本ばかりでなく、経済成長を遂げたアジア諸国も加わり、大衆文化を輸出することになるであろう。このようにして、二十一世紀も、また、メディアの発達とともに、文化の加速度的な質の低下が演じられる。二十一世紀の文化も、ますます平均化されることになるであろう。

考えてみれば、ここ二百年、文化は低落の一途を辿つてきたとも言える。印刷術や複製技術、ラジオ・テレビの発達によって、文化は、大衆の娯楽に供するための商品として、大量供給され、大衆はこれを消費してきた。文化も、大量生産と大量消費のシステムの中に組み込まれ、單なる消費物質と化してきたのである。実際、文学、思想、絵画、音楽が、どれも、大衆によって気楽に楽しむお手軽文化になつていった。古典的な文学や芸術も、大衆に呑み込みやすいように適当に調理され、ダイジェスト化されていった。その結果、文学や芸術も單なる流行にすぎなくなつた。大衆に人気があり流行しさえすれば、すぐれた価値があるかのように判断された。この時代の文化は大衆の享楽のために供されるもので、大衆を楽しませさえすればよかつたのである。ここでは、文化は大衆の目先的興味に迎合して生産されたから、低俗化は免れなかつた。

活字文化の面でも、大衆社会化状況を反映して、水準の加速度的な低下は免れなかつた。印刷術の発達と普通教育の普及による識字率の上昇によつて、逆に、活字文化世界は、大衆

向けの出版物の大洪水となつた。文学でも、興味本位のものや際物めいたものがマスコミによつてもはやされた。この時代は、平均的大衆が支配した時代であつたから、大衆の願望や幻想をくすぐるものが新聞やテレビで取り上げられた。そして、新聞やテレビで人気を博しさえすれば、その内容にかかわらず、流行作家になれた。彼らは、もともとマスコミにもてはやされて登場してきたから、おおむねタレント化していった。この大衆消費社会では、大衆におもねて人気を勝ち取る偶像にすぎない者が、大衆のヒーローのように称賛されるのである。

二十一世紀も、大衆文化の普及に伴い、このような大衆文化が地球的に拡散することになるであろう。二十一世紀の文化も、地球全体を覆うマスメディアや高度情報通信システムによって、世界中の大衆の消費のために大量生産される。だから、それは、二十世紀同様、水平化された平均的な文化になるであろう。そこでは、高いものも、低いものも、創造的なものも非創造的なものも、すぐれたものも、すぐれていのものも、その差異はぼかされ、平均化されてしまう。十九・二十世紀も、文化は平均化してきた。だが、二十一世紀は、地球社会のほぼ全域が大衆によって支配される時代となるであろうから、文化の平均化はさらに地球的に拡がることになる。世界中の大衆が、低俗を崇拜し、すぐれた文化を平均的なレベルに引き下げ、高貴なものを駆逐していくことになる。文化的不毛の時代は、なお続くと言わねばならない。

すでに十九世紀の前半、キエルケゴールは、その時代を、何¹²とも平均化され引き下げる¹³れる「水平化の時代」とみた。また、ニーチェは、十九世紀後半のヨーロッパ世界を見て、物質的豊かさにのみ満足している最後の人間¹⁴の登場を予言していた。このキエルケゴールやニーチェが感じ取ったその時代の予兆は、その後、「時代を追う」とに加速度的に拡がり、今日では、地球を覆うほどの勢いになつていて。確かに、現代人の精神は、興奮と刺激を求めて加速度的に没落してきたのである。文化的頽落の時代はなお続くであろう。

文明の平均化

十九世紀以来、人類は、近代化という名において、国家をより広範な組織にし、産業を育成し、社会を平等化してきた。そして、この近代化に遅れた国家は、近代化に先んじた国家に、闘争や競争、和解や協調など、様々な手段で追いつこうと努力してきた。二十一世紀に残された南北問題も、同様に、近代化に遅れた国と近代化に先んじた国との格差をいかにして是正するかという問題である。この問題も、しかし、北の先進国から南の途上国へ技術や産業が移転していくなら、南の途上国も次第に経済発展を遂げ、近代化を果たしていくことになるであろう。それどころか、逆に、世界経済の重心が南の途上国へ移動する。これもある意味で、人類社会の平準化、水平化現象と言える。

だが、このようにして、北も南も地球全体が文明化を果たし、高度な産業経済社会を形成していくということは、また、地球規模で高度大衆社会を形成していくことでもある。高度大衆社会を形成すれば、社会は大衆の目的的な欲求に左右され、水平化していくであろう。さらに、文化は、大衆の趣味に合わせて、平均化していくことになるであろう。そして、文明は、それ自身が生み出した大衆によつて消費されていくであろう。

文明は、いつでも求心力を失い、白蟻に食われて倒れていく家のように、内的に崩れ去つていく可能性をもつ。シニベングラーも、大衆とは終末であると言う。そして、文明の末期には、第四階級が勝利を收め、文明自身を滅ぼすと考へている。第四階級とは、文化を拒否する大衆であり、無形態で、品位や秩序を憎悪する世界都市の新遊牧民のことだと言う。¹⁴

エントロピーを無秩序の尺度と定義するなら、文明も、また、中核を失つて、エントロピー増大の方向に向かい、無秩序化することは常にある。社会における犯罪の多発、麻薬汚染、青少年の無気力、教育の荒廃、政治の腐敗など、今日見られる精神的荒廃現象は、すでにエントロピー増大の方向を指し示している。あらゆるもの低い方へと平均化し、混沌の中へ呑み込む得体の知れない潜勢力によって、今までの諸文明も呑み込まれ、溶解してしまうこともあるかもしれない。

二十一世紀の地球文明は、そのような文明の衰退の兆しを内に抱えながら、しかも、それに大概の人が気づかない混沌とした文明になるであつう。それを不安と言うとすれば、長い不安な時代が続くことになる。

古代ローマ文明の大衆化

古代ローマ世界も、特に帝政以後は、社会的にも、文化的にも、一種の大衆社会を形成していく。社会的には、何よりも、貴族階級の没落が目につく。共和政末期から帝政初期にかけて、打ち続いた内乱と政治的混乱によつて、それまで続いた名門貴族の家柄は絶滅し、後に補充された貴族も激減していく。この貴族階級の滅亡は、古き良きローマ人の美德の消滅を意味した。また、わずかに残った貴族の子孫たちも、時代の趨勢に染まって、高貴な精神を失つてもいっただ。

それに対して、帝政以後の市民階級の抬頭は著しい。ローマは、イタリア半島外での反乱に対処するためもあって、紀元前九〇年には、ローマに忠誠を誓つてきたイタリア半島の全都市と、武器を捨ててローマに降伏した都市の自由人すべてに、一括してローマ市民権を与えた。また、その他のローマ版図内の従属都市の上層部に対しても、その市民権付与政策を拡大していく。さらに、ローマ市に流入してくる外国人に対しても、時代を追うごとに市民権を与えていった。

この市民権の拡大で特筆すべきは、解放奴隸の急増である。ローマ市に奴隸として流入し

てきた異民族も、公式の手続きを経れば、解放され、ローマ市民権を獲得することができた。

賢明な奴隸であれば、小金を貯めて数年で自由を買い取ることができた。また、主人に忠実な奴隸は、主人の遺言によつて、かなりの額の遺産とともに解放され、ローマ市民権を獲得することができた。さらに、紀元前五八年に制定された穀物配給法では、解放奴隸も穀物の無償配給が得られることになった。そのため、多くの市民は、これを得るために奴隸を解放した。こうして、帝政ローマ社会は、解放奴隸出身のローマ市民が増大していったのである。

エロ時代のペトロニウスの作品とされる『サテュリコン』という諷刺小説には、トリマルキオンという俗物が奴隸から解放されて大金持ちになるサクセス・ストーリーがあり、古来有名である。このような低俗な読み物が流行したということは、解放奴隸出身の市民の増大を反映するとともに、一種の大衆社会化現象が起きていたことを反映するものであろう。三世紀初めのアントニヌス勅令では、ローマ帝国領内の自由人のほぼ全員がローマ市民権を得得することになったが、これも帝政後期の大衆社会化を促進するのに貢献した。

このような帝政期の大衆社会化現象は大衆の欲望の肥大化を招き、食糧や娯楽を求める市民たちの無節度な要求が日増しに募つていった。(パンとサーカス)の要求である。また、為政者は為政者の方で、これに迎合し、市民たちに食糧を分け与え、娯楽施設を次々と建て、大衆の「機嫌をとつた」。政治家が選舉に当選するためにも、また、貴族が高級官職を得るためにも、さらに皇帝でさえ、大衆の人気を勝ち取るためには、ローマ市民のために、派手な競技や演劇など見世物を提供し、大浴場や円形闘技場など娯楽施設を建てねばならなかつた。その浪費や贅沢は度を越していた。

このような大衆の欲望の肥大化と為政者の大衆迎合主義によつて、ローマ市民の無料穀物受給者はどんどん増え、紀元一〇〇年前後には、その割合は、ローマ市の総人口の三分の二から半分に達していたと言われる。さらに、国費に依存し余暇をもてあましたローマ市民たちは、為政者が提供する見世物見物に明け暮れ、享樂的な生活に埋没していく。その結果、帝政末期には、市民たちは、一年の半ば以上も遊んで暮らすようになったのである。このような福祉の増大は、当然、国家財政の破綻を招いた。

この点では、ローマ時代も、現代も、それほど違いはない。現代もまた、大衆民主主義のもと、大衆の目先的な欲求によつて、公益は私益に還元され、国家はいつも財政難を抱えている。ローマ時代も、現代同様、大衆化の時代であり、ある意味で水平化・平均化の時代だつたのである。

文化的にも、帝政期のローマ文化は、大衆化したローマ市民におもねて俗流化し、どれほど創造性も發揮しなかつた。文学でも、幅をきかすものと言えば大衆文学が主で、人気取りを狙つた大衆作家ばかりがもてはやされた。大衆作家、民衆、そして批評家が、こぞつて文学の質の低下に手を貸したのである。

共和政末期から帝政初期にかけての詩人、ホラーティウスも、このような俗流文学の流行

を憤慨し、それらの扱い手である大衆を軽蔑している。彼に言わせれば、愚衆は、演劇鑑賞でも、その文学的要素には冷淡で、見世物的な要素に興味をもつたため、演劇はスペクタクルやサーカス、ファッショントヨーに変わり、劇場は動物園と化してしまう。彼の判断によれば、民衆は物欲や情欲の塊で、他人の幸福に羨望と嫉妬を懷き、移り気で常に人の足を引つ張るものである。ホラーティウスの『ローマ頌詩』第一歌の冒頭、「聖城を瀆す世俗の徒をわたしはいとうてこれより離る。^{さよ}なんじら口を慎め」という句は、大衆への激しい苛立ちと、その低俗に対する気位の高い拒絶を吐露している。そのため、彼は、自分自身の書いたものを大衆の面前で朗説することを拒絶し、極少数のすぐれた人々にのみ読まれることを期待した。諷刺詩の中の「大衆うけのするようなものには力を入れないで、わずかな読者をもつならば、それで満足するべきだ」¹という句は、大衆化時代に直面したホラーティウスの孤独を表わしている。彼は、すでに帝政初期の段階で、ローマの文化の頽靡を感じ取っていたのである。

この時代には、また、素人文学も盛んで、それを発表するために、盛んに朗説会が催された。それほど独創性もない作品を朗説会で人に聞かせることが、流行ったのである。当然のことながら、その文学的質は低下していった。これも、文学の大衆化現象の一つで、今日にも見られる現象である。

また、この時代の法廷弁論も堕落していく。未熟で力不足の弁士たちが、喝采屋を金で雇い、その喝采屋たちの拍手や声援によって自分の弁論を飾り、陪審員に効果的な影響を与えたのである。そのため、価値ある弁論は衰退し、公正は影を潜めていった。これも、大衆化現象の一つに数えてよいであろう。

帝政ローマ期も、今日同様、時代を追うに従って、文化の程度は、大衆化によって低い方へと平均化し、低落していくのである。帝政期のローマ文化は、大衆の文化であった。帝政時代は、文化の成果が下層の大衆にまで拡がり、その分、水準を落としていった時代だったのである。

皇帝ネロの政治顧問であったストア派の哲学者、セネカは、「幸福なる生活について」の中で、真理の最も悪い解釈者たる俗衆に氣に入られようとしてはならないと言い、何ごとも多数者についていくべきではないと言っている。これも、その当時の大衆化現象を批判したことであつた。セネカは言う。

「人々が倒れると上から上へとかさなつて、それこそ大きな転倒者の堆が出来るのだ。民衆が押し合つて、誰かが倒れると必ず他の人をも自分と一緒に引き倒さないではおかず、最初の者は次に続く人々にも破滅を齎すことになる」と。¹この文明も、大衆化する時衰退する。大衆の欲望の肥大化、それに対する政治家の迎合、

政治の質の低下とそれに伴う統治能力の喪失、文化の低落、そのような大衆社会化状況が、古代ローマ帝国の没落の一つの原因であったことは確かである。帝政ローマ時代も、大衆化による慢性的危機の時代であった。それは、いわば治療の困難な癌のようなもので、心ある少數の人々がいたとしても、それらの人々では食い止めようのないものであった。このようにして、地中海世界全域の富を集めて繁栄を極めたローマ帝国も、その繁栄ゆえに生じた放縱と堕落によって、衰退していくのである。

V

膨張と略奪

膨張する現代文明

一九七二年に発表されたローマ・クラブの報告書、『成長の限界』は、当時、世界に対し衝撃的な警告を与えたが、今なお意義を失っていない。その趣旨は、先進工業国の生産と消費、および第三世界の人口は、幾何級数的に増大しており、このまま続くなら、エネルギー・資源の枯渇、食糧生産の限界、地球環境の汚染にぶつかって、人類社会は破局を迎えるであろうというものであった。だから、人類はいつまでも急速な成長を続けることはできないというのが、ローマ・クラブの警告である。

『成長の限界』によれば、ここ二百年ほどの間、工業化の急速な進展が人口の急速な増大をもたらし、逆に、人口の急速な増大が工業化の急速な進展を引き起こし、両者は相乗的に作用し合って、成長してきた。また、人口の急速な増大は大量の食糧生産を必要とし、そのためには産業の急速な成長が要請された。それが、多くの地球資源の消費をもたらし、そこから廃棄された物質は多大な地殻環境汚染を引きこした。人口、食糧生産、工業化、エネルギー・資源の浪費、環境汚染が相互に関係し合って、どれも幾何級数的に増大してきたのである。この現代社会の現象は二十一世紀の今も続いている、とどまるところを知らない。

確かに、十八世紀末の産業革命以来、人類がつくりあげてきた現代文明は、西欧を出発点にして急速に拡大し、十九・二十世紀には西欧外の諸国をも呑み込み、今日では第三世界をも取り込みながら、膨張に膨張を重ねている。その幾何級数的膨張の勢いは、全地球を覆うばかりでなく、宇宙空間にまで拡がっている。

現代文明にとっては、膨張こそすべてである。膨張は一種の運命であつて、現代文明は、膨張することなくして生きていいくことができない。現代人にとって、膨張はほとんど強迫観念に近く、われわれは、このような強迫観念に囚われて、より多くのものを求め、忙しく働いている。現代人にとって、安定は後退を意味し、かえつて不安を募らせる。その不安が不安を呼び、人々はさらなる膨張を求めて、前へ前へと進んでいく。欲望が際限なく解放され、人々が飽くなき欲望追求の生活を送るようになつたのも、この膨張する文明を背景にしている。現代の欲望の肥大化には限度がなく、節度ある均衡は失われてしまつている。

世界経済の膨張と資源・エネルギー問題

膨張する世界経済は、膨張する文明の直接の推進者である。世界経済は、十九・二十世紀と時代を追うごとに、物資の大量生産と大量消費を可能にする機構を目指して、産業を発展させ、幾何級数的に膨張して來た。その膨張の波は、前世紀末から今世紀初めにかけては、今日

先進国と言われる北側の世界ばかりでなく、南側の発展途上国にも急速に及んでいる。二十

世紀前半も、途上国への経済発展の波は急速な勢いで進展していくであろう。途上国も、雁が水面から飛び立ついくように、次々と経済成長の波に乗ってくる。その結果、今世纪

も、世界経済は地球的規模において膨張し続ける。

経済成長は、なお、誰もが価値をおく目標であり続けるであろう。成長経済に遅れを取つた途上国は、先進諸国に追いつくために、急速な経済成長を遂げることに血道をあげるであろう。確かに、このことは、途上国の貧困を克服し、生活水準を上昇させることであるから、望ましいことである。これなくして、南北問題の解決はない。

しかし、このように地球全体が経済発展を遂げれば、また新たな問題が生じてくる。先進国の資源浪費に加え、途上国の経済発展による資源浪費も、地球上の資源の枯渇を招き、エネルギー源の不足を起こして、人類存続の可能性を急速に狹めるからである。この資源・エネルギー問題は、発展途上国と先進国との間の利害の激突を招き、資源をめぐっての途上国と先進国との紛争さえ起こしかねない。経済発展に伴う資源・エネルギーの消費は、資源の枯渇や環境の破壊を引き起す。

この問題を解決するためには、何よりもまず、先進国や発展途上国のエネルギー消費を抑えねばならない。様々な省エネルギー技術を開発し、限られた資源を有効に活用し、さらに、石油に代わるべき代替エネルギー源を開発しなければならない。

もととも、ローマ・クラブの『成長の限界』で指摘された石油資源の短期間での枯渇という予測は当たらなかった。石油の価格上昇とともに、それに見合つて可採埋蔵量が増え、油田開発が進んだからである。石油はそれほど簡単になくなりはしない。しかし、それでも、経済発展が途上国にまで及べば、石油消費量は幾何級数的に増大する上に、大気汚染など地球環境問題を引き起す。だから、二十一世紀は、エネルギー源としての石油依存から脱却しなければならなくなるであろう。

とはいっても、代替エネルギーとしての原子力発電は、コストが高くつく上、放射性廃棄物などの問題を抱える。原子力依存もすでに限界にきていて。二十一世紀の資源・エネルギー対策は、他の再生可能エネルギーの開発に向かわねばならない。水素エネルギーの開発も、その一つである。これは、水を電気分解して取り出した水素を酸素と化合させて電気を取り出す方法で、すでに燃料電池として開発されている。これを自動車に利用することによって、石油依存問題と環境問題を一挙に解決できる。太陽エネルギーの方も、次世代太陽電池の開発によって太陽光発電の効率を高めれば、エネルギー源として十分活用できる。その他、風力発電、地熱発電、天然ガスの利用、石炭の再利用などがある。二十一世紀の資源・エネルギー問題は、あらゆる手段を組み合わせて対応する以外にない。資源・エネルギー問題は、膨張する世界経済に対する警告ではあるが、それでもなお、世界経済は、このような形でも、

あらゆるところに資源・エネルギー源を求めて膨張し続けるであろう。

世界人口の膨張

世界人口の急激な膨張も、膨張する現代文明の一つの表現である。世界人口は、産業革命以来、幾何級数的に増加の一途を辿り、最近では、人口の倍増期間も短くなっている。二十世紀初頭には十六億人だった世界人口は、二十世紀末には六十億人に達し、このまま何の対策も講じられなければ、二〇五〇年には百億人に達すると言われている。もっとも、出生抑制などいろいろな対策が講じられればその限りではないが、少なくとも、今世紀中に百億人に達することは確実である。十八世紀末のマルサスの『人口論』での予言が、再び現実感をもつて人類社会に問われている。

二十世紀後半以来の地球上の人口爆発は、ほとんどが途上国の人口増加による。二十一世紀には、この傾向がさらに加速されるであろう。その原因は、出生率が高い今まで死亡率が急激に低下したことにある。途上国では、多産に価値をおく伝統的な考えが根強く残っている上に、主に労働力の確保のために、人口抑制の意図は弱く、出生率は高いまで推移している。そこへ医療技術や公衆衛生の進歩が途上国にも及んだため、死亡率が急激に低下した。その出生率と死亡率の落差が、途上国での急激な人口増加となつて現われたのである。

今世紀中に、遅かれ早かれ世界人口百億の時代が訪れるとすれば、この過剰な人口を扶養するだけの食糧を確保できるかどうかが、二十一世紀の重大な問題になる。だが、この問題は、バイオ・テクノロジーなどを使って食糧増産をはかれば、技術的には解決できるであろう。実際、二十世紀も、緑の革命によって穀物の収穫量は驚異的に増大し、ある程度急増する人口を養いえた。それは、品種改良や農業機械の開発、化学肥料や農薬の使用など、農業技術の進歩によるもので、これによつて農業生産力は飛躍的に高まり、世界の食糧需要を一応満たしえたのである。もちろん、二十世紀に開発されたこれらの農業技術は、農地の酷使や劣化を招く上に、土地不足をきたし、楽觀を許すものではない。また、人口爆発による食糧不足は、農地の確保のための森林伐採、土壤浸食、土壤流出、砂漠化など、環境劣化や生態系の崩壊を招く危険性もある。しかし、それでも、新しい技術を開発しさえすれば、作付け面積の拡大を必要とせず、環境を保持しながら、食糧増産は可能であろう。そして、分配の公平さをはかる社会技術が併えば、百億の人口扶養も不可能ではない。

むしろ、人口問題にとって問題なのは、地球上での人口分布の不均衡であろう。なるほど、途上国では、人口は増加の一途を辿っている。しかし、先進国では、出生率の急激な低下などによって、人口増加率は落ち込んでおり、今世紀は減少に転ずると予測されている。この不均衡をならすようにして、貧しい人口急増地帯から豊かな人口減少地帯へと、人口が大量に移動したなら、社会秩序の混乱を招き、重大な問題を引き起こすことにもなる。この現象

は、すでに、先進諸国への外国人労働者の流入や経済難民の流入という形で起きている。二十一世紀は、むしろ、この問題に悩まねばならなくなるのではないか。

この問題を解決するには、北の先進諸国が、人口増加に悩んでいる南の途上国へ産業を移転して、途上国の近代化をはかり、生活水準を上昇させる以外にない。そうすれば、食糧確保も可能になるし、第一次産業に従事する労働力も少なくてすむから、人口増を食い止めることができる。生活水準が上がり、教育水準が上昇すれば、人口増は抑制でき、同時に、移住も抑制できる。

しかし、このことは地球全体の都市化を意味する。都市化すれば、豊かな体制に甘えて享楽的な生活に埋没する大量の大衆が氾濫するであろう。モラル・エナジーの喪失という内面的問題は残ることになる。人口爆発という二十一世紀の問題を解決しようすることは、結局、世界中の都市化という現象を招き、そういう形で、現代文明の膨張はなお続くのだと言わねばならない。

都市の膨張と環境問題

都市の膨張は、膨張する現代文明の象徴である。高層ビルの林立する現代の大都市は、前世紀も、世界中で膨張に膨張を重ね、巨大化してきた。都市とは、もともと、その名が示すように、交易のための市場として成立したもので、それ自身としては食糧の生産を行なわない人間の集団的居住区域である。しかし、そこには、食糧をはじめ、あらゆる物資が集積し、貨幣が集積し、情報が集積し、人が集積してくる。都市とは、人のあらゆる欲望の集積地なのである。その欲望の無限氾濫が、都市の膨張という形で現われてくる。現代の大都市に天を欺くかのように林立している高層ビルは、この欲望の無限氾濫の象徴であり、いわば現代のバベルの塔である。

二十一世紀が二十世紀から引き継いだ問題の一つは、都市の膨張の問題、つまり加速度的な都市化の進行とその巨大化の問題である。今日では、すでに世界人口の半分が都市部に住んでおり、都市人口の比率は今世紀もますます高まっていく。特に、発展途上国の都市化とその巨大化は激しい。環境破壊、土地の劣化、土壤流出などのために、人々が、農地を捨てて、大舉して都市に殺到してくる。この過剰人口の都市流入は、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカなどの途上国の中でも著しく見られる。二十一世紀前半に増大する人口の約五分の三は、これらの地域の諸都市に集中するであろうと言われている。しかし、これら第三世界の都市は雇用の吸収力をもたないため、多くの弊害に悩まされることになる。

二十世紀初頭には、人口一千万を抱える都市は十三しかなかったが、二十一世紀初頭の現在では、人口一千万人以上の都市が世界中に数多く出現している。人口はさらにこれらの巨大都市へと集中し、今世紀は二千万人を越える巨大都市も出現するであろう。しかも、少なく

とも人口一千万人以上の巨大都市の大半は、発展途上地域に出現する。これらの巨大都市（メガロポリス）は、互いにつながつて世界都市（エキュメノポリス）になるであろうと言われている。これは都市の膨張の極限である。二十一世紀は世界都市の時代である。

だが、二十一世紀の巨大都市も、二十世紀に続いて、様々な問題を抱えている。先進諸国の大都市も、環境汚染、過密からくる劣悪な居住空間、交通渋滞、犯罪の多発、災害、麻薬汚染、経済難民の流入など、深刻な社会問題を抱えており、社会的な意味での生活は必ずしも豊かとは言えない。途上国の巨大都市は、もっと深刻である。途上国の巨大都市は、急激な都市化に対する社会技術の遅れから、食糧不足、失業、住宅難、環境破壊など、居住環境の劣悪化が進んでいる。

なかでも、今日の巨大都市が抱えている最大の問題は、環境問題であろう。排気ガスによる大気汚染、ヒートアイランド化、エネルギー多消費による地球温暖化への影響、大量消費経済からくる廃棄物処理問題、騒音問題など、都市居住環境は悪化し、これらが巨大都市の生活空間を蝕んでいる。途上国の巨大都市でも、河川の汚濁、水質汚染、水不足、公衆衛生の低下による疫病の流行など、深刻な環境破壊がある。巨大都市化による荒廃は、日増しに増大している。もちろん、廃棄物のリサイクル技術の開発など、技術の開発によって解決できる問題が多い。そういう新技術の開発こそ、二十一世紀の課題である。しかし、それでもなお、都市のスプロール現象はどうまるところがない。都市は拡大し、どこまでも膨張していく。

また、途上国の巨大都市にとっての最大の問題は、スラム化の問題である。アフリカ、アジア、中南米の大都市では、荒廃した農村から人口が急激に流入してきて、就業の機会もなないまま、スラムが形成される。途上国の巨大都市は、下水や水道や電気、道路や交通機関、住宅や雇用、教育や医療などの社会基盤が未整備なため、流入者はこれらのサービスを受けることができない。そのため、人々は、危険で不衛生な場所に、テントや掘つ建て小屋を建てて住み、集団化する。その結果、スラムは、貧困や飢餓、疫病や犯罪、暴力の吹き溜まりになる。途上国の巨大都市の人口は、ほとんど、このスラムの人口によつて膨らんでいく。やがて、中・上流階級は郊外へ避難し、都市はスラムの住人が占拠するようになる。その結果、途上国の巨大都市は機能不全に陥る。この危機的様相は「都市の癌化」と言われるが、これをどのようにして解決するかは、今世紀に課された課題である。

さらに、これらの都市問題ともからんで、世界中の大都市で犯罪が急増している。都市が巨大化すればするほど、社会の連帯感や信頼は失われ、コミュニケーションは崩壊する。そのため、犯罪や暴力が多発し、麻薬や銃が横行する。このような法秩序の崩壊や社会的解体現象も、二十一世紀の都市が抱える大きな問題である。

しかし、それでもなお、都市生活は人々にとって魅力である。巨大都市が抱える危機的状

況にもかかわらず、流行のファッショニ身をませ、享楽的な生活を営むことのできる巨大都市は、人々を魅惑する。この欲望の巨大組織とでも言うべき巨大都市の魅力に誘われる

ようにして、人口は巨大都市に集中していく。二十一世紀の巨大都市も、限界に達するまでは、休むことなく膨張し続けるであろう。

二十一世紀初頭の巨大都市の出現を、二十世紀の初頭にすでに予言していたのは、シュベングラーであった。シュベングラーは、巨大都市は文明の終末期に現われ、農村を吸いつくしながら、新しい人間の流れを貪り食い、規模を大きくしていくとみている。そして、次のように言う。

「このあらゆる歴史の最後の奇蹟の罪障深い美しさの手中に落ちるものは、もう二度とそれから出ることができない。……人はいなかに帰るよりも舗道の上で死ぬのをよいとする。」

「歐米文明の世界都市はその発展の頂上に達するにはまだはあるかに遠いのである。……二〇〇〇年のずっとのちに、一千万から三千万人をいれるに足るひろい土地の上に配置された都市計画があると思う。その建物にくらべると、今日の最大のものも小人のように見えるであろうし、その交通觀念は今日のわれわれには気違ひざたと思われるであろう。」

この『西洋の没落』の中の予言は、二十一世紀初頭の今日の状況をまさまさと言いかでている。

膨張の限界

現代文明は、自らの限度を越えて限りなく膨張してきた。経済の膨張、人口の膨張、都市の膨張はその表現である。しかし、現代文明の膨張も、いずれ限界に達する時は来る。ローマ・クラブが示した地球環境の汚染、資源の枯渇、食糧生産の限界などは、現代文明の幾何級数的膨張の限界を指摘したものであった。なるほど、それらの制限は、新しい技術の開発によつて突破していくことができるかもしれない。しかし、それでもなお、何事も無限に膨張していくことは不可能である。どこかに限界というものはある。

地球上で営まれている生態系ばかりでなく、地球そのもの、宇宙そのものが、無数の要素の相互連関によつて動いている世界であり、人間の文明もその中で営まれている。人間の文明の営みも、相互連関性の世界の外で行なわれているのではなく、中で行なわれている。したがつて、当然のことながら、人間の行為は相互連関性の世界を乱し、それを変えていく。同時に、その世界の変動は人間自身にも返つてくる。

ところが、十九世紀以来今日に至るまで、人類によつて営まれてきた現代文明はこのことを忘れ、ただひたすら癌細胞のように膨張してきた。現代の科学も、技術も、経済も、この

文明の無限膨張に貢献してきた。そして、それを進歩と言ひ習わし、その価値を盲目に信仰してきたのである。しかし、癌細胞が無限に増殖していくことができないよう、現代文明も無限に膨張していくことはできない。必ず、相互連関性の世界から反作用を受けて、膨張の限界にぶつかる。地球環境問題や資源・エネルギー問題は、その限界を予告しているものであろう。

もしも、この膨張の限界が急激に訪れるとするなら、人類社会は、突如としてカタストロフに見舞われることになる。その時、世界経済は急激に縮小し、地球環境汚染も極限に達し、資源も枯渇し、飢餓が訪れ、人口も激減していくことになるであろう。場合によつては、資源や食糧をめぐつての戦争が起きないとも限らない。急激な人口調節が、そのような戦争によつてなされるということもないわけではない。都市の膨張も停止し、収縮に向かうであろう。今日すでに見られる途上国の巨大都市の機能不全の有様は、もしかしたら、そういう破局の予兆なのかもしれない。破局の後に待つているものは、混乱と無秩序であり、社会的解体である。この時、現代文明の膨張は終わりを告げ、大きく後退していく。ローマ・クラブの『成長の限界』は、このような破局の訪れを二〇〇〇年より先に延ばすことはできないと警告した。

もつとも、破局の訪れを、新しい技術の開発によつて回避することはできる。環境対応型技術や食糧増産技術など新技術の開発に、法の制定や政策の実行など社会技術が加われば、予想される危機を事前に予防することは可能である。科学技術も、社会の外にあるのではなく内にあり、社会の要請を感じて、常に変わつていかねばならない。科学技術も、いつまでも同じ原理にとどまつてはならない。科学技術が変化し、社会技術が進歩するなら、これまでの大量生産・大量消費型文明から、資源を浪費しない循環型文明に、文明そのものを転換していくことができる。そして、人類は、進歩・発展の観念から脱却し、調和・均衡の観念のもと、人類社会を膨張型から均衡型へ変えていくことができる。この時、はじめて、人口も、経済も、都市も安定するであろう。

しかし、このようにして破局を回避し、安定と均衡の社会を実現できたとしても、もしも、その社会の中で、人々が、古代ローマ人のように、皆こぞつて享楽主義に走り、文明に対する忘恩を続けていくなら、それは單に破局の延期にすぎなくなる。文明は慢性的な危機に陥り、次第に衰退していくことになるであろう。混沌とした時代はなお繼續すると言わねばならない。

古代ローマ文明の膨張

古代ローマも、共和政から帝政にかけて、膨張に膨張を重ねていった。ローマ人は、紀元前二七二年にイタリア半島を統一して後、第一次ポエニ戦争でカルタゴを破り、地中海制霸

に乗り出し、第二次ポエニ戦争ではカルタゴに壊滅的な打撃を与えた。紀元前二世紀に入る
と、ローマは地中海東部に食指を伸ばし、ヘレニズム諸王国を一連の戦いによって破り、版
図を次々と拡大していった。この一連の戦いによってローマの属州や勢力圏に加えられた地
方は、マケドニア、シリア、エジプト、ロドス、アカイア、小アジアのベルガモンなどであ
つた。その間、第三次ポエニ戦争ではカルタゴを殲滅、西方のスペイン全土もローマの領有
するところとなつた。かくて、ローマは、地中海世界の東部も西部も支配下に收めるに至つ
たのである。その後もローマの版図の拡大は続き、今のヨーロッパ、ガリア地方にも支配は
及んだ。紀元後一世紀前半のクラウディウス帝時代には、ブリテンを征服。二世紀はじめ
トラヤヌス帝時代には、ダキア、アルメニア、メソポタミア、アッシリアにまで版図を拡大
した。古代ローマは、その長い歴史の過程で、打ち続く征服戦争によつて、膨張に膨張を重
ねていつたのである。

このローマの版図の拡大とともに、ローマ軍は、共和政以来の市民軍から志願兵を中心の軍
へと変わり、やがて蛮族の傭兵によつて占められるようになつてゐた。それは、ローマの
版図の膨張によつて、防衛線が距離の二乗に比例して拡張し、共和政以来の市民軍では防衛
しきれなくなつたためでもあつた。ローマも、いわば幾何級数的に、その支配圏を膨張させ
ていつたのである。

ローマの支配圏の膨張に比例して、都市の膨張も起きている。ローマの版図の拡大とともに
に、ローマの支配下に入った各属州から、人口が首都ローマへ大量に流入し、ローマ市は急
激に膨張していつたのである。

このローマ市への人口流入の原因の一つに、穀物の無料配給制度があつた。第二次ポエニ
戦争でカルタゴを破つて後、北アフリカから貢物として穀物が大量に入つてくるようになる
と、その穀物がローマ市民に安い価格で分配されるようになつた。しかも、それが、紀元前
五八年以降は無料となつた。この属州からの穀物の流入は、穀物価格の暴落を招き、イタリ
ア半島の農業の衰退を招いた。多くの農地が放棄され、農村人口も減少。土地を失つた農民
は、ローマ市に大挙して流入して来て、無料穀物配給の受給者になつていつたのである。そ
の結果、働かずして食えるようになつた大衆は、サーカスの観衆となり、公衆浴場の利用者と
なつていつた。パンとサーカスの恩恵による大規模農業を始めたが、彼らも不在
流入して來たこのような人々だったのである。

彼らは、紀元前一三一年のグラツィス兄弟の農地改革でも、分割された国有地の譲渡を受
けながら、それを耕さずにすぐに売却し、ローマ市に戻つて、国家給付を受けた。裕福な大
土地所有者は、放棄された農地を集めて奴隸労働による大規模農業を始めたが、彼らも不在
地主としてローマに住み、奢侈で放漫な生活を送つた。

このようにして、首都ローマは、帝政期の二百年ほどの間繁栄を謳歌し、人口百二十万人

を抱える大都市となつた。貴族たちは多くの奴隸とともに大邸宅に住み、流入してきた貧民階層は高層の共同住宅に住み、あちこちに、柱廊、競技場、浴場、神殿、学校などが建設された。しかも、このようなローマ市に似た都市がローマの版図一帯につくられ、これらのローマ都市にも人口が流入し、その拡大を助長したのである。ローマ文明は、今日同様、巨大な都市文明であつた。

ローマの版図の拡大とともに、ローマ帝国の経済も膨張に膨張を重ね、繁栄を極めた。帝政期に相次いで行なわれた大規模公共土木事業は、その象徴であつた。ローマ市には、競技場や広場や大浴場が造られ、道路が整備され、新しい港が建設され、巨大な水道工事が行なわれた。これらは、今日でいう財政投融資の意味をもつていた。ローマ帝国の収入は、戦争による賠償金、戦利品、捕虜売却金、鉱山收入、そして、何より、属州からの税金によつて賄われた。皇帝たちは、地方の属州から税金を取り立て、それを、人気取りのために、軍隊やローマ市の市民にばらまいたのである。ローマ市の市民には、穀物ばかりでなく、豚肉、葡萄酒、現金なども配られ、戦車競技や剣闘士の戦いなど、娯楽も提供された。

だが、この過剰な福祉政策は、かえつて、国家に依存して生きようとする遊民の放縟と堕落を招き、「パンとサーカス」の要求を際限もなく増大させていった。やがて、配分可能なハイがなくなると、とどまるところのないインフレが起き、物価は高騰した。特に三世紀に入ると、銀貨の改悪がなされ、インフレはますます昂じ、国家財政は悪化した。それでも、軍隊は肥大化し、官僚制は膨張し、福祉は増大していくために、国家財政は破綻に瀕していった。これを増税によって解決しようとしたが、それは生産性の低下と経済不況、つまりインフレを招き、ローマ社会全体の解体につながつていったのである。

ローマ帝国がインフレやデフレに悩み、国家財政が破綻していくのは、帝国そのものの膨張がすでに限界に達していたからである。帝国が最大版図を誇ったのはトラヤヌス帝の時代であったが、次のハドリアヌス帝は、トラヤヌスによる膨張部分のうち、ダキアを除く他の三州を放棄、一一七年、ローマの版図は膨張を停止した。これが、ローマ社会の発展が止まり、停滞が始まったマルクマールになる。それ以来、軍事的勝利による富がローマにもたらされなくなり、奴隸の供給も少なくなり、帝国の経済は縮小に向かつていった。すでに帝国は拡大しすぎ、膨張の限界に達していたのである。

このローマ帝国の衰亡の開始とともに、都市の膨張も終わりを告げた。諸都市への農村からの人口流入は次第に減少し、逆に、農村が都市住民を吸収し始めた。ローマ市の富裕者層も、ますます重くなる税負担を逃れるために、郊外の農村に逃亡した。

ローマ帝国は蛮族の侵入によつて滅ぼされたという説は否定できるものではないが、しかし、それ以前にすでに帝国は瓦解していたのである。繁栄を極めたローマ帝国も、その繁栄ゆえに衰亡を招いた。

ギボンは、『ローマ帝国衰亡史』の中で、次のように言っている。

「繁栄が腐敗の原理をはびこらせ、破滅の諸原因是征服範囲の広がりに伴つて倍加して行った。時の経過と偶発事の続出とが人工的な土台を取除いてしまうや否や、その途方もなく膨らんだ機構は自らの重みに抗しかねた。」

このギボンのよく知られた叙述は、膨張には限界があることをよく語っている。

二十一世紀の地球文明がすでに膨張の限界に達しているのかどうかは、まだ分からない。しかし、経済、人口、都市のとめどない膨張を見るなら、ローマ帝国のように、いずれ膨張の限界に達し、衰退していくことはある。不安な時代はなお続くと言わねばならない。

2 自然と生命の略奪

地球環境問題

二十世紀末以来、環境汚染や生態系の破壊は地球規模にまで拡大し、遺伝子操作や臓器移植技術など生命操作技術の発達は、すでに人間そのものを人為的に操作できる段階にまで到達している。限りなく膨張する現代文明は、自然や生命の奥深くに侵入し、これをどこまでも略奪してやまない得体の知れない意志をもつているかのようである。

この膨張する現代文明を支えてきたものは科学技術の力である。近代の科学技術は、自然を人間のための存在とみ、自然を支配し改造することによって、巨大な文明を構築してきた。それは、自己自身の中に閉じ籠もり、自然や生命を資源化しながら、癌細胞のように自己膨張してきた。科学技術という手段そのものが自己膨張し、自然も生命も略奪してきたのである。それでいて、限りなく膨張していく科学技術文明そのものの究極的目的や価値は、不正確である。膨張する現代の科学技術文明は、自己目的的に膨張し、地球全体を覆い尽くそうとしている。これは、十九・二十世紀以来の営みであるが、二十一世紀もなお進展していくであろう。科学技術は一体どこへ行こうとしているのであろうか。その行き着く先が分からぬといふところに、漠然とした不安がある。

地球環境問題は、今日の人類が抱える深刻な問題である。資源の浪費、大気汚染、地球温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨、森林破壊、土壤流出、砂漠化、農地減少、水源枯渇、水質汚染、海洋汚染、野生生物の絶滅、廃棄物問題など、地球環境の破壊や汚染は、すでに二十世紀後半の段階で重大な問題を投げかけた。今世紀も、先進国や途上国の経済成長が進展していくればいくほど、この問題はさらに深刻化するであろう。

環境問題は、二十世紀の後半、最初、地域的な公害問題から出発したが、やがてそれは地球規模の問題に拡大し、文明のあり方そのものが問われるようになった。地球的に拡大していく経済成長は資源やエネルギーを大量に消費し、爆発する人口は森林破壊をもたらし、地球の

生態系は限界に達したのである。この問題は、自然災害の多発、農業基盤の破壊、健康被害、食糧不足、紛争の激化、環境難民の発生など、文明の存続にかかわる重要な問題となつて立ち現われてきた。

地球環境問題の中でも、最も大きな問題は、化石燃料の大量消費によつて生じる種々の問題であろう。人類は、近代産業を発展させていく過程で、エネルギー源として、石炭や石油など化石燃料を大量に消費してきた。これが、大気汚染など地球環境の汚染をもたらし、多くの問題を発生させた。なかでも、二酸化炭素の大量排出による地球温暖化は、干魃や洪水などの自然災害、熱帯雨林の破壊、砂漠化、海面上昇による陸地の減少、伝染病の発生、害虫の増加などの被害を増幅し、食糧生産に多大な影響を与える。また、化石燃料の大量消費は、硫酸化物や窒素酸化物による大気汚染をもたらし、酸性雨の原因にもなる。そして、それは、森林枯死、土壤の酸化、魚類の死滅など、重大な影響を与える。また、この大気汚染に加えて、途上国の焼畑の増加や先進国の木材輸入の増加などによつても、森林破壊が進んでいる。森林破壊は土壤浸食や土壤流出を起こし、直接農業生産の減少につながる。その他にも、野性生物種の絶滅、環境ホルモン、耐性菌の発生、大量の廃棄物など、次々と深刻な問題が発生している。

もつとも、この問題は、技術的に解決できないわけではない。特に、エネルギー資源としての化石燃料の大量消費の問題は、エネルギー利用の効率化をはかる技術や再生可能エネルギーの開発などによって、解決していくことができる。なかでも期待できるのは、水素エネルギーの利用である。これを、燃料電池として、自動車エンジンに利用すれば、少なくとも、自動車から出る有害廃棄物はゼロになる。さらに、水素を取り出すために必要な水の電気分解に、太陽光発電や風力発電や地熱発電などの自然エネルギーを利用すれば、地球温暖化も防止できる。石油や石炭の化石燃料を使う場合でも、集中的に有害廃棄物の処理を行なえば、可能である。また、発電の時生じる廃熱を再利用してエネルギー効率を高めるコゼネレーションを用いれば、二酸化炭素の排出を大きく抑制することができる。

他方、生物機能を利用すれば、これは、発電にも、二酸化炭素の固定にも、砂漠の緑化にも、応用していくことができる。廃棄物処理問題も、リサイクル技術を開発し、法制定を行なつて実行していくば、解決可能である。また、それを大きくして、産業廃棄物をゼロにする構想（ゼロ・エミッション構想）を実現し、産業構造そのものを循環型構造に転換すれば、問題はなくなる。

地球環境汚染や資源エネルギーの浪費は、近代の科学技術が起こしたことなのだから、それは、また、科学技術そのものが変わることによつて、解決していくかねばならない。さらに、国際的環境法の制定や環境規制、炭素税の導入、短期収益主義の廢止など、社会技術が加わり、文明そのものを循環型文明に転換していくなら、地球環境問題は解決できるかもしれない

い。

近代の人間は、自然を人間のための手段と考え、自然を略奪することによって、豊かな文明を築き上げてきた。しかし、それは、どこまでも地球生態系の破壊という犠牲の上においてなされたことであった。見方を変えれば、十九・二十世紀は、産業技術文明による地球生態系の破壊の時代であったとも言える。それとともに、自然是、人間の内部からも失われていった。破壊されたのは外部の自然だけではない。人間は、自然を略奪しようとして、自らの拠り所を失つたのである。たとえ、二十一世紀に、地球環境問題が科学技術によつて解決されたとしても、この問題はなお残るであろう。

古代ローマの環境問題

古代ローマ時代にも、地中海全域に巨大な文明を構築したことによる自然環境の破壊があつた。古代地中海文明は海洋文明であつて、その文明を支えていたものは、主に海上交通であつた。だから、当然のことだが、多くの船が必要とした。その船は、森を切り開き、木を切り倒して造られた。例えば、古代のレバノンには、よく知られたレバノン杉の森が繁茂していた。しかし、レバノン杉は、大きな船のマストにするのに最適であつたために、古代を通じて盛んに伐採してきた。ローマ時代にも、伐採は進み、そのため、次第に森林は枯渇していく。この森林伐採が、土壤を劣化させ、気候にも影響を与えた、文明衰退の一つの要因になつたと言われる。土壤流出や気候の乾燥化は、農業生産を停滞させていったからである。

もちろん、この土壤の劣化や地力消耗には、社会的・経済的原因もあるから、森林伐採にのみその原因を帰することはできない。しかし、停滞した農業生産の代わりに放牧が行なわれるようになると、放牧された羊や山羊は草や若木を食い、新しい森林の成長を妨げた。これがますます土壤の劣化を招き、これに乾燥が加わり、マラリアをはじめ疫病の流行を招いて、ローマ人の人口再生産力や活力を衰えさせたと言われる。このような環境破壊が、少なくとも帝政ローマ期には徐々に進んでいたのである。

ローマ時代の公害問題としては、鉛害があげられる。ローマ人は、鉛管の水道水を飲み、鉛製の食器を使い、鉛入りの化粧品を使い、葡萄酒の酸味を減らすために鉛酸化物を加えたという。この鉛害が、男性の精子を減少させ、女性の流産を招いたと言われる。これは、今日で言えば、環境ホルモンの問題に当たる。古代ローマ時代にも人為的原因による公害問題があり、それが文明衰退の一因を担つていたということことは否定できない。

『新約聖書』巻末の一書「ヨハネの黙示録」は、小アジアで迫害されているキリスト教徒を慰藉するために、神の国の到来とキリストの再臨、そして地上の王国の滅亡を予言したものである。「黙示録」の一節に、次のような節がある。²⁰

「第二の御使が、ラツバを吹き鳴らした。すると、火の燃えさかっていける大きな山のようなものが、海に投げ込まれた。そして、海の三分の一は血となり、海の中の造られた生き物の三分の一は死に、舟の三分の一がこわされてしまった。」

「第三の御使が、ラツバを吹き鳴らした。すると、たいまつのように燃えている大きな星が、空から落ちてきた。そしてそれは、川の三分の一とその水源との上に落ちた。この星の名は『苦よもぎ』と言い、水の三分の一が『苦よもぎ』のようになってしまった。水が苦くなつたので、そのために多くの人が死んだ。」

これは、まるで現代の核戦争や環境破壊や水質汚染を予言しているかのようであるが、これは、帝政ローマという地上の国の終末を予言したものだつたのである。

生命操作

膨張する現代文明は、自然ばかりでなく、生命の神祕にも深く分け入つて、これを人間にために供し、略奪しようとしている。現代文明の膨張を推進してきた科学技術は、自然を支配し改造することによって文明を構築してきたが、その力は生命にも及び、生命をも支配し改造することができるようになった。二十世紀末以来の生命操作技術の発達は、それを物語ついている。二十一世紀には、この技術は長足の進歩を遂げ、あらゆる生命の改造を可能にするであろう。

例えば、脳死状態からの臓器移植は、二十世紀末には、世界中で幅広く行なわれるに至っている。脳死状態からの臓器摘出を容易にするために、脳死を人の死と認めることが可能になった。しかし、深刻化する臓器不足の解決策として、少年や無脳児からの臓器摘出を認めたり、植物状態でも人の死としようしたり、死の定義が拡大解釈されようとしている。さらに、臓器需要を賄うために、臓器売買を認めるべきだという意見もあり、臓器の商品化はますます進んでいく傾向にある。

だが、脳死状態からの臓器移植は、自分の命を守るために他人の死を必要とするわけだから、医療としては矛盾を含み、ある意味で、アテスカの人身御供にも似て、原始的で野蛮な行為だとも言える。そのため、二十一世紀は、むしろ、人工臓器の開発、万能細胞の開発、クローリン技術による臓器培養が進展するであろう。脳死状態からの臓器移植は過渡的技術にとどまるであろう。

かかることは期待できず、二十一世紀も行き着くところまで進むであろう。

生命操作技術の中で最も目覚ましいのは、遺伝子操作技術の進展である。すでに二十世紀末の段階で、遺伝子組み替え技術も発達し、動植物の遺伝情報の解読も進展し、ヒト・ゲノムの解読も完了した。その結果、遺伝子診断、遺伝子治療、遺伝子操作による医薬品の増産、農産物の大量生産、家畜の増産など、遺伝子操作技術は大きなビジネスに発展しつつある。

例えば、遺伝子診断や遺伝子治療の分野では、ヒト・ゲノムの解読が完了したため、各種遺伝子欠損疾患に対する遺伝子治療、癌、糖尿病、アルギーリー疾患、筋ジストロフィー、パーキンソン病など、遺伝子疾患の遺伝子治療、エイズや分裂病や鬱病の遺伝子治療なども可能になると言われている。また、遺伝子診断によって、一人一人の遺伝子のタイプに合った医薬品や予防薬の開発もでき、オーダーメイド医療も可能になる。

さらに、クローン技術も進歩し、全く同じ遺伝子をもつ生物の大量生産が可能になつている。この技術を使えば、優秀な遺伝子をもつた牛や豚の大量生産ができるし、クローン羊やクローン牛を動物薬品工場に使うこともできる。また、クローン技術によつて、人間に移植する臓器を他の動物に作らせることもできる。発達した生殖技術と組み合わせれば、クローン人間を生み出すことも困難ではない。この技術を使えば、全く同一の人間を大量生産することができる。これは禁止される方向に進んでいるが、禁止はいつでもくぐり抜けられるであろう。

ヒト・ゲノムの解読に加え、遺伝子操作技術、生殖技術、クローン技術などを組み合わせれば、望みの遺伝子組み合わせをもつ子供、優秀な体型や知能をもつた子供などを、人為的に量産することもできる。これは新しい形の優生学であるが、大きなビジネスになる可能性がある。くわらしき新世界の誕生であり、人種改良をしようとしたナチスを嗤えなくなる時代が到来することになる。

発達した遺伝子操作技術は、人工的に人間を改造しうる段階にまで踏み込んできているのである。二十一世紀は、人間自身が人間の進化を操作することができるようになった世紀として記憶されるであろう。人類は、ついに、生命創造という神の技を手中に収めたことになる。技術が神になつたのである。

生命操作はどこまで許されるか

しかし、このような様々な生命操作技術の進展は、よく議論されているように、倫理上の重大な問題を抱えている。例えば、体外受精による非配偶者間人工受精や代理母など、不自然な生殖は、親子関係や兄弟姉妹の関係が、遺伝的関係と社会関係の間で混乱し、人倫の崩壊を招いている。それは、当然のことながら、自己同一性（アイデンティティ）の混乱を招く。子供にとつては、誰が一体自分の本当の親なのか分からなくなる危険が社会に幅広く拡

散することになる。事実、すでに、現代のオイディップス王物語が発生しているのである。場

合によつては、何十年も前に生存した天才や英雄の子を、彼らの死後に産むというようなことも、今世紀中には起きるかもしれない。このような人倫の混乱をどこまで認めるか、何を基準とするかが問題になる。

また、殺人をどこまで認めるかという深刻な問題も生じている。すでに、脳死患者からの

臓器移植が認められていることは、脳死患者を死に至らせるということなのだから、殺人を法的に認めてることになる。殺人も法的に認められるとすれば、例えば、遺伝子診断で、胎児の遺伝子に重大な欠陥があることが分かつている場合、これを中絶すべきかどうか。多胎児が生まれることが分かつている場合、その減胎処置は許されるかどうか。冷凍保存された体外受精卵を一定期間で廃棄すべきかどうか。そして、これらの処置をした時、殺人になるのかならないのか。さらに、その処置の決定権を誰がもつのか。このような問題が山積している。

この問題とも連関して、人の命や生存権や人格をどの段階で認めるかという問題も出てくる。人の命や生存権を、受精の段階で認めれば、受精卵の廃棄や胎児の中絶は殺人になるが、出産時から認めるとすれば、殺人ではなくなる。また、脳死患者から臓器を取り出し死に至らせることは、脳死患者の生存権も人格も認めないということになるが、それは新しい型の優生思想になりはしないか。もしも、これを拡大していくと、植物状態患者にも、重度心身障害者にも、生存権や人格が認められなくなり、ナチスの思想と変わらなくなる。

生命世界は、自然世界の一部であつて、無数の要素が相互に連関し合つて変化していく系である。しかも、それを操作するという行為は、その系の外で行なわれるのではなく、その系の中で行なわれている。したがつて、その行為は、当然、その系そのものを変化させてもいいし、その変化が行為者自身にも跳ね返つてくる。それは予測不可能な世界である。だから、生命世界における生命操作という行為が何を生み出すことになるかは、誰にも分かつてはいないということになる。遺伝子操作の過程で、人為的に遺伝子変異が起き、新しい病原微生物を作り出すことになるかもしれない。クローン技術などで遺伝子を画一化すれば、遺伝子の多様性を保つことができなくなり、環境の変化に適応できなくなる可能性もある。生殖操作による障害児誕生の危険性、精子や卵子の取り違えの危険性もある。

とすれば、生命操作はどこまで許されるのかが問題になる。遺伝子操作にしても、生命の無限の複雑性に対して、どこまで手を突っ込んでよいのかは不確かである。人類は、すでに、植物や動物に對しては、クローンやキメラを作つて、進化の流れを人為的に変えていく。その操作の手は、人間自身にも及ぶ。人間は、自分の計画通りに、人類という種を改变しようとしているのである。なるほど、未來の世代や生態系への影響を顧慮して、遺伝子操作を行なわぬ細胞にまで及ぼすことは禁止されている。しかし、この禁止破りは、今後ますます行なわ

れていくであろう。

また、遺伝子診断による遺伝子治療も、遺伝病ばかりでなく、他の病気の治療にまで拡大していっている。これも一種の優生操作であるが、この優生操作はどこまで許されるのか。異種間臓器移植に危険性はないか。生殖操作の対象者をどこまで認めるか。遺伝子治療の許される疾病的範囲はどこまでか。ゲノム情報や臓器売買などの商業化はどこまで許されるか。これらの限界や歴止めをどこにおくか。倫理や法で歴止めを設けるといつても、その基準は国によつてマチマチだから、たとえ国際基準を立てても、その基準は次々と破られていくであらう。科学技術は盲目であつて、科学技術の原理に従つてどこまでも突き進む危険性をもつてゐる。

一般に、今まで、医療は、生命をできるだけ維持し延ばすことに価値を見出し、延命技術を発達させてきた。しかし、この延命技術の発達も、今日では行き過ぎている。そのため、過剰な延命治療のために、生命維持装置によつて無理に生き長らえさせられている多くの人々がいる。これら死ねない人々は、死ねない苦しみを味わいながら生き長らえていかねばならない。寿命を延ばし、生命を長くしても、その先是見えない。單なる生命を延ばすことなどれほどの意味があるのか。現代ではこの問題も問われている。科学技術は発達しても、その最終価値は分かつていないので言わねばならない。

「默示録」の中でも、終末に面した地上の人間の苦しみについて、次のように言われてゐる。

「その時には、人々は死を求めても与えられず、死にたいと願つても、死は逃げて行くのである。」

二十世紀が生み出した高度技術は生命の領域にまで及び、生命を人間の手で操作できる段階に達した。二十一世紀は、この方向が進展するであろう。この生命操作技術の発達がもたらした最大の危険性は、生命の神秘性への畏怖の念が失われたことである。生命操作技術は、機械論的な生命觀によつて、生命の神秘性を剥奪した。限りなく膨張する人間の欲望は、生命をも剥奪したのである。

しかし、生きるということは、大自然に生かされて生きることである。私の命は大自然の命であつて、それを絶つことも長らえさせることも、大自然に背くことになる。人間の命も単に人間のものではなく、大自然とつながつてゐる。人間の命も、人間の手で無理に支配できるものではない。人間は、長い進化の歴史をもつた生命の神秘性に、それほど安易に介入してよいものではない。

それでもなお、二十一世紀も、生命操作技術がどこまでも進んでいくとするなら、人類は、プロメテウスの運命を背負いながら、不安な時代を生きしていく以外にないことになる。

故郷喪失と美德の喪失

二百年も前からのことであるが、産業の発展と社会の大きな変革につれて、多くの人々が生まれた故郷を捨てて大都市へ流入し、無定形な大衆社会を形成してきた。それとともに、人々の心中でも、昔から引き継がれてきた価値が遠くへ退き、人々は精神的な停泊地をもたない故郷喪失者となつていった。地球規模で人口が移動する二十一世紀も、このような精神的無宿者を地球規模で生み出し続けるであろう。世界中の大都市へ人口が流入している現代は、グローバルな故郷喪失の時代である。

どの文化圏でも、文明が爛熟すると、伝統的根幹や倫理観は崩壊し、人心は荒廃し、精神的故郷喪失者が氾濫する。そして、この故郷喪失者たちは、心の支柱を失つて、精神的流民と化していく。心の故郷を失つた流民たちは、価値観を動搖させ行き惑う。心の中の核が失われて、アイデンティティが曖昧になり、内面的空白化を起こすのである。現代人が内なる空虚を抱え、何とはなしの不安を懷いて落ち着きを失つたのはそのことによる。

今日、先進諸国にも発展途上国にも見られるモラルの低下という現象も、文明の発展による伝統的核の喪失に起因する。文明の発展とともに、伝統的共同体が破壊され、社会は次第に美德を喪失していく。技術の進歩発展によつて、便利で快適な文明生活が実現すると、節度は忘れ去られ、過度な快樂が追求されて、魂は貧弱化する。

例えば、今日のアメリカや日本でも、科学技術の進展によつて実現された高度消費社会は、道徳的頽廃を招いた。家庭の崩壊や犯罪の急増、麻薬の横行や青少年の反社会的行動など、社会の無秩序化は加速度的に進行し、社会そのものの解体を告げている。そればかりか、高度消費社会が生み出した商業主義は、性にしても、暴力にしても、何でも金儲けの対象にして、人々の心を蝕み、社会的頽廃に拍車をかけている。

ダニエル・ベルは、すでに二十世紀後半に進行していたアメリカ社会の混乱の源泉を、勤労や節制、倫約や禁欲を重視するプロテスタン倫理の崩壊に見ている。⁽¹⁾同じようなことは、日本についても言えるであろう。日本でも、二十世紀の後葉以来、豊かな社会の実現とともに、伝統的な儒教倫理は激激な勢いで崩れ去つていったのである。この傾向は、今日経済発展を遂げているアジアの発展途上国に辿りつた運命でもある。文明が進展すれば、それとともに伝統的核が失われ、モラルエンジニアは失わっていく。技術は進歩しても、道徳は進歩しない。否、むしろ退歩する。富が増せば、徳は失われていくのである。

青少年非行の激増は、豊かな社会がモラルの低下や社会規範の脆弱化をもたらしたことを如実に表わしている。と同時に、それは、いずれ社会全体が解体に向かうであろうことを予告している。暴力、薬物乱用、殺人など、激増する青少年の反社会的行動は、豊かな社会の産物であった。豊かな社会の実現は、社会規範を搖るがし、他者との共感を奪い、青少年の自我の成長を阻害した。青少年の無規範な行動はそこから出てくる。そこには、すでに強力な規範はなくなっているから、罪の意識もなければ、後悔とか反省という感情もない。自我はすでに空洞化しており、その空洞の中から、ただ衝動のみが爆発するだけである。この青少年非行は、世代から世代へと加速し、今世紀は、発展途上国をも巻き込みながら、量的にも質的にも拡大する。

青少年非行ばかりでなく、今世紀は、先進国も途上国も、犯罪が激増し、社会は解体に向かう。どこでも、多くの人口が大都市に流入し、人口構成の国際化やスラム化などによって、都市は荒廃する。その結果、犯罪発生率が上昇し、治安は悪化する。このことは、すでに二十世紀後葉のほぼすべての先進国で起きていたことであるが、二十一世紀も、現在発展途上国と言われている国々も含めて、進行していくであろう。

情報化社会へ急激に移行しつつある二十一世紀は、犯罪の増加をはじめ、自殺、離婚、精神障害など、豊かな社会を構築してきた代償としての社会的解体现象が、より加速する。家庭の崩壊による教育力の低下、コミュニケーションの崩壊による抑止力の低下、学校教育の荒廃、青少年の無気力、権威の崩壊、遵法精神の低下など、精神的荒廃現象と活力の喪失は、グローバルに進行していくであろう。二十世紀末の先進諸国で見られた社会の無秩序化が、経済の膨張とともにグローバル化する。それが、今世紀の無視できない特徴となろう。

このような社会的解体现象は、やがて文明そのものの解体を招くことにもなる。繁栄が社会の無秩序化と道徳的頽廃を招き、文明そのものを没落を内包している。トインビーの言うように、進取の気象と活力を失う時、社会は困難に挑戦する力を失い、衰退する。文明は、道徳的頽廃と魂の分裂、社会的崩壊と自己決定能力の喪失によつて解体していく。³³二十一世紀初頭に不安が漂つているとすれば、それは、この現代文明の解体の予兆なのかもしれない。

享楽的な生活

今日の人々は、この内部の不安と空虚を埋め合わせるかのように、物質的安樂と享楽的生活を限りなく追求しようとしている。すでに、二十世紀以来、先進国では、経済の発展とともに余暇が増大し、その余暇は、多くの場合、娯楽に費やされるようになった。二十一世紀は、産業の情報化やサービス化の進行とともに、労働時間はさらに短縮され、余暇は増大するであろう。そして、余った自由時間が、より享楽的な娯楽によって埋め合わせされてい

くであろう。人々は、物質的な豊かさと軽やかな幻想を消費しながら、快樂に満ちた生活を享受していく。しかも、この享樂や浪費を、コマーシャリズムそのものが奨励する。享樂や浪費に時間を費やす生き方は、単なる気晴らしにすぎない文化しか生み出さない。しかし、豊かな体制が自動的に生み出した大量の大衆は、欲望の巨大組織とでも言うべき大都市の中で、放縱な生き方をどこまでも追求していく。

こういう生き方は必ずしも幸福を約束するものではない。しかし、先進諸国ばかりでなく、途上国も、次々とこのような繁栄に酔いしれる豊かな社会を目指して参入してくるのが、二十一世紀という時代であろう。そして、二十世紀以上に、享樂や娛樂そのものが地球的に画一化する。

二十一世紀も、二十世紀同様、急増する人口は世界中の大都市へ流入し、より巨大な大衆社会を形成するであろう。そして、そこで、無定形な流民と化した大衆が、享樂的な生活に浮身をやつすことになる。彼らは、軽やかな流行に身をまかせ、機械化された体制の中を身軽に動き回る。地球全体の情報化は極限にまで進行するであろうから、流行も瞬く間に全世界に拡がる。その結果、人々は、画一化した様式の中で、似たり寄つたりの享樂的生活をすることになる。文化的伝統を失った不特定多数の故郷喪失者たちが、流動的な大衆社会を地球的規模に拡大して、底知れない享樂を求めていく時代、それが二十一世紀という時代ではないか。

シュベンクラーも、『西洋の没落』の中で、二十一世紀を、文明の終末期の第二段階に位置づけている。そこでは、土から離れた第四階級、つまり無形式な大衆が、大都市を舞台にして、スポーツ競技や神経刺激の芸術に埋没する。人々が奢侈に耽る時代、それが文明末期・第二段階の特徴だという。

このように、人々が快樂と放縱を貪り、享樂主義的な生き方を重ねる時、文明は徐々に衰退し、やがて解体していくことになる。繁栄の中に衰退の芽があり、豊かさ自身が蹠きになる。なるほど、消費なくして生産はない。生産されたものの享受なくして、経済も社会も成り立たない。だが、その消費と享樂があまりにも行き過ぎる時、それ自身が文明を食いつぶしていくことになる。文明を成り立たせていた当のものが、文明の衰退をもたらすのである。現代の爛熟した文明のもとでは、飽くなき欲望が粗野で露骨な文化を湯水のように生み出し、人々の魂を蝕みながら、利潤を貪っている。このような文明は、麻薬によって損なわれていく患者のように、精神的頹廃そのものによつて腐食し、没落していくことになる。

古代ローマの頹廃

古代ローマ時代にも、地中海世界各地から、ローマの豊かさを求めて、人口が流入し、ローマ市はますます巨大化していく。このローマ市に流入してくる人々は、農地を捨ててや

つてきた農民、戦争で連れてこられた奴隸、その他様々な故郷喪失者たちであった。ローマ市民の大部分は、全世界から故郷に見切りをつけて流れ込んだ群衆であった。この故郷喪失者たちからなる群衆が、ローマ市という巨大都市を舞台に、巨大な大衆社会を形成し、享楽的生活に明け暮れたのである。

国費によって提供された食糧や娯楽は、享楽的生活を求めるローマ大衆のための福祉政策であり、レジャー対策であった。無料穀物供給制度の受給者になった大多数のローマ市民は、余暇が増大。政治の人気取りのためでもあったが、時間をもてあました市民の退屈しひぎに提供されたのが、始終催された見世物や競技であった。紀元三五四年ごろには、公の休日は一年のうち二三百日、国費で催された見世物や競技の日数は一七五日に達していたと言われる。労働を忘れたローマ大衆は、ありある福祉にあぐらをかいて、浪費的な娯楽に時間を費やしたのである。円形や方形の巨大競技場、劇場、体育場、大浴場など、今日のローマ市に遺跡として残っている多くの公共施設は、レジャーーやイベントに明け暮れるローマ大衆のための福祉施設だったのである。この点では、ローマも、現代の先進諸国とそれほど変わりはない。

しばしば指摘されることだが、古代ローマ人の頗る頗るの生活ぶりも相当なものであった。例えば、食文化でも、今日の先進国同様、世界全域からあらゆる珍味が集められ、連日の宴会が催されていた。そして、食べるためには吐き、吐くために食べる飽食と美食にどっぷり漬かつた日々を、ローマ人たちは送っていたのである。

性道徳の頗るも度を過ぎており、現代以上の性の乱れであった。夫のある上流階級の女性の密通や売春が流行し、貴婦人たちは、浮気相手を見つけて、着飾つて競技場へいそいそと出掛けで行つたという。闘技場や図書館が付設された大浴場も、次第に男女混浴になつていった。紀元前一八年には姦通处罚法が、紀元一九年には上層身分の女性の売春防止法が作られたが、それほどの効力をもたなかつた。それどころか、法廷で淫売の自由をしやあしやあと宣言する良家の女性さえ出現した。離婚も急増し、日常茶飯事になつていつた。特に貴族の女性は夫の数で歳を数え、結婚するために離婚し、離婚するために結婚するような有様だつたという。

ローマ人の金と財産への欲望も、現代と肩を並べるほどで、低い身分で大金を貯めた成り金が出てきたり、遺産狙いで老婦人と結婚して財産を増やす者まで出てきた。選舉運動でも巨大な金が投ぜられ、金権政治が横行した。

古代ローマ人、特に帝政以後のローマ人は、閑暇をもてあましたあまり、全世界から集めた巨万の富を、奢侈と贅沢に浪費し、快樂と歡樂に酔いしれていたのである。その背後には、物質的繁榮ゆえの不安と倦怠が漂っていたのだが、それを埋め合わせるかのように、ローマ人は頗る的生活にのめり込んでいった。ローマ人にとって、快樂のみが人生の目的だった

かのようである。

このようにして、あらゆる貪欲と悪徳がはびこり、伝統的な社会規範は崩壊し、ローマ社会は頽廃していった。ローマ社会の道徳的頽廃は、宮廷から大衆まで、ローマ社会一般に蔓延し、極限に達しつつあつたのである。

心ある人たちの嘆き

このローマ社会の道徳的頽廃を見て、心ある人々は、当然のことながら、厭世的になつていつた。彼らは、古き良き時代の良俗と美德を称賛し、素朴な農民生活や節り気のない蛮族の生活への憧れを表明しながら、美德を忘却した当時のローマ社会への批判と嘆きと絶望を語つたのである。

例えば、ホラーティウスは、「古」のローマにあつた美德に対置して、当時のローマの公共精神の欠如、潰神、奢侈など、道徳的堕落を鋭く告発する。そして、放縱と貪欲こそローマの頽廃の原因であり、それはローマの滅亡をもたらすであろうということ、ローマを滅ぼすのは、外敵ではなく、ローマ人自身の罪と堕落であるということを強調する。

「ローマは自分の力によつて自ら滅びつつある。……呪われた血の世代の我らが不信心にも（ローマを）滅ぼすであろう。そして大地は再び野獸どもに占領されよう。」

という『エポーデイ』第十六歌で歌われている詩句は、ホラーティウスのローマに対する絶望と諦念を表明している。

ホラーティウスは、また、世代から世代への頽落という考え方から、ローマも、古き良き時代から世代を追うごとに堕落してきたために、現在と将来的頽廃に面していると考える。「父母の世代は祖父母に劣りてさらに邪悪なわれらを生み、そのわれらもやはては悪徳いやまさる子孫を生もうとしている。」

という『ローマ頽詩』第三巻第六頽詩の詩句は、このことを表現している。ホラーティウスは、このように、ローマ人の悪徳と頽廃を批判し、それに対比するように、古の農民生活の美德や当時の原始民族の質素な生活を称赞する。そして、神々と自然と動物と人間が一つに溶け合つた理想郷への憧憬を語つてやまなかつたのである。

ストア派の哲学者、セネカも、爛熟した文明の中で繁榮を食るローマ人の堕落と悪徳をつぶさにみて、その根源は貪欲と奢侈にあるとみている。そして、快樂に己自身を売り渡してそれに埋没することは人生の浪費であり、「その時は短くかつ急速に走り去る」と、セネカは諫めるのである。

風刺詩人、ユウェナーリスも、その辛辣な風刺詩の中で、悪徳が栄え不正がはびこる当時のローマ社会を鋭く告発している。そして、「後世がわれらの（ひどい）世相にこれ以上つけ加えるようなことはなにもないだろう。」

92

……あらゆる悪徳は落ちるところまで落ちるものだ」

と言つて怒りをぶつける。ユウェナーリスも、貧しく素朴な古のローマ人の生活を理想にして、当時のローマ人の奢侈と浪費と貪欲を糾弾したのである。

歴史家、タキトゥスも、ローマの道徳的頼廃こそ時代の危機の原因と考え、かつて存在した質実剛健な道徳は、むしろ、ローマ帝国の周辺にやつて来ているゲルマン諸族の中に生きているとみている。そして、岳父アグリコラの伝記の中では、アグリコラが懷柔しようとしたカレドニア人の指導者、カルガクスに、ローマの略奪者の批判をさせ、自由と独立を堅持しようとする気概を語らせている。²⁹ タキトゥスの見方によれば、ローマによるゲルマン諸族の支配は、かえつてその勇気と独立と自由の精神を失わせ、ローマ的悪徳に誘い、奴隸化することにほかならなかつた。

実際、ローマ帝国は、地中海全域に版図を広げ、諸民族を服属させて、ローマ文化の普及を図つた。ローマ属州の各都市に、首都ローマと同じような競技場や劇場や浴場が建てられたのは、その現われであった。しかし、それは、同時に、ローマ的な悪徳、奢侈、堕落の輸出でもあつたのである。この点でも、ローマは現代とそれほど変わらない。

古代ローマ文明はなぜ滅亡したのかという問題は昔から問われ、いろいろな考えが提出されてきた。だが、当の古代ローマ文明がまだ生きていた時代から指摘されていたように、古代ローマ文明は美德の喪失によって滅亡したという説は、それなりに説得力をもつて受け入れられてきた。事実、帝国の成立によつてもたらされた繁栄が悪徳を生み出し、ローマは老衰し衰弱していく以外にないと、帝政ローマ時代から、心ある人々はみていたのである。共和政時代にはあつた質実な氣風や強力な市民精神が、帝国の成立とともに次第に失われ、ローマ社会は節度と規律を見失つて没落していったという考えは、マキアヴェリやモンテスキューも採用している考え方である。帝国の繁栄そのものが快楽主義と放縱を生み出し、それが社会の秩序を失わせ、ローマ文明を衰退に導いたという思想は、様々なローマ帝国衰亡論の基調を形作つてゐる。

なるほど、道徳的頼廃が文明の衰退をもたらすという道徳主義的な判断は、単純で短絡的にすぎるとも言える。しかし、繁栄そのものが精神的墮落を招き、それが社会の衰弱につながることを考えるなら、簡単に否定してしまえる考へでもない。文明の衰退は、豊かさの代償として、その内部から引き起こされてくるものである。古代ローマ文明も、繁栄の頂点に達した時、没落が始まつていた。文明は、自己自身の中に住む野蛮人によつて滅ぼされいくものかもしれない。

二十世紀末から二十一世紀初めにかけて急激に進行してきた現象ではあるが、今世紀が超高度な情報化社会になり、これが完成することは確実である。高度情報化社会とは、情報そのものが価値を生み出し、情報を中心にして発展する社会である。なるほど、二十世紀も情報化は進行していた。だが、あえて、二十世紀と二十一世紀の情報化の構造の区別をするなら、今世紀は、マス・コミュニケーションからネット・コミュニケーションへの移行として特徴づけることができる。

二十世紀は、ラジオやテレビなど、一対多のマス・コミュニケーションの時代であり、これが社会構造を規定した。それに対して、二十一世紀は、インターネットに代表されるように、多対多のコミュニケーションが発達する。インターネットを使えば、誰もがいつでも自由に、世界中の人たちと地球的規模でコミュニケーションでき、これが地球の一体化をもたらす。他方、二十世紀來の一対多のマス・メディアの方も、今世紀は、多様なジャンルに分かれた数百チャネルからなるデジタル衛星放送によって、国境を越えて、しかも各層に向けて、情報提供がなされるようになる。これら多対多や一対多のコミュニケーション・メディアや他のメディアが複合したマルチメディアによって、在宅勤務やテレビ会議、電子メールによるホーム・ショッピングやホーム・バンキングなどが日常化するのが、今世紀の高度情報化社会である。情報革命は、十九世紀以来、二十世紀、二十一世紀と進展してきた文明の最終形態だと言えよう。

しかし、高度情報化社会は情報過多社会でもあって、必ずしも、言われるほど明るい未来を約束するものではない。高度情報化社会は、膨大な量の情報が、時間・空間の制限を越えて、超高速度で飛び交う社会であり、情報で溢れ返った社会である。われわれは、インターネット、デジタルテレビ、ファックス、ラジオ、新聞、電話、雑誌、書籍、果ては郵便物やチラシに至るまで、各種メディアからシャワーのように浴びせられる過剰な情報に取り巻かれて、そこから逃れることができない。われわれは、消化できないほど膨大な量の情報に圧倒され、これをじっくり吟味もできないうちに、情報の巨大な渦流に呑み込まれ、流れしていくことになる。情報によって地球全体がネットワーク化し、一体化する社会は、地球全体が情報の海になり、情報によって劇場化する加熱社会でもある。

このような高度情報化社会では、過剰な情報によって、社会の複雑性と不確実性はかえつて増大するであろう。すでに、過剰に生産される大量の情報を振り回されているわれわれ自身を振り返る時、この世界は情報爆発によつて滅ぶのではないかとさえ思われるほどである。実際、この情報過多社会は、多くの不適応症状を生んでいる。情報中毒症もその一つである。これは、次々と押し寄せてくる情報に乗り遅れまいとする強迫観念に囚われ、より多くの情報を無批判に追い求めようとする一種の神経症状である。

一般に、個人の意志にかかりなく情報が大量に生産される社会では、情報量が増えれば増えるほど、情報は不明確になつていいき、本当に必要とする情報をかえつて得ることができないという矛盾にぶつかることになる。また、一人の人間の情報を受け取る能力には限界がある上に、すべての情報が必要なわけでもないから、情報が過剰に生産される社会は、個人にとっては、ほとんど不要な情報が氾濫する社会だということにもなる。情報過多社会の中で、人々人は、消化しきれない情報を次々と忘れ、捨てていく。情報過多社会は情報の使い捨て社会でもあり、ほとんどの情報が消費物質化し、あぶくのよう消えていく。高度情報化社会では、実際には情報のインフレが起き、その分、情報の価値は低落していくのである。

散乱する精神

情報過多社会は、過剰な情報が飛び交う社会であつて、そこでは、人間の精神は散乱する。現代人の精神の中には、散乱した過剰な情報が連関なしに押し寄せ混在する。現代人は、自己の中の連続性を断ち切つて、押し寄せてくるおびただしい数の無連関な情報に反応しなければならない。そのため、現代人の精神は断片化し、統一性を失う。現代人の内の精神の中では、矛盾した情報でも等価値なものとして併存し、情報と情報の意味の間に連続的な結合が希薄になる。このような分裂型人間は、すでに、ラジオやテレビが発達した二十世紀から登場してきていた。二十一世紀は、この人格の分裂がさらに進んでいく。

膨大な量の情報が押し寄せてくる情報過多社会では、われわれは、爆発的に増大する情報量に振り回され、かえつて、自己の何であるかということを見失つてしまう。自己は、単に情報の洪水の中で押し流される破片にすぎないようと思われ、自己の取るに足りなさ、自己の無力を思い知らされる。こうして、われわれは、空虚な自己を抱えて、何の基盤も見出せないまま、情報の海の中を浮遊する。現代の不安の源泉は、一つには、情報過多社会での自己の曖昧化にある。地球全体の莫大な量の情報がデジタル衛星テレビやインターネットを通して毎日押し寄せてくる二十一世紀は、このような不安がますます増大するであろう。

情報過多社会では、断片的な情報が次から次へと押し寄せてくるから、持続ある時間が失われる。二十一世紀のわれわれの日常生活を考えても、携帯電話やEメールやファックスに入つてくるメッセージに次々と対応し、数百チャンネルもあるデジタル衛星テレビから流される情報に反応していかねばならない生活は、持続が瞬間毎に阻止されているような生活である。それは、外的には充満した生活ではあっても、内面的な充実感は失われた生活である。そこでは、自己の中に一貫した持続性がなくなり、過去と現在と未来の連続性さえ希薄になつていく。その意味でも、情報過多社会の人間は分裂病的である。空間的面を考えても、情報過多社会では、例えば、家庭の中へもどんどんと世界中の情報が入つてくるから、私的

空間と公的空間の区別がなくなる。親しく安らぎのある場所というものが失われるのである。大量の情報を瞬時にやりとりできる世界では、時間と空間が無化され、われわれは沈黙や寂の時空を失ってしまう。

情報過多社会では、判断力や思考力も低下する。ネット・コミュニケーションやマス・コミュニケーションなど、各種メディアから湯水のように提供される情報は、あまりにも過剰で大量であるから、われわれは、これを十分批判吟味しないうちに、これを鵜呑みにしてしまうことが多い。その結果、われわれは、集中してものを考えるということができなくなり、思考力や判断力を衰弱させ、主体的に判断するということが少なくなる。

ここには、身体を通した直接経験から獲得する知識はほとんどない。その代わり、様々なメディアを通した間接経験から得た知識が主体になる。そのため、その知識には血肉が伴わない。確かに、高度情報化社会は、情報や知識そのものが価値を生み出す社会ではある。しかし、それは知恵を生み出しはしないであろう。知恵とは、自らの身体を通して自然や物とかかわること、つまり体験から獲得されるものである。だが、単なる断片化した情報の集積にすぎない高度情報化社会の知識は、そのような生きる上での賢明な知恵にはなりえない。現代人のもつ情報量は、百年前の人たちと比べた場合、格段の差があることは確かである。しかし、判断力はむしろ劣ると言わねばならない。

このように、判断力や批判力や思考力が衰えたところには、巧妙な情報操作の罠が入り込み、人々はこれに支配されやすくなる。インターネットで流布する広告のことを考え合わせるなら、われわれは、知らず知らずのうちに、意外と、家庭の個室の中で、マインド・コントロールされていることになるのかもしれない。判断力や批判能力が減退したところでは、倫理的な判断も弛緩し、善悪の区別も希薄になり、適切なことと適切でないことを見分ける能力も弱くなるであろう。

溢れるばかりの情報が大量に生産され大量に消費される世界では、われわれは、次々と押し寄せてくる情報を瞬間に受け取りながら、その都度その都度を利那的に生きることになる。刺激的な映像や音楽、目まぐるしく変化する流行やファンション、次々に報道される異常な出来事など、新奇なもの・感覚的なものに身をしづれさせながら、利那的感覺の中を生きる。ここでは、時間もまた利那的なものになる。利那的な時間感覚のもとでは、何一つ持続するものがなく、情報の氾濫の中でわれわれが忘れっぽくなり、飽きっぽくなるのは、そのことによる。情報の氾濫する爛熟した文明の中を漂流する空洞化した自己、それが現代人の自己ではないか。

情報が氾濫する社会では、情報は消費物質化するから、その情報が運ぶ言葉の意味は希薄化し、価値も低落する。言葉は、それが置かれる状況や文脈や関係によつて意味を形成するものである。しかし、情報過多時代の情報は、この関係や文脈を無視して大量に流されるか

ら、言葉の意味が希薄になつていく。言葉の脈絡が失われるからである。

言葉の表現や理解は、経験や体験を無視してはありえない。ところが、氾濫する情報には、言葉のもつ体験や経験の重みがない。言葉の意味の希薄化は、そこからも起る。情報量の増大に比例して、言葉の意味は空虚化していく。情報の氾濫する世界では、言葉と言葉を連関づける経験が希薄になり、言葉によって表現される世界が空疎なものになる。このような世界では、マス・コミュニケーションにても、ネット・コミュニケーションにても、言葉は単なる饒舌になつてしまふ。大量の断片化した言葉が瞬時に現われたかと思うと消えていく。しかも、幼稚化した断片語や簡略語が大量に飛び交う。

創造力の喪失

膨大な量の情報が集積される情報過多社会では、その全体像は把握することができなくなり、知識の体系化が不可能になる。そのため、知識量の増大に比例して、世界の全体像が見失われる。個々人の魂の中でも、情報量の増大とともに、世界像は散乱し、統一ある秩序が見失われる。ここでは、自己は、もはや中心をもつたものとしてはどちられなくなる。自己同一性そのものが揺らぎ、信念も掘り崩され、われわれは、空虚な自己を抱えて不安な生き方をする事になる。現代の不安は、そのような精神的支柱の喪失、自我の脱中心化といふところにある。

情報過多社会では、思想的・学問的創造力も失われるであろう。たとえ創造的なものが生み出されたとしても、膨大な情報が飛び交う社会では、黙殺されていく。その代わり、情報過多社会ではびこるのは、狭い専門領域に閉じこもつて満足しきつている専門主義者である。蓄積される情報量は莫大なものになるため、統一ある全像は誰も見通すことができない。そのため、学問領域はとめどなく細分化し、専門化していく。この学問の細分化が、さらに知識量の膨大化をもたらし、諸科学の体系化を不可能にしていくのである。

芸術においても、創造的なものは、もはや生み出すことが困難になるであろう。膨大な情報が飛びかう世界では、芸術家が表現すべき精神的世界が散乱してしまつてゐるからである。実際、二十世紀の芸術でも、過去の様式は次から次へと破壊され脱ぎ捨てられていつたが、永続するものは必ずしも生み出しえなかつた。ポスト・モダニズムも、この過去からの離脱の延長上に出てきたものである。これも、あれこれの様式の混在にすぎず、中心を失い、世界像も失っている。二十一世紀の芸術も、二十世紀同様、離脱から離脱へ、様式の破壊を繰り返しながら、散乱した世界を表現するにとどまるであろう。

情報量が膨大化し、極限に達する時、文明は、精神的活力を失つて衰退していく。シュベングラーも、文明終末期には、偉大な文化的創造の精神は消え去り、芸術は大衆化し、哲学者は専門職人化し、創造力は失われるとみている。偉大な様式の時代は過ぎ去り、残されて

いるのは、ただ規模の小さい小手先の仕事だけである。そして、魂がこれ以上創造力を發揮することができないような時点に達した時、それが高度文化体の死であり、没落だとみてい。トインビーも、この考え方を引き継ぎ、精神的に分裂し萎縮する時、創造力は失われ、文明は解体すると考えた。³¹ 科学技術は進展し、莫大な情報量が堆積されるが、人間精神は、それに比例しては進歩しないのである。

古代ローマの情報公書

帝政ローマ時代には、今日のような衛星テレビやインターネットがあつたわけではない。しかし、写本による文字情報の流布つまり出版業は相当発達しており、多くの出版業者が隆盛を極めていた。これらの出版業者は、有名無名の作家や弁論家の作品、演説、論文の写本を、写字奴隸を使って大量に作り、高値で売りさばき、莫大な利益を得た。図書館はこれを購入した。ローマにも、エジプトのアレクサンドリアにならって大図書館ができ、属州各都市にも、図書館は急速に普及していく。

さらに、これに加えて流行したのが、朗読会の開催という発表方法であつた。朗読会で名声を得ることは出世にもつながったため、誰もが争つてこれを催した。そのために、人は、朗読会を聞きに行かねばならないことがあまりにも多くなり、次第にこれを嫌がるようになつたほどである。そればかりでなく、あまりにも頻繁に行なわれる朗読会は、朗読の内容の価値を低落させ、ローマの文運はかえつて衰退していく。文明末期の特徴としての情報公害が起きていたのである。

シュベングラーによれば、ギリシア・ローマ文明での修辞学は、現代で言うジャーナリズムの役割を果たしていたとい。修辞学心得た古代の弁論家は、今日で言えば、テレビなどで気のきいたことを要領よくしゃべつてまわる饒舌な評論家に当たる。シュベングラーのみるとこでは、このような修辞学が流行する時代は、内的魂は貧困で、文明も末期に近いということになる。

人文系の学問でも、帝政ローマ時代には、ヘレニズム時代の延長で、古典文献の蒐集と整理、そして細かい訓詁注釈が行なわれただけで、どれほどの創造的なものも生み出さなかつた。セネカもこのことに触れている。ギリシア人は、『イーリアス』と『オデュッセイア』とはどちらが先に書かれたかとか、二作品は同一人の作者の手になるものかとか、説索する病弊にかかつていたが、このような無益な研究がローマ人の間にも侵入してきたと嘆いているのである。ローマ時代にも、学問は専門化して、その創造力を失いつつだったのである。情報量の膨大化と過剰、そして学問の専門分化は、確かに、文明衰退の兆候なのかもしれない。

ヴァーチャル・リアリティ

二十世紀後半以来のコンピュータの長足の進歩によって、現在では、コンピュータの中に映像や音楽も取り込めるようになり、さらに、それをインターネットを通して地球規模で配信できるようになった。その結果、今では、コンピュータによって、現実から遊離した空間を作ったり、仮想のコミュニティを作ることができる。

例えば、ヴァーチャル・リアリティ技術では、発達したコンピュータ技術を駆使して、静止画像や動画、音声や文字などをすべてデジタル信号に変換して、仮想空間を作り、それを主に視覚や聴覚を通して体験することができる。そこでは、目前に仮想世界がまさまさと再現され、しかも、対話や相互交信ができる。この技術は、ロボットの遠隔操作やフライト・シミュレーターによるパイロットの訓練に始まって、医療技術、スポーツ訓練、体感ゲームマシン、建築設計などに応用されている。この技術の応用範囲は、ヴァーチャル市場、ヴァーチャル商店、ヴァーチャル海外旅行、ヴァーチャル動物園、ヴァーチャル美術館、ヴァーチャル博物館、ヴァーチャル図書館、ヴァーチャル大学など、経済分野から娯楽・教育分野まで、多岐にわたる。

ヴァーチャル市場やヴァーチャル大学などもその一つだが、このヴァーチャル技術は、インターネットを通して、仮想のコミュニティを作ることができる。このヴァーチャル・コミュニケーションに参加すれば、人は、時間・空間の制限から解放されて、多くの人々と相互交流できる。ヴァーチャル・コミュニケーションには匿名で参加できるから、誰もが、年齢、性、職業、地位、国籍、民族の差異を越えて、この仮想社会に遊ぶことができる。この仮想社会は、ヴァーチャルな人格同士が、ヴァーチャルな世界でコミュニケーションしながら形成していく超現実的な社会である。今世紀は、インターネット上に、時間や空間の制約を越えた地球大的な仮想社会が作られる。

ヴァーチャル・リアリティは、現実の時間・空間を越えた非現実的な仮想世界へ人を誘う。ヴァーチャル・リアリティの作り出す仮想世界は、われわれが夢を見ている時の世界のように、幻想と虚構の世界である。だから、この世界では、現実の時間・空間に制限された有限な自己は遠退き、すべての制約を越えた仮想の自分が浮遊していく。仮想世界を漂流しているヴァーチャルな人格は、現実の人格とは異なる別の自己である。ヴァーチャル・リアリティの世界には、強烈な埋没感があるために、仮想世界を浮遊する別の自分がむしろ実在の自己ではないかとさえ思われる。ヴァーチャル・リアリティは、一方通行的なテレビと違つて、対話性や相互作用度が極めて高いために、のめり込み度が強く、仮想と現実の区別がつかなくなるのである。

人間は、本来、幻想的動物であつて、それが、宗教、文学、演劇などを生み出してきた。

二十世紀の映画やラジオやテレビも、その延長上に出来たものである。だから、これらが作り出した世界でも、虚構と現実の区別ができなくなるようなことは、しばしばあつた。しかし、ヴァーチャル・リアリティは、これが極端化する。

それどころか、ヴァーチャル・リアリティの世界では、仮想が現実化するだけでなく、現実が仮想化する。ヴァーチャル・リアリティの世界から現実の世界へ帰つてみると、現実の世界そのものが仮想世界ではないかと思われてくる。そのため、現実の日常世界そのものがあやふやになり、現実そのものが浮遊し出す。考えてみれば、宗教にしても、国家にしても、現実世界そのものが、仮想や虚構によつて成り立つてゐるものだつたのである。

こうして、仮想世界が仮想世界の範囲を越えて拡大していくと、やがて、仮想世界そのものが現実を規定していくことになる。仮想世界に合わせて現実社会の意味が解釈され、仮想世界が現実世界を指導しはじめるのである。二十一世紀には、このようなコンピュータ上で作られた仮想世界が拡大し、それが逆に現実の世界を変えていくことになるであろう。

インターネット上に作り出されるヴァーチャル・コミュニケーションでは、遠く離れた所にいる人たちとも始終対話をすることができるから、もはや物理的に拘束された現実の空間は重要性をもたない。それどころか、ヴァーチャル・コミュニケーションの中で対話できる遠方の他者の方が実在感があり、同じ家に住む家族や近くの隣人の方が疎遠な存在にさえなる。親密性が、もはや距離では計れなくなるのである。自分がいる場所はそれほどの実在性をもたず、われわれの自己を支えるものではなくなる。ヴァーチャル・リアリティの世界では、空間とか場所というものが超越されてしまうのである。時間的に言つても、ヴァーチャル・コミュニケーションでは、地球の裏側の人とも瞬時に会話ができるから、交流に時間を必要としない。また、自己を拘束する現実の煩わしい時間を飛び越えて、仮想の世界に埋没することもできる。時間も無化され、超越されるのである。時間と空間の征服は、二十世紀以来続けられてきた人類の飽くなき野望であつたが、二十一世紀のヴァーチャル・リアリティの世界は、時間と空間を超越しようとしている。

身体性の欠如

しかし、このことは、逆に言えば、身体性の欠如という欠陥をもつてゐると言わねばならない。ヴァーチャル・リアリティの世界では、身体性の限界を越えて、仮想のサイバースペースを浮遊していくことができる。だが、この身体性の欠如は、種々の困難な状況や異常な症状を引き起こすであろう。

ヴァーチャル・リアリティは、映画やテレビやゲームなどと同様、人間の生体機能のうち、特に知覚神経を電子的に増幅するものであり、なかでも視覚と聽覚を極端に刺激する。

実際、ヴァーチャル・リアリティは、視覚と聽覚を統合し、文字、数字、静止画、動画、音声などを統合するとともに、これに対話機能やネットワーク性をもたせている。ヴァーチャル・リアリティ技術では、全体的・総合的な身体性は捨象され、その極く一部が奇怪な膨張をしていることになる。

また、ヴァーチャル・コミュニケーションの世界では、現実の身体の限界を越えて、仮想の自己を演ずることができる。この点でも、サイバースペース上の自己は身体性を欠如したものである。仮想世界では、現実の自己とは全く違ったキャラクターを演ずることができるから、われわれは、別の人格に変身して、変身感覚を楽しんだり、変身願望を満たすことができる。サイバースペース上では、自己の現実の身体を越えて、どんなものにでも変われるのである。それどころか、仮想の自己の方が現の自己ではないかと錯覚することにさえなる。

そればかりか、ここでは、われわれは、役者のように、何人もの仮想の人格を演ずることができ。自己は、複数のアイデンティティをもつた人格に分裂することができる。人格は分裂し、多重化する。なるほど、われわれの現実の人格も、様々な人間関係によって様々な役割を演ずる多面性をもっているが、現実の身体とその自覚によって、それらは人格的に統一されている。ところが、サイバースペース上の仮想人格は、身体的統一をもたず、いくつもの分身に分かれ浮遊していく。それぞれに違う想像上の疑似人格同士が仮想空間上でコミュニケーションすることによって作られていく社会が、ヴァーチャル・コミュニケーションである。それは、身体から遊離した幽霊の世界である。

さらに、ヴァーチャル・コミュニケーションの中で行なわれているコミュニケーションは、直接対面によるコミュニケーションではないから、混乱や誤解が生じることが多い。身体を通したフェイス・ツー・フェイスのコミュニケーションでは、言葉ばかりでなく、顔の表情、身振り、手振り、その他を通して、コミュニケーションが行なわれている。そこでは、身体を通して、雰囲気というものが醸し出されるから、それによって、コミュニケーション内容を修正することもできるし、肌を感じる一体感を体験することもできる。それに対して、サイバースペース上でのコミュニケーションでは、コミュニケーションの身体的因素が伝わらず、コミュニケーション内容の不確実性が高くなる。もちろん、このような身体性を通さないコミュニケーション手段には、手紙や電報、無線通信や電話、テレックスやファックスなどもあり、ここでも、同じような誤解や摩擦は起きてきた。しかし、ヴァーチャル・コミュニケーションの中では、仮想の自己が自由に演じられもするのだから、ここでのコミュニケーションは、他の手段以上に怖いことだとも言える。

また、ヴァーチャル・コミュニケーションの世界では、親密性の意味も逆転する。ヴァーチャル・リアリティには強力な埋没感があるために、脱身体化した仮想の親密性の方が、身体的親密性よりも親密だという倒錯が起きる。これが行き過ぎると、社会的不適応症状にまで発展す

るであろう。サイバースペース上でのコミュニケーションには夢中になるが、身近なフェイス・ツー・フェイスのコミュニケーションは困難になり、人間関係をうまくもてなくなるのである。

この仮想空間親和性Ⅱ対人困難症とでもいうべき症状は、社会性や倫理性の欠如さえもたらすであろう。ヴァーチャル・コミュニケーションにあまりにものめり込むと、現実社会で、人の連帯感をもつことができず、それが反社会的行動を誘発する恐れがある。それどころか、すでに、ヴァーチャル犯罪と思われる不可解な問題行動は頻発しているのである。一人の人間の人格は、身体を通した人間関係を基礎として形成されるのだが、ヴァーチャル・コミュニケーションでは、これが崩壊してしまうのである。ここでは、自我は断片化し分裂する。もっとも、このことは、すでに、テレビなど、マス・メディアによって作られた二十世紀の情報過多社会で起きていたことではある。だが、対話性のあるヴァーチャル・リアリティ技術は、これをさらに加速することになる。

ヴァーチャル・リアリティやヴァーチャル・コミュニケーションの世界では、われわれは、コンピュータによって作られた仮構の世界を軽やかに遊泳していくことができる。しかし、ここで経験は、すべて間接経験であって、直接経験ではない。ここには、視覚や聴覚、場合によつては平衡感覚などを使っての間接的経験はあるのだが、触覚や嗅覚や味覚など全感覚を通して、身体全体で経験するということはない。だから、直接経験によって検証するということではなく、体験を通して自分を見つめるということもない。このような偏った体験では、諸情報の統一像も歪んでくるであろう。諸情報の全体的統一像は、全体的体験を通して作られる。しかし、ヴァーチャル・リアリティの世界ではこれが歪んでしまうから、思考力や判断力にも歪みが生じる。

このようなヴァーチャル・リアリティの作る仮想世界に埋没していると、人との直接のコミュニケーションや自然との直接の触れ合いが苦手な青少年が出来てしまう。家庭の個室に閉じ籠もり、コンピュータ上の仮想世界に逃避している青少年は、煩わしい現実はできるだけ避け、心地よい虚構の世界にいつまでも閉じ籠もつていようとする。

コンピュータ上の仮想世界では、物や人からの直接の抵抗はない。物や人からの直接の抵抗を全身体を通して実感することのないところでは、抵抗に耐えるということもない。嫌になつたら、スイッチを切ればよいだけである。耐性を欠如した青少年が登場してきているのは、このことによる。

メディアとは、体験の記号化によって人と人との媒介する中間者を意味する。現代は、人間自身が作ったメディアによって、人間自身が復讐されている時代である。ヴァーチャル・リアリティでも、メディアによる人間の解体が起きる。二十一世紀も、二十世紀同様、メディアの復讐の時代となるであろう。

実在感の喪失

ヴァーチャル・リアリティの世界では、人は、現実から逃避して、仮想世界を浮遊する。そして、やがて、仮想世界の中に閉じ籠もり、そこから出でこようとはしなくなる。たとえ出てきても、麻薬患者のように、現実と非現実の区別ができなくなり、現実に対する対応が難しくなる。場合によつては、目前の他者のリアリティを把握できず、現実社会における役割取得ができなくなることさえある。

仮想現実の世界では、仮想が現実化すると同時に、現実が仮想化するのである。このように現実と仮想が倒錯するところでは、仮想が現実以上に現実的になると同時に、現実が仮想以上に仮想的なものとなる。虚構が実在以上に実在化すると、実在の方が虚構以上に虚構化し、現実感や実在感が失われる所以である。そのため、日常の現実世界が、仮構世界のように、抵抗力のない映像のように見えてきて、その生き生きとしたリアリティを実感することができなくなる。現実世界の他者の実像さえ、虚像に見えてくる。現実の生と死も、リセットしてもう一度やり直すことのできる仮想世界と区別ができなくなる。生と死についての実在感も失われるのである。

ゲーム・ソフトに夢中になつていた少年や、サイバースペースで異常な言論をエスカレートしていた青年が、現実世界に出てきて、犯罪を犯すことがある。しかも、この時、たとえ人を殺しても、涙を流すこともなく、悲しみに打ちひしがれることもなく、罪の意識ももたないことがある。ヴァーチャル・リアリティの世界に埋没し、現実感や実在感を喪失すると、思慮分別も失われ、道徳感情も失われるのである。

このようなことは、コンピュータを介したヴァーチャル・リアリティの世界ばかりでなく、すでにテレビの映像世界で起きていたことであつた。テレビの映像世界でも、テレビに映る映像の方を実在的なものと思い込み、逆に、現実の実在を映像的なものと思い込む倒錯がしばしばあつた。映像の世界に埋没していると、映像の方が実在化し、逆に、実在の方が映像化する。そのため、現実感や実在感に歪みが生じる。現実が、直接侵害してこない映像のように、実在性のないものとしてとらえられるなら、現実そのものに対する道徳感情ももちはなくななるであろう。一方通行のコミュニケーション・メディアであるテレビでさえ、現実感や実在感を奪つたのだから、双方向のインターラクティブなメディアであるヴァーチャル・リアリティの実在感喪失の衝撃は、空恐ろしいものがある。

コンピュータ・ネットワーク上に作られるヴァーチャル・コミュニケーションは、現実の社会から離脱してしまつてゐるから、現実の社会規範が通用しにくい。特に、このコミュニケーションでは、匿名で仮想の自己を演ずることができるから、情報ネットワークを利用した反社会的言動がしやすくなる。しかも、ヴァーチャル・コミュニケーションの範囲は国境を越えているために、国

民国家の法規制を無視して動いていく。そのため、このコミュニティで行なわれる情報犯罪は、広域化するとともに、巧妙化していく。

ここでは、個人への無責任な集中攻撃、悪意に満ちた中傷、流言飛語も自由であり、個人情報の複製、改竄、流出など、プライバシーの侵害なども横行する。さらに、薬物・麻薬・武器・ボルノ・テロ教本の密売、国家や企業の機密情報の暴露、投機の操作、売春なども容易である。また、全世界のコンピュータ・システムを破壊するハッカー行為、国家中枢のコンピュータ・システムを破壊するサイバー・テロなども可能である。サイバースペースは、ホップズの言う自然状態の社会に近い。二十一世紀のヴァーチャル・コミュニティは、無法者がはびこり、不正や欺瞞が横行する社会にならないとは限らない。

マインド・コントロール

さらに、恐ろしいことは、サイバースペース上で異常なカルト教団がはびこり、その教義を信じた青少年が、現実社会で残酷な犯罪を犯す可能性があることである。事実、このような反社会的行動はすでに起きている。サイバースペースは現実性を超えてしまっているために、仮想世界が、現実による検証なしに、異常に膨張する。それをそのまま現実に及ぼせば、異常な犯罪を犯すことになるのである。情報化社会は異常な野蛮人を作ってしまうことにもなる。

ヴァーチャル・リアリティを使えば、ラジオやテレビ、映画やビデオ以上に、大衆の心理操作（マインド・コントロール）が容易である。これは、コマーシャルや政治宣伝や宗教布教には好都合である。ヴァーチャル・リアリティは、マインド・コントロールには恰好の手段である。臨場感も格段に向かう。現に、現代人の不安や苦悩を救うと称する様々な宗教が、マインド・コントロール機能を利用して、ヴァーチャル・コミュニティ上に登場している。二十一世紀は、サイバースペース上に多くの教祖や教団が登場し、巨大な組織を作り、強大な力をもつことになるかもしれない。ヴァーチャル・リアリティが神なき時代の疑似宗教を作り出し、コンピュータのディスプレイが新しい神殿になる。しかも、サイバースペース上の宗教が、現実社会をリードすることさえありうる。仮想上のものごとが現実の社会を変化させていくということはいつの時代でもあったことだが、二十一世紀は、このような社会の変化に、ヴァーチャル・リアリティが大きな役割を果たすであろう。

二十世紀は、ラジオやテレビなどマス・メディアが、ヒトラー、スターリン、毛沢東などのカリスマを生んだ。二十一世紀は、このようなカリスマを、コンピュータが生み出すであろう。ヴァーチャル・コミュニティ上に、大衆の不満や願望を一手に引き受けるカリスマが登場し、多くの大衆が、コンピュータのデスプレイを通して、これに拝跪することになるとすれば、それは悪夢以外の何ものでもない。

そのようなカリスマでなくとも、二十世紀は、映画やラジオやテレビが、映画スターや人気歌手やスポーツ・ヒーローなど、大衆の偶像を生み出した。そして、われわれは、実際に見つことも会つたこともないこれらの偶像を、実在以上に実在的なものと信じて崇めた。

二十一世紀は、このような大衆の偶像をサイバースペースが生み出し、大衆はこのサイバースペース上の魔神を崇めることであろう。

二十一世紀も、次々と幻影を作り出し、その幻影を消費して生きる時代になる。人々は、夢を見ていていつまでも覚めない人のように、現実から遊離した仮想世界に逃避し、仮想世界の幻影を実在と思い込んで、その幻影の中を漂流していく。二十一世紀は、高度情報化社会が完成し、情報そのものが経済的価値を生み出す社会になる。だが、それは、絶えず幻影を作り出し、それを消費していく社会でもある。地球全体が劇場化する時代、それが二十一世紀という時代ではないか。

帝政ローマのヴァーチャル・リアリティ

帝政ローマ時代には、ヴァーチャル・リアリティもサイバースペースもありはしなかつた。しかし、ありあまる余暇を幻影の消費に費やしていた時代であったことに変わりはない。劇場や競技場で催されるショー、剣闘競技、戦車競技は、いわば古代ローマのヴァーチャル・リアリティであった。

劇場では、道化芝居やバントマイムなど、バラエティショーに近いものが演じられ、大衆に喜ばれた。その中からはスターも登場し、人気男優の中には、皇帝のお妃と浮名を流したスターもいたほどである。また、人気役者をめぐるファン同士の争いも絶えず、流血事件もしばしば起きた。余暇をもてあましたローマ人たちは、このような劇場で作り出される官能的な仮想世界に酔いしれ、それに埋没していたのである。

九万人近くを収容できたコロシアムで演じられた剣闘競技も、人気があった。ここでは、獸と獸、人間と獸、人間と人間の闘いが演じられて、多くの競技者が死んでいった。一つの催しで動員された剣闘士は、最大一万人にも達したという。闘わされた剣闘士は、主に死刑を言い渡された囚人で賄われた。しかし、自ら志願して剣闘士学校に通い、剣闘士になつた者もいた。この競技で勝ち続ければ、大衆のヒーローになり、社交界では、貴婦人たちからもてはやされ、大スターになれたからである。

約二十五万人収容できた競技場で催された戦車競技も、人気のある豪華ショーであつた。さらに、この競技場に水を入れ、人工湖をこしらえて、模擬海戦が行なわれたこともある。二万人の死刑囚が動員され、多くの死者が出た。ローマ市民は、この大スペクタクルを熱狂して楽しんだ。これらの競技から大スターが登場したのも、現代と変わらない。

帝政ローマの大衆も、ローマ全体がデイズニーランド化する中、仮想現実が作り出すまばゆい

ばかりの幻影を消費しながら、共同幻想の中を浮遊しながら暮らしていたのである。冬の訪れの前的小春日和のように、滅びの日はまだ訪れては来ていない東の間の享楽の日々だったのである。

4 文明の落とし子たち

体制への甘え

今世紀は、人間の脳の解明が進み、高度な認識や判断、学習や経験ができる、状況に合わせて適切な行動がとれる人工知能が実用化されるであろう。この人工知能を搭載したロボットは社会の隅々にまで普及し、われわれの社会生活をより便利にするであろう。家庭でも、知能ロボットは、多くの家事を分担し、家事労働を軽減してくれる。われわれは命令するだけで、あとはロボットからのサービスを受けているだけで済むようになるかもしれない。ロボットの発達とともに、工場での単純労働も消滅し、労働時間はますます短くなり、自由な余暇時間が増大する。その余暇を娯楽や消費にあてて心地よい生活をしようというのが、二十一世紀の生活の夢である。二十一世紀の高度文明社会が、情報やサービスなど、ソフトウェア産業中心の脱工業化社会になるという考え方の根拠はここにある。

二十一世紀の世界も、二十世紀同様、高度な科学技術によって支えられた世界になるであろう。今世紀の科学技術も、前世紀以上に、便利で豊かな生活を保証し、高度に機械化された社会を形成するであろう。そして、われわれは、この科学技術に絶大な信頼を寄せ、高度に機械化された世界を住みかとして生きていくことになる。

しかし、このような機械仕掛けの体制のもとでは、人間はむしろ退化していくのではない。命令すればロボットが何でも代行してくれる社会では、ロボットは賢明になるが、人間は愚かになる。科学技術によつても何もかもが用意されている巨大な体制の中で、いつまでもそれに甘えて生きていくとすれば、われわれは、向上心というものを失い、努力や忍耐も忘れてしまうであろう。巨大な文明のモラトリアムの中で、何不自由なく与えられた上に、義務から逃避して生きていくことができるとするなら、人はただ遊び呆けて暮らす以外にないことになる。

二十一世紀の高度文明社会の人々の生き方がレジャーに重きを置き、軽やかな幻想を消費しながら生活することに価値を置いているとするなら、それは、一見、ことのほか楽しく幸福な生き方のように見えるが、本当は空しい生き方ではないか。それは、巨大な文明に甘えて生きる寄生虫のような生き方であり、巨大な体制の中を浮遊する根無し草のような生き方にすぎない。人々は、高度な科学技術が用意した文明世界の中で、文明の利器に囲まれて、ただ幼児のように戯れて暮らすだけになる。地球上を限なく覆う情報通信網によつてつながった

巨大都市文明は、大量の幼稚化した人間を自動的に生産していくことになる。

しかし、それでも、二十一世紀の高度文明社会の人々は、二十世紀同様、科学技術がしっかりとくれる便利な都市生活の中で、過剰なほどの物と情報を閉まれ、享楽的生活を送り続けるであろう。人々は、ありあまる余暇を、多チャンネル・テレビ、ヴァーチャル・リアリティ、立体映画、オーディオ、ファッショントレジャーレジヤー、スポーツ、イベントなど、感性的な幻影文化を消費しながら、甘美な生活に明け暮れる。また、生産者側でも、ファンション産業やサービス産業が、人々の感性や情緒に訴えて次々と新しいものを作り出し、これを消費させていくことになる。確かに、それは、軽快で心地よい生活には違いない。

しかし、このような享樂的生活は、パラエティに富んだ魅力的な生活ではあるが、利那的で空虚な生き方ではないか。高度消費社会の文化は、好奇心や感性、興奮や衝動に訴えて人を魅了する文化であるが、それはまた、センセーショナルでスキヤンダラスな文化でもある。そこで作り出される文化は、浪費的な文化にすぎないであろう。人々が、このような高度消費社会の利那的な享樂にいつまでも埋没し、気今まで怠惰な生活を送っていくなら、それは、そのような生活を可能にした文明そのものを消費していくことにもなる。文明が高度消費社会を生み出し、高度消費社会が消費文化の落とし子たちを生み出し、この文明の落とし子たちが、文明そのものを食いつぶしていくことになる。

青少年の体験欠如

何でも用意してくれる文明は、また、その便利さの代償として、生氣のない青少年を次々と生み出し続けることであろう。豊かな文明はどんなことでも約束してくれるから、青少年にとって、車に生きることは容易になつた。彼らは、偉大なものに対しては斜めに構え、他の競争や摩擦はできるだけ避けて通ろうとする。このような自己愛あるいは自己中心主義は、何もかもを保証する豊かな文明が自動的に生み出した精神的傾向である。

彼らは、コンピュータのディスプレイ上で演じられるヴァーチャル・コミュニケーションやゲームソフトなど、仮想現実には異常な関心を示す。現実の煩わしい社会を避けて、ヴァーチャルな世界に逃避するのである。彼らは、コンピュータのディスプレイを友として、仮想現実の中を遊泳しながら、いつまでも幻想を消費して生きていこうとする。

このような青少年が登場してきたのは、身体を通して経験すること、つまり体験するということを、豊かな文明が青少年から奪つてきたからである。現に、交通機関や通信機器の発達、エア・コンディショニングの発達などは、子供たちから、厳しい自然に鍛えられるという経験を奪い、歯を食いしばって物を運ぶ機会も奪つてきた。今日の青少年は、身体を通して自然から直接学ぶことも少なく、働くことによって物の抵抗に出合うということも少ない。さらに、彼らは、少子化や核家族化や地域社会の崩壊などのために、幼児期からの人との接触が

少なく、人の抵抗に出会うこともあまりない。

自然との接触や他者との接触が希薄になるとなるとどうなるか。物を作つたり人と付き合つていく中で必要な努力や忍耐が失われるであろう。体験が減少すれば、創造性も失われるであろう。克己心や忍耐力、持続力や意志力、責任感や感受性を欠いた青少年が登場してきたのは、体験欠如による。

豊かな文明は、家庭での過保護や過干渉を生み出し、自然経験や対人関係を貧困化させ、体験を欠如した青少年を大量に生産することになった。実際、なまの人とコミュニケーションするよりも、コンピュータとコミュニケーションしたり、コンピュータを通してコミュニケーションしたりした方が、より親密感をもつという青少年が登場してきている。さらに、人との関係ばかりでなく、自然物との関係でも、機械を通さねばかわりあえず、なまの自然物が苦手ということにもなる。

物の抵抗も人の抵抗もない体験欠如状態では、人は、判断力や思考力、理解力や表現力を衰弱させ、幼稚化するであろう。子供のようにマウスを操作するだけで世界中の情報を得ることができるような世界では、それほどの思考力も判断力も必要としない。ここでは、人は情熱を失い、感動を失い、その精神は空洞化する。

何でも用意してくれる文明は、便利な世界をつくりあげはしたが、その便利さが、文明に甘えるだけの人間を生み出した。技術の発達や豊かさの増大は、新種の野蛮人を生むことになったのである。情報化やサービス化が極度に進展する二十一世紀文明は、自然や人との接触をさらに奪い、その結果、心の空洞化した文明の落とし子を大量に生み出し続ける。ホラーティウスの言うように、われわれは、われわれよりもさらに劣った子孫を生むことになるかも知れない。

現代は、怪物化したメディアが神になつた時代であつて、ここでは、人間はメディアの奴隸として生きる以外にない。誰もが文明の子である。高度情報化社会あるいは高度消費社会と言われる二十一世紀の地球文明も、神なき文明の延長線上にある。この文明の発展の中で、失われるものもまた大きいであろう。繁栄の中にこそ、没落の予兆がある。文明が生み出したものによって、文明自身が衰退していかないとは限らない。

シュベングラーは、『西洋の没落』の中で、技術への信仰が極限にまで進み、世界が機械化した時、人間は機械の奴隸に変えられ、人間の本能的な生命力の源は涸れるとみている。そして、文明が世界都市の段階に達した時、文明は土から離れるとともに、魂の根源を失つて、自ら絶滅していくと考えた。³⁴

ニーチェも、すでに十九世紀末の段階で、生命力を失つた(最後の人間)がはびこるニヒリズムの時代の到来を予言していた。³⁵ 大地から離脱し、根源性を喪失した人間は、なお不安な生き方を続けていくことになる。

古代ローマ時代にも、ローマ人たちは、農業、鉱業、建築、医療、教育、家事、すべてを、ちょうど二十二世紀人がロボットにまかせようとしているように、奴隸にまかせていた。ローマの自由人は、奴隸に命令するだけで、あとは奴隸からのサービスを受けているだけでよかったのである。そのため、ローマの自由人は余暇が増大、その余暇を享楽的な生活に費やした。さらに、奴隸労働への依存は、ローマの技術的創造力をなくし、技術的停滞さえ招いた。奴隸に依存しているうちに、ローマ人は退化、これがローマ帝国の衰退につながることになった。奴隸が賢明になる分、ローマ人は愚かになつていったのである。

帝政ローマ期にも、完成したバクス・ロマーナの温室の中で、ローマ人たちは、過剰なほど物に囲まれ、遊び呆けて暮らしていた。公共浴場や劇場や競技場は、そのための娯楽施設であった。ローマ人たちは、このような施設を利用して、利那的な草薙に身をしびれさせ、幻想を消費しながら、甘美な生活に明け暮れていたのである。彼らが作り出した文化は、興奮や衝動に訴える浪費文化にすぎなかつた。その結果、それは、ローマ文明そのものを浪費することになり、ローマ文明は次第に衰退に向かつていつたのである。

帝政ローマ時代も、その前半は、地中海世界からあらゆる富を集め、繁榮を極めていたが、しかし、その頂点で、すでに衰退の予兆は現わされていた。繁栄と豊かさのために、ローマ建設時代の質実剛健な気風は失われ、家庭教育もなおざりにされ、父権も喪失し、そのため、努力や忍耐を忘れた得体の知れない若者が登場してきていたのである。

それどころか、耐性を欠如し罪悪感を喪失した青年さえ登場してきた。紀元一世紀の最も繁栄した時代に相次いで登場したカリグラやネロも、耐性を欠如したキレの青年であつた。

げ頭の者を見つけ次第逮捕し、競技場の猛獸の中へ投げ込んで殺したり、ローマ中の哲学者を捕らえ、死刑または流刑に処したりしている。

また、ネロも、セネカの指導を得ていた時は善政を布いたが、二十歳になった時、突然変身。母アグリッピナを謀叛の企てありとして暗殺、まわりの政治家や軍人も処刑、セネカにも自殺を命じた。キリスト教徒を、ローマ大火の真犯人として大量虐殺したことなど、よく知られている。カリグラやネロは、今で言う行為障害者であった。しかし、それは先天的なもの

帝政ローマも、その繁栄ゆえに、幼稚化した新種の野蛮人たち、心の空洞化した文明の落とし子たちを大量に生み出していく。ローマ文明も、このような野蛮化の道を歩みながら、次第に衰退に向かい、混沌とした不安な時代を向かえることになったのである。

産業の空洞化

映画や音楽、スポーツや演劇、レジャーイベント、ヴァーチャル・リアリティなどを楽しみながら、流行のファッショնに身を包み、軽やかな幻影を消費して、享樂的生活に明け暮れるというのが、少なくとも、今日の先進国の人々の望む生き方である。しかし、このような高度消費社会が成り立つには、物の生産が発展途上国で行なわれ、過剰なほどの物が先進国に流入してくる必要がある。実際、発展途上国を下請け化し、物の生産は途上国の労働者にまかせ、自分たちは、情報や知識、金融やソフトウエア、ファンションやデザイン、レジャー・サービスなど、ソフト産業で生きるというのが、二十一世紀の先進国を目指す生き方である。

しかし、このようなソフト産業中心の産業構造は、産業の空洞化を招き、生産性の低下をもたらしはしないか。実際、高度な消費生活を維持していくには、海外からの輸入に頼らねばならないが、その代金を他国からの債権で賄うというようなことをしていれば、巨大な債務国に転落し、国力の低下を招くであろう。その結果、二十一世紀の先進諸国は、逆に途上国依存を強め、それが、世界経済の重心の移動をもたらすことになる。高度情報化社会や高度消費社会を形成して生きていこうとすることは、逆に、文明の衰退の兆候ではないか。

現に、アメリカ、ヨーロッパ、日本など、今日の先進国は、物の生産を新興工業国や発達途上国に移管、自らはソフトウエアを主体にして生きていこうとしている。先進諸国は、どこでも、製造業の生産拠点を賃金コストの低い発展途上国に移し、非製造業主体の産業構造に転換しつつある。しかし、これらの国々が、賃金の高騰や競争力の低下、財政破綻や对外債務に悩んでいるのも事実である。ローマ帝国が属州の生産に依存していたように、今日の先進諸国が途上国依存を強めていけばいくほど、先進地域は空洞化し、やがて衰退していくねばならなくなるであろう。

額に汗して働くことを嫌い、物作りをしなくなつたら、文明は衰微する。高度情報化社会や高度消費社会の形成によって、必ずしも、素晴らしい時代が訪れるわけではない。なるほど、それは産業発展の完成ではあるが、完成はまた終焉でもある。高度情報化社会や高度消費社会を完成しつつある先進諸国は、いずれ途上国に逆襲を受け、矮小化するであろう。世界史はしばしば激変してきたのである。

人類の長い文明史を眺めても、しばしば、中心地域が周辺化し、周辺地域が中心化して、中心と周辺が逆転してきた。中心地域は、その繁栄ゆえに、次第に内部崩壊を起こし、求心力を失う。それに対して、周辺地域が、逆に求心力を強化し、抬頭してくる。とすれば、今日の

地球文明にあっても、中心地域を形成している先進諸国が空白化し、周辺地域に文明の重心が移るというようなこともあります。

中心文明の巨大な構築物も、中心地域の人口が減少すれば、遺跡と化す。現代の大都市に屹立する高層ビルも廃墟と化し、われわれが築き上げてきたこの豊かな文明が砂上の楼閣のようなものであったことを告げる時が来るかもしれない。そして、遺跡化し廃墟と化したこれら文明の構築物を、周辺文明からの移住者が占める。諸国家諸民族の勢力の移動の過程で、現代文明が衰退し、没落していかねばならない時が来る。もしも、現代に不安というものがあるとすれば、それは、遠く、この文明の没落を予感しているものかもしれない。

文明の解体と不安

シュベングラーも、文明の末期、冬の時代には、諸国民が内部的に崩壊し、政治は動搖を続け、人口も減少し、創造的能力も失われていくとした。そして、その終末期には、文明周辺地域の蛮族との衝突の中で、文明の機構が麻痺し、やがて崩壊、一つの文明はその生を終わると考えた。そこでは、終末的氣分が広がり、生きることそれ自体が疑問になる。シュベングラーは、「この抗しがたい文明の過程から逃避しようともせず、また、これを改革しようとする幻想ももたず、これを運命として甘受しようとしたのである。

トインビーも、文明の解体は内部崩壊によつて起きるとみている。文明内部の諸階層間に分裂が生じ、モラルも低下し、統合能力が失われる時、文明は解体に向かう。文明が解体に向かうと、周辺地域の外的プロレタリアートが、支配的文明に魅惑されることをやめ、勢力を盛り返していく。その分、支配的文明の道徳的優位は崩壊し、その地位も見栄えのしない位置にまで追い込まれる。こうして、一つの文明は自らの使命を終えて、新たな文明へと道を譲っていく。文明は自殺によつて没落するのであり、外部勢力はこの文明の自殺に単にとどめを刺すだけだと、トインビーは考えたのである。

現代も、特に先進地域では、文明の爛熟とともに、共同社会の空洞化、社会倫理の混乱、低俗な文物の洪水、教育の荒廃、青少年の精神的荒廃、豊かさの背後で進行している多くの精神疾患など、精神的頹廃現象が見られる。これらは、文明の解体の兆候なのかもしれない。これら精神的荒廃現象は、豊かさを獲得するための代償であった。われわれは、物質的豊かさを得る代わりに、魂の貧困に陥った。先進文明へ次々と参入していく新興工業国も、この豊かさの中の貧困という文明病に出会うであろう。魂の空虚化は、物質的豊かさでは埋め合わせできないのである。われわれの中に不安があるとすれば、繁栄にもかかわらず安定しかた世界がないということによる。満たされた不安なのである。満たされた不安は、繁栄の頂点での没落の予兆でもある。

われわれは、文明の発展とともに、伝統的文化の核を失い、倫理的な核も失い、拠り所とする

基盤も見失つてきた。価値観も動搖し、人間と世界の統一的把握も困難になり、内面的にも空白化している。現代人が不安な生き方をせざるを得ないのは、このことによる。

現代人が絶えず未来に向かつて掛け声をかけ、その掛け声を消費しながら生きていこうとしているのも、この不安の裏返しであろう。不安を解消するには、未来を先食いして生きていく以外にないのである。未来を略奪し、未来に向かつて逃走していくことによって、現代人は生きていく。しかし、それは、また、未来への不安を搔き立て、なおさら未来へのめり込んでいくことになる。われわれは、なお、不透明な混沌とした時代を、不安を抱えながら生きていくことになるであろう。

ローマ文明の衰退

帝政ローマ時代にも、首都ローマの市民たちは、物を作らず、働かず、贅沢と享楽、食欲と放埒に溺れた頗廃した生活に明け暮れていた。そして、物の生産は属州の異民族にまかせているうちに、産業の中心は、次第に、首都ローマから帝国の周辺地域へと移動していった。生産技術も、ローマの版図の拡大とともに、周辺地域に移動していく。今日の先進地域同様、産業の空洞化が起きていたのである。

ウォールバンクが『ローマ帝国衰亡史』で指摘しているように、例えば、陶器の生産も、はじめはイタリアが担っていた。ところが、やがて、その生産拠点はどんどんと北方へ移動して行き、ついには、イタリアは陶器の輸入国に転落してしまったのである。奴隸のする手仕事を嫌わなかつた北方ゲルマン人たちが熱心に生産に励んでいるうちに、北西部の属州は消費市場から生産地へと転換。それに対し、イタリア半島は逆に輸入地に転落、次第に属州依存を強めていったのである。首都ローマが輸入に依存していた必需品の代金は、帝国の支配によつて得た税金によつて賄われた。ローマ市に残つた産業は、唯一、政治だけだつたのである。ローマは、いわば、情報と消費などソフト産業だけで生きていこうとしたことになる。こうして、ローマ帝国の中心であつたイタリアは、まず経済的に衰え、その優越した地位を失い、没落していく。ウォールバンクによれば、産業が生産品を輸出せずに、産業それ自身を輸出し、商業が古い地域から新しい地域に移る時、一つの文明は衰亡すると言う。³⁸

一般に、中心から周辺への重心移動によつて、中心と周辺の逆転が起き、文明は別の文明に転換していく。ローマ文明にも、この重心の移動が起きたのである。このことは、現代文明も例外ではないであろう。

蛮族の侵入によつてローマ帝国は滅亡したという考えは、確かに単純ではある。しかし、東ローマ帝国が、西ローマ帝国の滅亡後も、蛮族の侵入をよく防いで存続しえたことを考え合わせるなら、この説もそれなりの説得力をもつとも言える。

もつとも、ゲルマン諸族のローマ領内への流入は、紀元前の共和政末期から続いており、滅亡期に急に始まつたわけではない。ゲルマン諸族のローマ領内へのまとまつた形での定住が許されたのは四世紀末だが、ゲルマン人の流入そのものは、その数百年も前から始まつていたのである。これに類する現象は、今日でも、途上国からの先進諸国への人口流入という形で起きている。

ローマ帝国は、これらのゲルマン人をローマ軍に編入し、蛮族の侵入の守備に当たらせた。蛮族の侵入の防衛の任に当たつたのも、蛮族出身のローマ軍だったのである。この軍の蛮族化は軍の劣悪化を招き、祖国愛も失われ、軍は次第に有名な将軍の私兵と化していった。これがローマにとっての命取りになつていつたと言われる。ローマ人は版図の防衛をゲルマン人にまかせ、現代の先進国の人々と同様、自分たちは食欲と奢侈の生活を送っていたのである。このようなローマ人にはもはや自己解決能力はなく、ローマの衰退を防ぐだけの力はなかつた。これと比べれば、蛮族と言われたゲルマンの方々が、勤勉で純良、勇敢で大胆であった。ローマ人の方がむしろ野蛮だったのである。

かくて、紀元五世紀には、アラリックに率いられた西ゴート族、アッチャラに率いられたフン族、ガイセリックに率いられたヴァンダル族、テオドリックに率いられた東ゴート族などの侵攻が続き、西ローマ帝国は滅亡した。四七六年のスキエル人傭兵隊長オドアケルの蜂起で西ローマは滅んだと言われるが、それは結果にすぎない。没落は、それ以前に決定的になつていたのである。四一〇年の西ゴート族、四五五年のヴァンダル族のローマ市占領では、略奪、凌辱、殺戮が横行し、難民が続出、人肉食まで行われ、ローマ市の有様はこの世の終わりを思わせるほどであった。それにもかかわらず、ローマ人は奮起するわけでもなく、競技場の見世物の再興を要求することしか考えなかつたという。

こうして、五世紀末には、旧西ローマ帝國領は、すべて、蛮人諸族の王によつて支配されるに至つた。最盛時には百二十万の人口を抱えていたローマ市も、一村落程度の人口に減少。数千、数万の人々を集めた円形劇場や競技場や公衆浴場も遺跡と化したのである。

このローマ帝国の滅亡を見て、多くの心ある人々は、その原因を、ローマの老衰とローマ人の悪徳に見た。そして、蛮族の侵入を、ローマ人の罪に対する神の裁きだと考へたのである。成長したものは若い、生まれたものは死ねばならない。人間の作ったものすべてがそうであるように、巨大な文明も没落の摂理に従わねばならなかつたのである。

不安な時代の生き方

帝政ローマ期も、繁栄の背後にそれとなき不安を抱えた時代であつた。ヘレニズム時代以来引き継がれてきたストア派やエピクロス派の哲学は、政治から切り離された個人倫理を説いて、心の不動と心の平静に最高の徳を置き、また、懷疑派の哲学は判断保留の必要を説いた。

その背景にも、社会の混乱と価値観の動搖による不安があつた。

なかでも、ストア主義は、神は宇宙の魂であり、力であり、理性的なものであり、われわれを支配する運命であると考え、大宇宙の理法である神の摂理に従つて生きることを理想とした。そして、自然はこの神的理性に支配されており、自然の一部である人間は、自然に従つて、理的に生きるべきであるとした。そして、あれこれの感情に動かされない魂の状態、つまり不動心（アバティア）を最高の徳とし、運命に対して耐える精神をもつべきであると説いたのである。それは、不安な時代の中にあって、人はいかに生きるべきかを深く思索した人生哲学であった。

例えれば、後期ストアに属し、ネロ帝の政治顧問であったセネカも、内なる神の声、つまり理性への服従を説く。神の声である内的理性に従うことこそ、富や権力、地位や名譽、快樂など、偶然的なものから自由になる道であり、この道を実践してはじめて徳は可能になる。

さらに、セネカは、この自由の道の究極に死を置く。人生は極めて短く、不安と苦痛に満ちている。生は過酷な刑であり、死はそれからの解放である。死はすべての苦痛からの解放であり、魂の牢獄である肉体からの解放である。死は、助けを求むべき最後のものであり、癒しである。

セネカの思想は、不安な時代にどのように生き、死すべきかを熟慮した実践哲学であった。実際、セネカの生きた時代は、表向きは超繁榮の時代であったが、すでにローマ社会の頽廃は始まり、何とはなしの不安の漂う時代であった。セネカも、ローマ人の風紀の退廃を憂え、その悪の根源を、貪欲と奢侈、不信と嫉妬に見、魂の不安を感じ取っていた。そして、ゲルマン人の大軍がいすれ帝国を背かすことになるであろうことを、すでに予感していたのである。

他方、奴隸出身の哲学者エピクテートスは、われわれの権限内にあるものと権限内にないものを区別することによって、不動心を得得できると考へた。われわれの権限内にないものは、われわれの力ではどうにもならないことであるから、それらに対しては無関心の態度を取るべきである。死刑、追放、投獄、どんなことも、神の摂理と運命にまかせて、徹底的に服従すべきである。それに対して、われわれの権限内にあるもの、つまり自由意志だけはわれわれ自身のものである。この意志をわれわれの統制下に置くなら、われわれは眞の自由を得て、心の平静を獲得できる。神の摂理を信頼し、精神の内面の自由を確保するなら、たとえ牢獄にあっても自由であると言う。

このエピクテートスの思想は、虐待や迫害や追放の生活の中で身をもつて獲得した人生の知恵であった。だが、その背景には、社会の激動の中で、運命に翻弄される当時の人々の不安な経験があったであろう。

また、ローマ皇帝で五賢帝の最後の人、マルクス・アウレリウスは、『自省録』の中で、万物

流転、運命に対する諦念、自然の理法や神の摂理への信頼を説き、変転極まりない世界にあつて、何ものにも動かされぬ不動心をもつべきであることを語つている。すべてのものは速やかに過ぎ去り、消え失せてしまう。人生は短く、死後の名声も空しい。ただ運命に従つて歩み、神と自然に従つて生きるべきだと言う。

マルクス・アウレリウスが帝位に就いた紀元二世紀は、ローマ帝国の平和と安定に破綻が見えはじめたころであったが、彼は、その地位にある間、転戦に転戦を重ね、帝国防衛の義務を立派に果たした。しかし、彼の愛したものは哲学であり、信頼したものは宇宙という大きな国家であった。彼の心は、戦陣にあっても、常に、自己の内面と宇宙の本性へと向けられていた。その境地から見ると、人生は虚しく、現実の国家や社会も移ろいやすく、自己の力ではどうにもならぬものと受け取られたのである。『自省録』の全編に漂う一種の厭世觀は、また、繁榮と堕落の渦巻く当時のローマ社会への嫌悪からくるものでもある。現代同様、この時代も、繁榮の中に不安を宿した時代だったのである。

頽落した社会にあって、人生とこの世の虚しさを説き、ただひたすら自己の内面の中に救済を求めた後期ストアの哲学者たちは、その鋭い感受性の中に、時代の不安を予感していた。そして、その不安は、実際、三世紀以後のローマ社会の混乱となつて現われたのである。国内の治安は乱れ、経済は停滞し、疫病は流行し、ローマ帝国は衰亡の道をひた走った。人々の不安は募り、迷信や魔術が流行した。ローマ社会は、誰が見ても、混沌とした不確実な時代に突入していくのである。

2 不安と救い

宗教の復活

ヨーロッパの十八世紀末以来、十九、二十世紀と、産業技術文明の拡大とともに、宗教の力は弱まり、ヨーロッパばかりでなく、産業技術文明を受け入れた地域では、どこでも共同体の紛糾が弛緩し、社会の倫理規範も弱体化していった。現代の頽落の根底には、神から逃走してきた現代人の精神の空虚化がある。頽落した時代を踊る最後の人間)がはびこる現代は、すでに、精神的には終末に近い。

人間の歴史は、永遠根源的なものからの離反の歴史であつた。人間の歴史は、争いや憎しみ、貪欲や堕落の繰り返しあつた。現代の文明も、神から離反した罪ある文明であろう。

人類の歴史がそこから始まつた(傲慢)は、現代では巨大な産業技術文明となつて、自然と人間の両方を略奪している。この巨大な産業技術文明によつて成り立つてゐる現代の大都市は、淫乱と罪業のために神によつて滅ぼされた破滅の都市、ソドムとゴモラのようにさえ見える。現代人は、大地から離反し、永遠根源的なものを見失つてきた。そのため、精神は散乱し、撻

り所は失われ、抛つて立つ基盤も見失われた。現代人が方向の見定まらない不安の中にいるのは、そのためである。不安は不安を呼ぶであろう。不確実で不透明な時代は続くと言わねばならない。

しかし、巨大な科学技術に支えられた現代文明も、膨張の限界に達し、衰微していくことはある。この時、人々の不安はますます昂じていくことになるが、時代の不安が昂じてくれば、科学技術よりも、宗教の方が人々の魂をとらえるようになるであろう。二十一世紀も不安の多い時代になるであろうから、宗教の力はますます強くなつてくるであろう。果たして、神なき文明が再び神を見出すことができるのであろうか。

現代文明は、高度に発達した科学技術に支配された文明であって、これが世界の一様化と合一化をもたらしている。二十一世紀の地球文明も、この方向がより進展するであろう。しかし、科学技術が発展すればするほど、人々の不安は募り、不安の救済を求める要求は増大する。それにつれて、宗教の必要性もより高まっていく。とすれば、帝政ローマ時代の不安に応えて、地中海世界全体を覆う形でキリスト教が拡まつたように、二十一世紀の世界にも、地球全体を覆う世界宗教が登場してくる可能性もないわけではない。

もちろん、必ずしも、地球全体を統一するような世界宗教がなければならないというわけではない。今日のように、多くの宗教が共存し、それぞの宗教的要求に応えるだけで十分だとも言える。どちらにしても、現代世界の宗教は、文明のもたらす精神的不安の表現として意味をもつてくる。

宗教は、むしろ、世界的に統一されない方がよい。すべての宗教が一つに統一されてしまったなら、宗教は堕落し、その活力を失う。二十一世紀の世界が、また、多元性をもつた世界でなければならないとするなら、われわれは、(多様性の中の共存)の可能性を求めていかねばならない。宗教的面でも、多くの宗教が、それぞれの相対性を認識しながら、宗教的宽容の精神をもつて、共存していかねばならない。宗教は多様な機縁をもつており、宗教的真理に至る道も多様である。したがつて、あらゆる宗教が、何らかの形で宗教的真理を表現している。とすれば、諸宗教は、枝葉末節のところで対立するのではなく、和解し、融和していかねばならない。

宗教と文明

宗教は、どの宗教でも、宇宙の根源的生命への確信に根差しており、人間の苦悩と罪悪からの救いを目指すものである。しかも、このような宗教が、神像や聖像を生み出し、神殿や教会や寺院を造り出し、それらを中心に、政治、経済、社会の営みが行なわれ、都市も成立してきた。このことを考えれば、宗教が文明の誕生と成立に果たした役割は大きいと言わねばならない。

また、この文明と文明の出会いから、より高度な宗教が登場してきたことも事実である。

文明間の出会いは、戦争や闘争を生み出し、社会の大変動を引き起こし、その結果、人間の罪悪や苦悩についての深い洞察が生まれる。そこからの救済を求めて、仏教やキリスト教やイスラム教など、より高度な宗教が生まれ、それが全人類に開かれた宗教となつた。これらの高度宗教が、文明の発展と維持に果たした役割も大きい。

さらに、文明の挫折と解体においても、宗教の果たす役割は偉大である。何より、文明の挫折と解体に伴つて自覚される人間の貪欲、堕落、そして不安は、宗教のより高度な純化をもたらす。

さらにまた、この高度化した宗教は、文明の死と再生の橋渡しの役割をも引き受けける。宗教は、古い文明を葬り去り、新しい文明を誕生させるのにも、大きな役割を果たすのである。トインピーの言うように、宗教は、親文明と子文明の間の仲介者の使命を果たす。宗教は、文明の死滅と次の文明の発生までの空白期間中に貴重な生命の萌芽を保存する蛹としての役割をもつのである。

現代も、文明の挫折の時代と考えることもできる。したがつて、二十一世紀も、不安の多い混沌とした時代になるであろう。科学技術の発展や経済成長による共同社会の空洞化も、十九、二十世紀同様、より進行していくであろう。社会のアトム化も、地理的規模で進行していくであろう。それに伴つて、二十一世紀も、アトム化した大衆の不安の解消を約束して、多くの宗教が登場してくるであろう。しかも、それらの宗教が、共同体に根差した宗教ではなく、個人を基礎とした宗教になるであろうことは、二十世紀と変わりはない。今日、隆盛を極めている新宗教も、共同体の崩壊とともに、断片化した大衆の不安の解消を約束して登場してきた宗教である。それどころか、最近では、インターネットやヴァーアーチャル・コミュニケーションを利用して拡大している新新宗教も登場している。

しかし、これらの宗教が商業化し、救いと金銭を交換するサービス産業になつてしまつていることも否定できない。さらに、それらの宗教教団が巨大組織化し、企業化していることも否めない。それらが、人間の苦悩や罪悪を深く自覚することなく、安易な癒しを供給するだけの組織にすぎなくなつてしまつたなら、それは宗教の堕落だと言わねばならない。これらの宗教が、すぐにも救済されるような幻想を作り出し、その幻想を撒き散らして、大衆を糾合していくだけのものになつてしまつたなら、それはまやかしの宗教である。すべてが救済される神の国は、それほど安易に地上の国に実現できるものではない。

シュベングラーも、文明の末期には、第二の宗教が生まれ、民衆を眠り込ませてしまうとみている。¹⁴この疑似宗教は、すべての疑問の解決を約束し、人々が疑いを抱かないようになる。合理主義の裏返しとして、非合理的なものへの迷信や病的なものの魅力に引かれる傾向が

強まり、心靈術など、祭儀的なものを求める風潮が復活してくる。そこには、本来の深い宗教体験が欠けている。それは、すでに宗教の末期症状であり、文明を暗黒時代に落とし込むものにほかならない。

そればかりでなく、二十一世紀は、民族紛争や地域紛争を背景にした宗教紛争も多発し、多くの破壊が行なわれることも予想される。さらに、それが過激化して、宗教テロリズムを起こし、殺戮が正当化されることもある。この点から言つても、宗教は常に堕落と紙一重であり、それほど簡単に宗教の時代の到来を称揚することはできない。

しかし、宗教といつても、単に教団や宗派、教会や寺院を意味するのではない。宗教は、本来、永遠根源的なるものを探る人間の願望である。だから、救済は、われわれの心の中にある。二十一世紀も不安の多い世紀になるであろう。しかし、それでもなお、地に足を着けて、自己自身のうちに確固とした場をもつ必要があるとするなら、それは、宗教による以外にない。

帝政ローマの新宗教

帝政ローマ時代も、現代同様、混沌とした不安な時代であった。社会の激変とともに、旧來の共同社会は崩壊し、人々は不安な生き方をしなければならなかつた。土地の神々が退場し迷信が流行したのも、このような社会の動揺と不安を背景にしていた。

紀元一世紀のティベリウス帝の時代に、イオニア海のバクソス島付近で、嵐の夜、「大いなるパンは死んだ」という声を聞いたと称するタムスという名の船乗りが現われた。そのため、皇帝が、学者たちに命じて調査に当たらせたという。このように、一船乗りの幻聽が皇帝をも動搖させるほどの事件にまで発展したということは、当時の社会の背後に、何とはなしの不安があつたことを表わすものであろう。それは、ローマの伝統的な神々の死と、それによつて裏づけられていた価値の崩壊を告げるものだったのである。紀元一世紀のローマと言えば、ローマの帝政も確立し、安定と繁栄の時代のように思われている。しかし、その背景には、伝統的価値観の崩壊からくる不安が漂つてもいたのである。

外来の神々がどつと流入し、大衆の救済を約束する新宗教が登場してきたのも、繁栄の中の不安が下地になつてゐた。ローマ大衆は、「パンとサーカス」だけでは満たされぬ孤独と不安からの逃避を求めて、その救いを、新しい宗教の中に見出したのである。

なかでも、地中海東部から流入してきた数々の密儀宗教が、三世紀のローマ文明の急激な崩壊に乘じ、大衆の心をつかんで流布したのも、ローマ社会の危機と不安に根差していた。エジプトから渡來したイシス崇拜、アナトリア由来のキュベレ崇拜、イランから流入したミトラ信仰などは、その代表である。これらは、どれも、神秘的な祭儀でのエクスタシーを通して、神と合一し、永遠の生命と救いを獲得しようとするものであつた。

これらの密儀宗教の特徴は、今日の新宗教同様、地縁的な共同社会に根差した宗教から、個人を基礎とした宗教へ転換したことである。ローマ社会の激変とともに、地縁的な共同社会が崩壊し、不安に陥った大衆は、このような宗教の集まりに参加し、悲惨なこの世の生活からの救いを得ようと願つたのである。それは精神的不安の表現だったのである。

シュベンクラーは、『西洋の没落』の中で、この帝政後期の密儀宗教を、彼の言う第二の宗教に位置づけ、文明末期の終末的症状とみた。⁴³そこでは、宗教本来の深さは失われ、ただ祭儀的なもののみが流行し、非合理的なもののみが信仰されると考えたのである。

ユダヤ教とギリシア・ローマ文明との対決の中から生まれたキリスト教も、救世主の再臨という魅力的な説ゆえに、ローマ帝国内の貧しい大衆の間に広まつた。⁴⁴「イエス・キリストは神の子であり、イエスの十字架上の死は人類の罪の贖いである。このイエスの贖罪を信じ悔い改めるなら、必ず神の恩寵はあり、その助けによつて、われわれは永遠の生命と浄福を得ることができる」というのが、パウロの教義であった。パウロの教義は、信仰のみによつて誰もが救われるという教えだつたために、無力なローマの民衆に希望を与えた。

もちろん、キリスト教のローマ帝国内への普及は苦難に満ちたもので、何度も迫害を受けた。だが、これに対しては、キリスト教徒は激しく応戦した。このキリスト教迫害の背景にも、ローマ社会に潜む不安があつたであろう。不安に陥つた人々は、様々な災厄の原因をキリスト教に転嫁してもいたからである。しかし、キリスト教の迫害と護教との対決も、四世紀に、キリスト教が帝国によって公認され、国教となるに及んで、護教側の勝利に終わる。トインビーは、ローマ文明の衰退はローマ文明の自殺によるものであり、キリスト教という新しい宗教の勃興は、ローマ文明の衰退の結果であるとみている。ローマ文明の衰退の結果、文明内に勃興したキリスト教の信徒たちは、次第にローマ文明の内的プロレタリアートと化し、これがキリスト教という世界宗教を生み出すことになった。⁴⁵しかし、この生み出された普遍宗教も、文明の頽廃と滅亡を食い止めることはできなかつた。帝政ローマ後期に国教となつたキリスト教でも、西ローマ帝国の崩壊を救うことはできなかつたのである。

終末と救い

五世紀には、西ローマは、西ゴート族やヴァンダル族の侵入に遭い、滅亡する。首都ローマをはじめ、蛮族の侵入にあつた各都市では、殺戮、略奪、飢餓が横行し、劇場や神殿や祭壇が破壊され、都市は廢墟と化した。かつて世界を征服し蛮族を支配したローマは、逆に、蛮族によって征服されるに至つた。ローマの平和は永遠に失われ、ローマは終末を迎えたのである。人々は、このローマの滅亡に世界の終末の前兆を見、頽廃したローマに対する神罰を感じとつた。そして、廢墟と化した都市の跡には、ただ永遠に変わらない大地だけが残つたのである。

「黙示録」は、ローマ帝国の終末の有様を予知して、世界の終末の恐るべき姿を、その独特的幻想の中で描き出している。

「ああ、わざわいだ、この大いなる都は、わざわいだ。そのおこりによつて、海に舟を持つすべての人が富を得ていたのに、この都も一瞬にして無に帰してしまつた。」

「金や宝石や真珠で身を飾つていた大いなる都は、わざわいだ。これほどの富が、一瞬にして無に帰してしまうとは。」

「倒れた、大いなるバビロンは倒れた。そして、それは悪魔の住む所、あらゆる汚れた靈の巣くつ、また、あらゆる汚れた憎むべき島の巣くつとなつた。」

「ああ、わざわいだ、大いなる都、不落の都、バビロンは、わざわいだ。おまえに対するさばきは、一瞬にしてきた。」

この「黙示録」の中の大いなるバビロンの滅びについての記述には、第二のバビロン・ローマ帝国への呪詛が含まれている。¹⁴ 「黙示録」では、帝国の滅亡は、むしろ至福千年の前触れとして歓迎されているのである。

北アフリカのヒッポの司教、アウグステイヌスも、この「黙示録」の思想を引き継いでいる。四一〇年、アラリックの率いる西ゴート族が首都ローマに侵入、三昼夜にわたる殺戮と略奪と破壊を繰り返した時も、その報告を受けたアウグステイヌスは、これを神の懲罰と解釈した。そして、戦慄と不安に怯えている信徒たちに、永遠のローマは存在しないということ、さらに、われわれはわれわれ自身の中に永遠の宝を求めねばならないことを説いた。この事件を切っ掛けに、アウグステイヌスは、その後十四年をかけて、『神の国』を執筆、完成したのである。

四二九年、ガイセリックの率いるヴァンダル族が北アフリカへ侵入、諸都市が危機的な状況に陥った時も、人々は、恐怖と戦慄から、世界の終わりを確信した。アウグステイヌスがいたヒッポの町も、翌年、ヴァンダル族によって包囲された。アウグステイヌスは、ここでも、この蛮族の侵入は地上の國ローマに与えられた当然の罰であると説いた。しかし、神を信じ神の国を想望しつゝ、逆境の中を耐え忍び、最後まで生き抜くことを勧めた。われわれは、地上の國への愛ではなく、神の愛に生きるべきだと主張したのである。

アウグステイヌスの著書『神の国』は、神の國と地上の國の起源、地上の國の歴史とローマの運命、神の國の永遠などについて叙述した歴史哲学の書であった。それは、地上の國は罰せられ滅ぶが、神の國は永遠であることを語り、神の愛に生きることに希望を見出そうとしたものである。その背景には、地上の國ローマの崩壊からくる悲惨な体験があつた。地上の國は「自己愛」に根差し、神の國は「神の愛」に根差し、この「神に背く愛」と「神に従う愛」の二つの愛の葛藤によって、世界の歴史は形づくられる。

地上の國はアダムの罪（傲慢）に源をもち、カインの罪を経て、現実の地上の國、アッシリア、

アレクサンドロス大王国、ローマ帝国となつて出現した。そこに平和があつたとしても、その地上の平和は支配と服従の関係に基づくものにすぎない。もしも、そこに正義が欠けていれば、それらは大盜賊團以外の何者でもない。だから、神から離反した地上の国は、永劫の罰を受けて破滅を免れない。罪に墮し傲慢によつて成り立つたローマの支配も、破局という地上の国の運命を背負つている。第二のバビロン・ローマは、享樂と貪欲、奢侈と淫乱など、あらゆる悪徳と堕落によつて、破滅の運命に定められている。ローマは、道徳的腐敗によつて滅ぶのである。

それに対して、われわれは、自己愛から神の愛に転換することによって、地上の國から天上の國に移ることができる。天上の国においては、われわれの罪は赦され、われわれは、眞の安息と平和、自由と至福、永遠の生命を得ることができるであろう。

アウグスティヌスの『神の國』は、彼自身が生きた終末期のローマを全実存をかけて問題とし、その苦惱の中から生み出された『現代文明論』でもあつた。確かに、罪悪によつて成り立つている人間の歴史も神の国によつて支えられ、罪ある文明も神の愛によつて包まれているのだと言わねばならない。

現代人も、ローマ人同様、大地から離反し、根源性を喪失し、魂を衰弱させている。その有様はすでに終末に近い。文明の限りない膨張による人間と環境の破壊を考えるなら、現代もまた罪ある時代である。罪多い文明は、その罪ゆえに、ローマ文明同様、混乱と苦惱の中で次第に衰弱していくかもしれない。文明の解体は、文明内部の罪悪によつて引き起こされるとも言える。

しかし、もどもど、人間の歴史は人間の罪悪によつて成り立つている。ならば、この人間の歴史的な罪や悪が、どこかで救はれ救われる場がなければならない。その救いの場は、われわれが、そこから生まれてきた大地に帰り、大地の根源的生命に信頼を置く時、立ち現われてくるであろう。人間は、大地から生まれ、大地に帰る。文明も大地から出て、大地へ帰還する。大地と生命への信頼、それが、本来、宗教の求めてきたものである。人間の救済は、歴史を越えたところに求められねばならない。人間の歴史的罪悪をそのままに、永遠の生命に自己をまかせる時、救いはある。罪ある人間の歴史も、常に、永遠の大地、永遠の生命に支えられているのである。

- 1 S・ハンチントン『文明の衝突』鈴木主税訳 集英社 一九九八年 第二章、第九章～第十一
章
- 2 B・アンダーソン『想像の共同体』白石さや・白石隆訳 NTT出版 一九九七年 一一一～一
四頁
- 3 ディオガネス・ラエルティオス『哲学者伝』六・六三 北嶋美雪訳 世界文学大
系63「ギリシア思想家集」筑摩書房 一九六五年 三七九頁
- 4 Toynbee, *Change and Habit*, Oxford U.P., 1966, p.157 (『現代が受けている挑
戦』吉田健一訳 新潮選書 一九七六年 一八〇頁)
- 5 S・ヘンチントン『想像の共同体』前掲書 第九章
- 6 Toynbee, *A Study of History V*, Oxford U.P., 1979, p.194ff. (『歴史の研
究』K) 〔歴史の研究〕刊行会 一九六九年 一九五頁以下)
- 7 Toynbee, *Civilization on Trial*, Oxford U.P., 1953, p.60 (『試練に立つ文
明』深瀬基寛訳 「ムーン刊」著作集) 5 社会思想社 一九七五年 九五
頁)
- 8 Nietzsche, *Die Geburt der Tragödie*, Sämtliche Werke, Körner 1964, S.179
〔『悲劇の誕生』〕1 浅井真男訳 筑摩世界文学大系44「ニーチェ」 筑摩
書房 一九七一年 三〇四頁)
- 9 Spengler, *Der Untergang des Abendlandes* I Bd., Beckische Verlagsbuchhandl
ung, 1923, S.379ff. (『西洋の没落』第一巻 村松正俊訳 五月書房 一九七八
年 一七五頁以下)
- 10 Spengler, *Der Untergang des Abendlandes* II Bd., Beckische Verlagsbuchhan
dling, 1922, S.125-127 (『西洋の没落』第二巻 村松正俊訳 五月書房 一
九七八年 八八一八九頁)
- 11 Toynbee, op.cit., p.215 (前掲書 111五頁)
- 12 Kierkegaard, *Eine literarische Anzeige*, Gesammelte Werke 17, Eugen Dieder
ichs 1954, S.89ff. (『現代の批判』林田啓二郎訳 世界の名著40「ギル
ケール」) 中央公論社 一九六四年 三九一頁以下)
- 13 Nietzsche, *Also Sprach Zarathustra*, Sämtliche Werke, Kröner 1964, S.13-1
5 (『フ・ト・ハ・ウス・ム・ラ・は・か・語・た』序説五 浅井真男訳 筑摩世界文学大
系44「(リ)ー(チ)」) 筑摩書房 一九七一年 一〇一一頁)
- 14 Spengler, op.cit., S.445 (前掲書 一九八頁)
- 15 ホーリーチイウス『歌章』三・一・一 藤井昇訳 現代思潮社 一九七三年 一一五頁
- 16 ホーリーチイウス『風刺詩』一・一・〇・七二一～七五 鈴木一郎訳 世界文学大
系67「ローマ文学集」 筑摩書房 一九六六年 一六六頁
- 17 セネカ「幸福なる生活にして」樋口勝彦訳 『幸福なる生活にして』・
他一編】岩波文庫 一九七〇年 八一九頁
- 18 Spengler, op.cit., S.119-121 (前掲書 八四一八五頁)
- 19 ギボン『ローマ帝国衰亡史』VI 朱半田夏雄訳 筑摩書房 一九九二年 一八七頁
- 20 「ヨーヘネの點示録」八・八・一『聖書』日本聖書協会 一九六九年 三九四頁
- 21 同 九・六 三九五頁

222 ダニエル・ベル 『資本主義の文化的矛盾』上 林雄二郎訳 講談社学術文庫

一九七六年 一二五—二六頁

223 Tynbee, A. *A Study of History IV*, Oxford U.P., 1979, p. 119ff. (『歴史の研究』Ⅳ [「歴史の研究」刊行会 一九六八年 一八八頁以下]) *A Study of History V*, Oxford U.P., 1979, p. 376ff. (『歴史の研究』X 一九六九年 一六七頁以下)

224 Spengler, Der Untergang des Abendlandes I Bd., Beckische Verlagsbuchhandlung, 1923, S. 70(Tafeln) (『西洋の没落』第一巻 村松正俊訳 五月書房 一九七八年 六一—六五頁)

225 ホラー・ティウス 『エボーネイー』 一六・二一—六・九、一〇 『詩人ホラード・ティウスとローマの民衆』 中山恒夫著 内田老鶴園新社 一九七六年 三八頁

226 ホラー・ティウス 『歌章』 三・六・一三 藤井昇訳 現代思潮社 一九七三年 一三四頁

227 ゼネカ 「人生の短さについて」 一六・四 橋口勝彦訳 『幸福なる生活に へこて・他篇』 岩波文庫 一九七〇年 八四頁

228 ユウェナーリス 『サトウラヒ』 一・一四七～一四九 藤井昇訳 日中出版 一九九五年 一五頁

229 タキトウス 『トクリコラ』 三〇—三四 国原吉之助訳 世界古典文学全集 二二 「タキトウス」 筑摩書房 一九六五年 三四〇—三四三頁

230 Spengler, op.cit., Einleitung, I Kap. IV Kap. (前掲書 論論・第一章・第四章)

231 Tynbee, A. *A Study of History IV*, Oxford U.P., 1979, p. 5ff. (『歴史の研究』Ⅳ [「歴史の研究」刊行会 一九六八年 一四〇頁以下])

232 Spengler, op.cit., S. 47 (前掲書 四三頁)

233 ゼネカ 前掲書 一三・一～三 七六頁

234 Spengler, Der Untergang des Abendlandes II Bd., Beckische Verlagsbuchhandlung, 1922, S. 127, S. 630 (『西洋の没落』第二巻 村松正俊訳 五月書房 一九七八年 八九頁、四二一頁)

235 Nietzsche, op.cit., S. 13-15 (前掲書 一〇—一一頁)

236 Spengler, Der Untergang des Abendlandes I Bd., Beckische Verlagsbuchhandlung, 1923, S. 70(Tafeln) (『西洋の没落』第一巻 村松正俊訳 五月書房 一九七八年 五七—六五頁)

237 Tynbee, A. *A Study of History IV*, Oxford U.P., 1979, p. 115ff. (『歴史の研究』Ⅳ [「歴史の研究」刊行会 一九六八年 一八一頁]) *A Study of History V*, Oxford U.P., 1979, p. 1ff. (『歴史の研究』Ⅴ 一九六九年 三三頁以下)

238 ウォールバーンク 『ローマ帝国衰亡史』 吉村忠典訳 岩波書店 一九七七年 七八一九〇頁

239 ゼネカ 「マルキアあひ、心の慰めについて」 一九・四～五 「ボリビウスあひ、心の慰めについて」 九・六～九 『道徳論集(全)』 茂手木元蔵訳 東海大学出版会 一九九〇年 三三一三四頁 六三—六四頁

240 ゼネカ 『恋のこころ』 一・一・一～四 同書 一三三一—一三三三頁

241 Tynbee, A. *A Study of History VII*, Oxford U.P., 1979, p. 392ff. (『歴史の研究』 XV [「歴史の研究」刊行会 一九七〇年 一三三頁以下])

- 42 Spengler, Der Untergang des Abendlandes II Bd., Beckische Verlagsbuchhandlung, 1922, S. 381f. (『西洋の没落』第1巻 村松正俊訳 五月書房 一九二七年 1[五七]—1[五八頁])
- 43 Ibid., S. 384 (同書 1[五九頁])
- 44 Toynbee, A Study of History V, Oxford U.P., 1979, p. 74ff. (『歴史の研究』IX [『歴史の研究』刊行会 一九六九年 1—11頁以降])
- 45 「ヨハネの黙示録」一八・一—一九 『聖書』 日本聖書協会 一九六九年 四〇三—四〇四頁

主な参考文献（註にあげたもの以外の邦文文献）

- K・ミングスト 『ボスト冷戦時代の国連』 家正治他監訳 世界思想社 一九九六年
M・ベルトラン 『国連の可能性と限界』 横田洋三他訳 国際書院 一九九五年
二十一世紀研究会 『民族の世界地図』 文藝春秋 二〇〇〇年
シェーリー・ジンガード 『アメリカの分裂』 都留重人監訳 岩波書店 一九九二年
ローマ・クラブ 大来佐武郎監訳 『成長の限界』 ダイヤモンド社 一九八三年
ヴィルシャー、ライター 『爆発する大都市』 都市問題研究会訳 鹿島出版会 一九七六年
村上則夫 『高度情報社会と人間』 松編社 一九九七年
A・D・キング 『文化とグローバル化』 山中弘他訳 玉川大学出版会 一九九九年
トムリンソン 『グローバリゼーション』 片岡信訳 青土社 二〇〇〇年
ベールゼン 『ポスト・モダニズムを越えて』 吉田謙二訳 晃洋書房 一九九六年
P・ワクテル 『豊かさの貧困』 土屋政雄訳 ティビーエス・ブリタニカ 一九八五年
A・ブルーム 『アメリカン・マインドの終焉』 菅野盾樹訳 みすず書房 一九八八年
高坂正堯 『文明が衰亡するとき』 新潮社 一九八二年
グルーブ 『日本の自殺』 PHP研究所 一九七七年
ターン 『ヘレニズム文明』 角田有智子、中井義明訳 思索社 一九八七年
秀村欣二、伊藤貞夫 『ギリシアとヘレニズム』 講談社 一九七九年
ボールスドン 『ローマ帝国』 吉村忠興訳 平凡社 一九七二年
モンタネツリ 『ローマの歴史』 藤沢道郎訳 中央公論社 一九七九年
クルセル 『文学にあらわれたゲルマン大侵入』 尚樹啓太郎訳 東海大学出版会 一九七四年
ペトロニウス 『サテュリコン』 国原吉之助訳 岩波書店 一九九一年
エピクテートス 『要録』 鹿野治助訳 世界の名著13「ギケロ、エピクテートス、マルクス・アウレリウス」
中央公論社 一九六八年
マルクス・アウレリウス 『自省録』 神谷美恵子訳 岩波書店 一九八四年
アウグスティヌス 『神の国』 『アウグスティヌス著作集』 25 教文館 一九八〇年～一九八三年
マキアヴェリ 『政略論』 世界の名著16「マキアヴェリ」 永井三明訳 中央公論社 一九七三年
モンテスキュー 『ローマ盛衰原因論』 井上幸治訳 世界の名著28「モンテスキュー」 中央公論社
一九七二年
チエンバーズ 『ローマ帝国の没落』 弓削達訳 劍文社 一九七三年

二十一世紀はどのような時代になるか。二十一世紀にわれわれは何をすべきか。このような問題を論じた議論は、二十世紀末以来、各方面から盛んに提示されてきた。それは、科学、技術、産業、経済、政治、社会、文明、あらゆる方面からなされてきた。

しかし、それらの多くは、「二十一世紀は「こうなる」というような予測や、「二十一世紀はこうすべきだ」というような掛け声に終始していたようと思われる。確かに、二十一世紀という巨大な岩石を運ぶには、測量も掛け声も必要ではある。だが、それらは、ややもすれば、単なる叫びに終わってしまっているようにも思える。それ自身、未来への不安を表わすものでもあろうが、同じ未来を論ずるにも、もう少し冷徹な認識と現実凝視が必要ではないか。

一般に、未来論には、素晴らしい夢のような未来が訪れるというユートピア論か、あるいは、未来には人類滅亡が待っているというような逆ユートピア論の両極に分かれる傾向がある。

おおまかに言つて、科学技術の方から論じられる未来論には、バラ色の未来を思い描くものが多いように思われる。しかし、それらは、人間の精神的な部分を度外視しているため、科学技術が人間精神に及ぼすマイナス面を見落としていることが多い。現に、二十世紀も、科学技術は長足の進歩を遂げたが、これによつて、かえつて戦争は想像を絶するような悲惨なものになり、人間精神はむしろ退化したのである。二十一世紀も、科学技術はさらに発展していくであろうが、その人間精神に及ぼす影響を無視したなら、片手落ちになつてしまふ。また、環境問題や人口問題などから論じられた未来論には、世界と人類の破滅を予測するようなマイナス予言が多いようにみえる。しかし、ここには、逆に、人間の技術の進歩や、それに向けての努力を見落としている面がある。社会技術も含めた技術の進歩を期待するなら、地球環境問題や人口問題も、それほどまでに破局的なことにはならないのではないか。少なくとも、せいぜい文明が衰退していく程度であつて、人類滅亡というような進化論的段階に至り着くのは、もっと遠い先のように思われる。

実際には、未来は、言われるほど明るく素晴らしい時代にもならず、言われるほど暗く破滅的な時代にもならないものである。特に、二十一世紀に限れば、混沌とした曖昧な時代が続くようと思われる。

そのような見方を背景に、主に人間の精神的な部分に照明を当てて、二十一世紀ができるだけ冷静に眺めてみようとしたのが、本書の意図したところである。もちろん、未来は予測不可能に近く、軽々しく語るべきものではない。未来を語るにも、まず、過去を振り返る必要がある。

ある。また、過去の知恵以外に、未来を照らす灯火はないとも言える。だから、本書でも、二十世紀末にすでに現われていた予兆はもちろん、十九世紀から二十世紀にかけての世界史の傾向、さらに、古代のヘレニズム・ローマ時代の人々の事蹟をも参照しながら、できうるかぎり慎重に未来を見通すことに努めた。未来を語ることは、過去を語ることでもあり、過去を語ることは、未来を語ることでもある。

しかし、その考察の結果は、二十一世紀も、十九・二十世紀の構造と基本的にはそれほど変わっていないと言わねばならない。十九・二十世紀の文明論的特徴を三つあげるとすれば、科学技術の進展と大衆社会化と文化の低落をあげることができる。十九世紀以来の現代文明は科学技術に支配された文明であって、科学技術の進展が、経済、社会、政治の構造、さらに文化や人間精神のあり方をも規定してきた。この点では、十九世紀から、二十世紀を経て、二十一世紀まで、連續したものがある。ただ、時代を追うごとに、この文明構造が地球大化してきた点だけが違う。

とするなら、十九・二十世紀同様、二十一世紀も、科学技術の進歩の反面、文化や精神の問題は残ることになる。文明が進展すればするほど、われわれの魂は文明の毒をもぐみ込むことになるからである。しかも、二十一世紀文明のグローバル化に伴い、この精神的煩落は地球大的に蔓延することになる。

もつとも、すでに、このような問題を真摯に考察していたのは、一九三〇年代前後の西洋の思想家たちであった。ここでも、科学技術や大衆社会化や文化的低落の問題が深く論じられてきた。彼らが問題にした事柄は、二十一世紀も、基本的には変わらないであろう。これら一九三〇年代前後の思想家のうち、本書の中では、特にシュベンクラーとトインビーを取り上げ、彼らの文明論的考察を参考しながら、二十一世紀を考察してみた。彼らの考察の中に、二十一世紀の文明状況についての鋭い洞察を読み取ることができたからである。

本文でも繰り返し語つてきたように、二十一世紀も混沌とした不安な時代になるであろう。混在する文化の中で、伝統から離脱し心の支柱を失った故郷喪失者たちが、水平化し平均化した世界を浮遊していく不安な時代、それが二十一世紀という時代の心象風景である。本書が主に記述してきたことは、このような心の風景である。と同時に、本書では、その叙述を通して、この不安な時代をどのように生きていくべきかについても考察した。

本書は、今まで著者が様々な観点から論じてきた現代文明論に属する著作の一つである。今回は、まだ展開していない「未来について」考察した点が、今までの諸著といくらか趣を異にしているが、その視点は、これまでのものとそれほど変わってはいない。さらに、人間とその文明がそこから生い立ちそこへ帰り行くところを見つめながら、なお確固とした地盤を見出したいという希望に、本書の記述が動かされている点も、これまでと同様である。ただ、現在は、この現代文明論で考察してきた諸問題を思想的に包み越える方向で、著者なりの思索を

展開していきたいと思つてゐる。

平成十三年（二〇〇一年）晚秋

著
者